



Title	日本語複合動詞の研究：意味と統語のインターフェイス
Author(s)	池谷, 知子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51190
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博士論文
日本語複合動詞の研究
～意味と統語のインターフェイス～

提出年月 2003年12月

言語社会研究科 言語社会専攻
池谷 知子

日本語複合動詞の研究
-意味と統語のインターフェイス-
論文要旨

池谷 知子

従来の先行研究において複合動詞は形態論、統語論、意味論的立場からさまざまな検討がなされてきた。しかし、複合動詞がどの部門で形成されるのかという最も基本的なことですら、未だ統一的見解に達していない。

現在、日本語の複合動詞において最も広く受け入れられている分類は影山（1993）で提案されているモジュール形態論である。モジュール形態論では、複合動詞には語彙部門で形成するものと統語部門で形成する2つのタイプがあると考え、複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞という2つに分類した。

影山（1993：75）

A類（=語彙的複合動詞）

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放つ、飛び込む、（隣の人）話しかける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、讃め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ

B類（=統語的複合動詞）

払い終える、話し終わる、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、數え直す、見なれる、登り切る、やりつける

影山（1993）では、語彙的複合動詞は語彙部門（Lexicon）で形成され、統語的複合動詞は統語部門で形成されたとした。そして、5つのテストを通じて、語彙的複合動詞と統語的複合動詞は明確に区別されるべきものだとし、中間的なものは存在しないとした。しかし、その後の様々な研究者によって、語彙的複合動詞の中にも高い生産性を持つものや、統語的複合動詞にも、語彙的複合動詞の特徴を持つものなど、中間的な位置に属するものがあることが指摘されている。

影山（1993）の問題点として大きく2点があげられる。

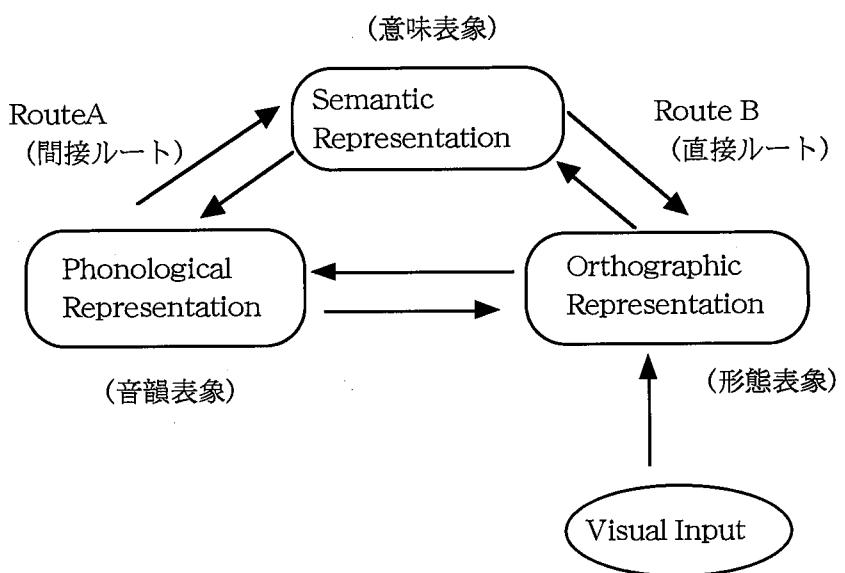
- ・語彙的複合動詞と統語的複合動詞の位置関係はどうなっているのか。
- ・語彙的複合動詞と統語的複合動詞の中間的なものをどのように扱うべきか。

影山（1993）では、語彙的複合動詞であっても、「並列関係」（例　泣き叫ぶ）「様態・手段」（例　押し開ける）「付帯状況」（例　飲み歩く）のように、V1とV2の間に意味的な関係を想定していた。そのため「落ち着く」「付き合う」「見つける」のように、完全に一語化しており、V1とV2との間に個々の意味解釈ができないものは考察の対象から外されていた。また、多くの複合動詞は多義であるが、語彙的、統語的という二分法では複合動詞の多義性が上手くとらえられていない。例えば「見返す」という語には、「昔あなどられていた相手に、立派になった姿を見せつける」「もう一度見直す」「見られたことに対して、こちらも相手を見る」「振り返ってみる」という4つの意味があるが、影山（1993）のモデルでは、このような多義の意味がどうやって決まってくるのかが説明できなかった。

本研究では、複合動詞は「新語」を創造する操作であり、そこで創造された「新語」はその形態（ユニット）全体で脳内辞書（メンタルレキシコン）に登録すると同時に、V1とV2という別個の形態に分解された形でも登録されると考える。つまり、複合動詞は「語」として作られるという「語彙性」と、それが2つの形態に分解できるという「規則性」を両方兼ね備えているのである。

現在、脳科学において、脳内辞書（メンタルレキシコン）における、意味のアクセスがどのように行われているかという研究が盛んになってきている。その中で門田（2003）などによって「二重アクセスモデル」というモデルが仮定され、その存在が確認されつつある。

<図1> 二重アクセスモデル 門田編 (2003:109) () は筆者による注



「直接ルート」

文字ユニット全体から、それに相当する語の意味をメンタルレキシコンから検索する

「間接ルート」

文字ユニットを形態的に分解、分析し、その後に意味を検索する

「二重アクセスモデル」の特徴は、意味へのアクセスに「直接ルート」と「間接ルート」という2つの経路を設定したことである。本研究でもこのモデルを支持し、複合動詞を完全に語彙化した分解不可能なものと、V1とV2に分解可能なものに分類した。そして、「直接ルート」で出されるような、完全に語彙化した複合動詞が持つ意味を「レベル0」の意味とした。

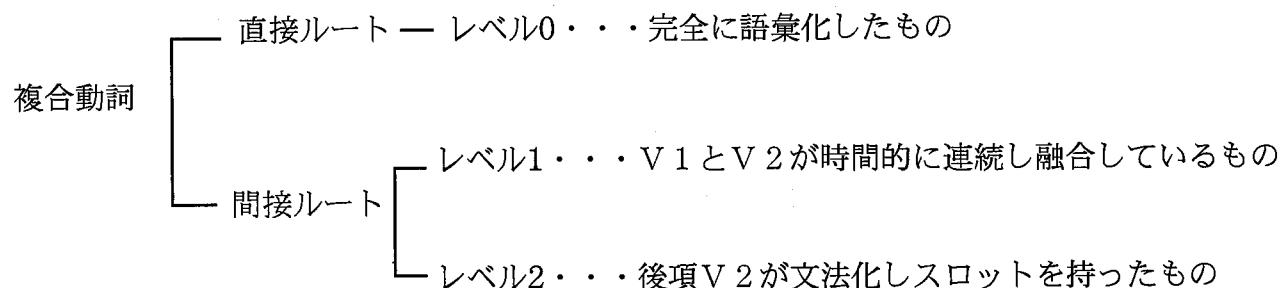
このモデルのメリットは、影山(1993)で切り捨てられていた完全に語彙化している複合動詞が上手く複合動詞の体系の中に位置づけられるだけではなく、規則に従って分解、分析することによって産出される意味と、脳内辞書(メンタルレキシコン)にそのままの形で登録されている語彙的な意味の位置関係がはっきりすることである。

また、複合動詞は、本質的に多義になりやすく、「見返す」のように複数の意味を持つことも珍しくない。多義である「見返す」のような語を見た時、多くの話者が「昔あなどっていた相手に、立派になった姿を見せつける」という複合動詞全体が語彙化した「レベル0」の意味を最初に思いつき、その後で分析的な用法の意味を思いつく。「二重ア

セスモデル」は形態的に分解する手順が必要ない分、「間接ルート」より「直接ルート」で出される意味の方が早く产出されるとされており、これによって、完全に語彙化している意味の方が早く产出されるという時間差の理由も上手く説明できるようになる。

本研究では「間接ルート」の下位分類として、完全に文法化 (Grammaticalization) してV 2が複合動詞になるための「スロット」を持ったものを「レベル2」、まだ、そこまで文法化が進んでいないため「スロット」を持っていないものを「レベル1」に分類した。このように本研究では複合動詞を「レベル0」「レベル1」「レベル2」という3つのレベルに分類する。

＜図2＞複合動詞のレベル



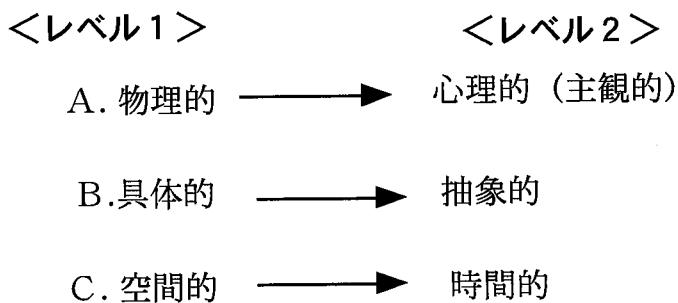
「直接ルート」と「間接ルート」は、対象となる複合動詞が語彙化しているかどうかで通過する経路が大きく異なってくるが、「見返す」でみられるように、両方の意味を持つ複合動詞も少なくない。そこで、「間接ルート」の下位分類である「レベル1」「レベル2」を分ける基準として2つのテストを提案した。「レベル1」の複合動詞を認定する基準としては、V 1とV 2が時間的に連続していることを確認する「テ形」テストが有効であった。また、「レベル2」の複合動詞を認定する基準としては、複合動詞が複合動詞になるためのスロットを持っているかどうかを確認する「する/やる」テストが有効であった。このように一定の基準を設けて、「レベル1」と「レベル2」を分類したが、これらの違いは文法化 (Grammaticalization) の程度の違いであり、段階的なものである。

本研究では文法化 (Grammaticalization) を促進する要因として、「①語用論的推論 (Pragmatic inference)」「②漂白化 (Bleaching)」の2つがあることを仮定し、それが実際の複合動詞内においてどのように働くかを検証した。

「語用論的推論」による文法化には次のような3つのモデルを想定した。これらは独立して働くものではなく、複数が同時に働く場合もある。また、これらは段階的なグラデー

ションがあるので、すべてのものが「レベル1」から「レベル2」の意味になるわけではない。文法化の度合いによっては、「レベル1」の中でおさまるものもある。

<図3> 文法化のモデル



このモデルを使用して、実際に「～あげる」の意味を分析すると次のようになる。まず、「～あげる」は以下ののような意味を持っている。

<位置移動>

- ①具体的な移動・・・押し上げる、蹴りあげる、担ぎあげる、取りあげる、持ちあげる
- ②抽象的な移動・・・見あげる、追いあげる

<動作の完了>

- ③書きあげる、編みあげる、塗りあげる、作りあげる、洗いあげる、歌いあげる

一番、文法化の度合いが低いのが「具体的な移動」を表す①の「押し上げる」である。この「レベル1」の意味しか持たない「具体的な移動」に文法化モデルを当てはめることにより、多義の意味が生まれることが説明できる。

まず、①の「押し上げる」は「B.具体的→抽象的」という文法化の働きをうけて、具体的な移動からその方向性だけ残して②の「見上げる」のような抽象的な移動を表すようになる。

次に「C.空間的→時間的」という文法化の働きをうけて、「上げる」という空間的な移動から時間的な移動を表すものへと変化し、さらにこれらは③の「書き上げる」のようなアスペクトを表すようになる。

最後に「A.物理的→心理的（主観的）」の働きをうけて、主觀性が増大する。つまり、

「～あげる」は単なる完了ではなくて、「良い」という評価性を含むようになる。そのため、「きれいに書き上げた」ということはできるが「*汚く書き上げた」ということはできない。このように、「～あげる」は「A」「B」「C」の3つの方法で文法化されないと説明することができる。

もう1つの文法化を促進する要因である「漂白化（Bleaching）」の例として、「追いかける」の前項V1が「追っかける」のように促音便化するものをあげる。これらは音韻的条件により音便化したものが、意味の漂白化（Bleaching）をうけ、本来の意味を失っていくことを示している。その結果、これらは接辞化し、「おっ」という形式で新たな生産性を持ち、「おったまげる」「おっぱじめる」のように、元の意味からの予測を越えたV2と結合するようになることを証明した。

複合動詞は、複雑な状況を述べるために新しく作られた語であるという「語彙性」と、それが形態的に複合形式を取っているため分解・分析できるという「規則性」の2つの側面を持っており、その2つがぶつかり合う統語と意味のインターフェイスである。程度の差はある、多くの複合動詞がこの両面を持っており、この2つを切り離して複合動詞を分析することは不可能である。従来の先行研究では、この「規則性」ばかりが取り上げられ、複合動詞の「語彙性」が省みられることは少なかった。それに対して、本研究の提案する「二重アクセスモデル」で複合動詞を分析することによって、複合動詞の「語彙性」と「規則性」が上手くとらえられ、多義性を獲得していく過程が明らかになった。また、このモデルは脳科学でもその存在が明らかになっているモデルであり、これにより、脳科学で提案されていることが言語学的にも妥当性があることを確認できた。また、複合動詞の意味の変化は、文法化（Grammaticalization）という一般的な現象に還元できることを明らかにしたことによって、今後、複合動詞を他の文法現象と平行して論じることが可能になり、日本語の体系を解明する手がかりになることを確信している。

**Compound Verbs in Japanese:
Interface Between Semantics and Syntax**
Summary
Tomoko Ikeya

In previous studies, Japanese compound verbs have been analyzed from the morphological, syntactic, and semantic point of view. However, there is still no common understanding among researchers as to whether compound verbs are formed in Syntax or in Lexicon.

The most influential theory in the current linguistics on this topic is the one proposed by Kageyama (1993). He analyzes compound verbs within the framework of Module Morphology. According to this approach, there are so-called lexical compound verbs and syntactic compound verbs. The former are formed in Lexicon, and the latter in Syntax. Kageyama (1993:75) devides compound verbs into type A and type B

Type A --- Lexical Compound Verbs

tobi-agaru “fly up”, *osi-hiraku* “push open”, *naki-sakebu* “cry”, *uri-harau* “sell off”, *uke-tugu* “take over”, *toki-hanasu* “set free”, *tobi-komu* “fly in”, *hanasi-kakeru* “speak to a person”, *kobiri-tuku* “stick to”, *nomi-aruku* “do barhopping”, *aruki-mawaru* “walk around”, *fumi-arasu* “trample down”, *home-tataeru* “to applaude (something)”, *katari-akasu* “talk the night away”, *kiki-kaesu* “ask something again”, *furue-agaru* “tremble violently”, *akire-kaeru* “be dumbfounded”, *moti-saru* “take away”, *waki-tatu* “be boiling hard”

Type B --- Syntactic Compound Verbs

harai-oeru “finish paying”, *hanasi-owaru* “finish talking”, *shaberi-tuzukeru* “continue to talk”, *tabe-sugiru* “eat too much”, *tabe-sokonau* “faul to eat”, *tasuke-au* “help each other”, *ugoki-dasu* “start moving”, *tabe-kakeru* “be about to eat”, *shaberi-makuru* “keep rattling away”, *hasiri-nuku* “run through”, *kazoe-naosu* “count something once again”, *mi-nareru* “get used to seeing”, *nobori-kiru* “climb all the way up”, *yari-tukeru* “start doing”

Kageyama (1993) devised five criteria to determine whether a compound verb belongs to type A or type B. He assumes that all compound verbs belong to one of these two categories. However, the subsequent studies have shown that the clear-cut distinction does not necessarily hold: there is a number of lexical compound verbs with high productivity, and there are syntactic compound verbs that behave like lexical ones.

I point out two major problems that remain unsolved in Kageyama's
summary 1

approach.

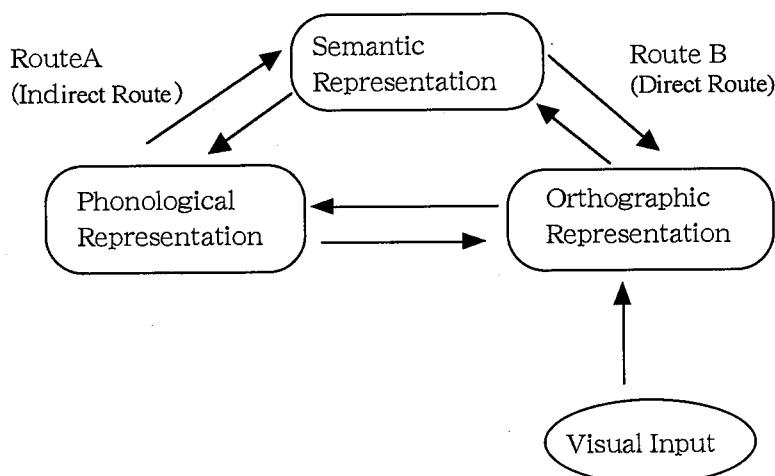
- (1) What is the hierarchical relation between lexical compound verbs and syntactic compound verbs?
- (2) How should the compound verbs that combine properties of both lexical and syntactic compound verbs be accounted for?

Kageyama (1993) assumes that there exists semantic relation between V1 and V2 even in the lexical compound verbs. For example, he recognizes “parallel relation” (e.g. *naki-sakebu* “cry (and scream)”, “manner/means relation” (e.g. *osi-akeru* “push open”), and circumstantial relation (e.g. *nomi-aruku* “do barhopping”). However, this analysis does not cover the compound verbs that cannot be divided into two meaningful parts, V1 and V2. He thus leaves out of his observation verbs like *oti-tuku* “be calm”, *tuki-au* “keep company with” *mi-tukeru* “find”. Furthermore, there is a great number of compound verbs that cannot unambiguously be labeled “lexical” or “syntactic”. For example, *mi-kaesu* has four distinct meanings: “show someone what one can do”, “look a thing over once again”, “stare back at someone”, and “look back”. Compound verbs with multiple meanings cannot be accounted for properly in Kageyama’s framework.

In this study I assume that verb-compounding is a process that renders new words, that are subsequently listed up in mental lexicon as units. At the same time, compound verbs are being decomposed into two forms, V1 and V2, which are also listed up in mental lexicon. On this approach, a compound verb keeps its “lexicity” as a word, and it also exhibits “regularity” in the sense that it is decomposable into V1 and V2.

Recently, the access to word meaning in mental lexicon has received a lot of attention in the field of brain science. Kadota (2003) proposes the Dual Access Model, and gives the supporting evidence from the experiments.

<Figure 1> Kadota (2003:109)



“Direct Route” enables the orthographic unit to access the meaning directly. On the “Indirect Route” orthographic unit is first decomposed and analyzed morphologically before access to the meaning. In this study I apply Dual Access Model to both completely lexicalized compound verbs and compound verbs that can be decomposed to V1 and V2. I further establish that completely lexicalized compound verbs constitute level 0.

The advantage of this model is that it gives a systematic account of completely lexicalized compound verbs which have been mostly omitted in Kageyama (1993). Furthermore, it clarifies the precedence relation between meanings derived by rules and meanings that are already listed up in the mental lexicon.

Compound verbs often have multiple meanings, like *mi-kaesu*. Its most prominent meaning is the lexical one - “to show what one can do to a person who used to looked down upon him”, and I label it here Level 0. Since the Dual Access Model does not involve the procedure of morphological decomposing, the meaning of completely lexicalized compound verbs is accessed first. Thus, completely lexicalized compound verbs take the direct route and access the meaning before those verbs that take the indirect route.

In this study I divide the compound verbs that take indirect route into two groups. In the first group, V2 is completely grammaticalized and thus has an open slot, and in the second V2 does not have an open slot. Thus we get three levels of compound verbs: Level 0, Level 1, and Level 2.

<Figure 2>

Direct Route –Level 0	completely lexicalized compound verbs
Indirect Route – Level 1	V1 and V2 are temporally related
Level 2	V2 is grammaticalized and has a slot

The crucial assumption of this study is that there is a clear difference between “direct route” and “indirect route”. In order to determine the route for verbs with multiple meanings, like *mi-kaesu*, I devised two tests. If a compound verb can be paraphrased as V1-*te* + V2, it means that action in V1 is followed by the action in V2, and a compound verb belongs to Level 1. In order to determine verbs that belong to Level 2, I employ test with *suru/yaru* “do”. The difference between Level 1 and Level 2 follows from the difference in the extent of grammaticalization. I hypothesize there are two main factors that facilitate grammaticalization: (1)pragmatic inferencing and (2)bleaching.

I propose three models of pragmatic inferencing, and assume that they do not exclude each other. Also, I do not claim that all meanings in Level 1

necessarily have to be transported to Level 2.

<Figure3>

Class 1	Class 2
A. Physical	Mental (Subjective)
B. Concrete	Abstract
C. Space	Time

I show how this model works on the example of V2 *-ageru*. The basic meanings of V2 *-ageru* are following:

<spatial movement>

- (1) physical movement *osi-ageru* “push up”, *keri-ageru* “kick (a ball into the air)”, *katugi-ageru* “carry a thing up”, *tori-ageru* “pick up”, *moti-ageru* “pick up”
- (2) abstract movement *mi-ageru* “admire”, *oi-ageru* “put pressure on”

<completing the action>

- (3) *kaki-ageru* “finish writing (a book)”, *ami-ageru* “finish knitting (socks)”, *nuri-ageru* “finish painting (the wall)”, *tukuri-ageru* “finish making (something)”, *arai-ageru* “finish washing (something)”, *utai-ageru* “finish singing (a song)”

If *-ageru* has a meaning of physical movement as in (1), the grammaticalization is still at a low level. Model of grammaticalization shown in Fig. 3 applies to these compound verbs and renders multiple meanings.

Firstly, the meaning of “moving in an upward direction” remains concrete in verbs like *osi-ageru* “push up”, or becomes abstract as in *mi-ageru* “admire” according to B-type grammaticalization. Secondly, the C-type grammaticalization renders the aspectual meaning of *-ageru* “to finish” or “to complete”. Thirdly, when A-type grammaticalization applies, *-ageru* gives the nuance of positive evaluation to the action. For example, adverbial form of *kirei* “neat” can modify *kaki-ageru*, but adverbial form of *kitanai* “messy”, cannot. Thus, it is shown on the example of *-ageru* how the three types of pragmatic inferencing yield multiple meanings.

The grammaticalization by bleaching is exemplified by compound verb *oi-kakeru* “chase”. Phonological change of V1 *oi-* yields *o-kkakeru*, namely there appears a double consonant, and V1 gradually loses its original meaning. V1 *o-* (plus double consonant) becomes a productive prefix, rendering compound verbs like *o-ttamageru* or *o-ppajimeru*.

Compound verbs in Japanese are “lexical” in the sense that they are new words formed in order to describe new situations, but they are also “regular” in

the sense that they are decomposable to V1 and V2. These two aspects of compound verbs interact at the interface of Syntax and Semantics. Although there are differences in degree, most of compound verbs have these two aspects and they cannot be considered separately. The “regularity” has received much attention in previous studies, but the “lexicality” was largely ignored. In this study I employ Dual Access Model in order to explain both of these aspects of compound verbs and to account for their multiple meanings. This study provides linguistic evidence in support to the Dual Access Model as proposed in brain science, and analyzes the occurrence of multiple meanings as a type of larger process of grammaticalization. I believe that future studies of compound verbs in Japanese could benefit a lot from this approach.

日本語複合動詞の研究
～意味と統語のインターフェイス～

*Compound Verbs in Japanese:
Interface Between Semantics and Syntax*

目次

序章 1

1. はじめに 1
2. 本研究で取り扱う形式 3

第1章 日本語の複合動詞についての先行研究 9

1. 複合動詞を扱う部門 9
2. 形態的論立場から見た複合動詞 11
 - 2.1 脳科学における Allen (1978) のモデル 14
 - 2.2 複合動詞後項V2の問題～補助動詞か接辞か～ 16
 - 2.3 複合動詞前項V1の問題～連用形の意味～ 18
 - 2.4 複合動詞の項の継承 20
3. 意味論的立場から見た複合動詞 25
4. 統語論的立場からみた複合動詞 29
 - 4.1 複合動詞の派生は統語部門で行われるという考え方 30
 - 4.2 複合動詞の派生は語彙部門で行われるという考え方 31
 - 4.3 複合動詞の派生は統語部門と語彙部門で行われるという考え方 32

第2章 統語的複合動詞と語彙的複合動詞 38

1. 複合動詞の「語」としての形態的機密性 40
 - 1.1 ① 形態的な不可分性 41
 - 1.2 ② 統語要素の排除 41
 - 1.3 ③ 外部からの修飾禁止 42
 - 1.4 ④ 語彙照応の制約 43
 - 1.5 代用形「そうする」の意味的な要因 54

2.	語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分けるテストの問題点	57
2.1	主語尊敬化テスト	59
2.2	V1受身形テスト	64
2.3	サ変動詞テスト	65
2.4	重複構文テスト	69
3.	複合動詞の相互承接	72
4.	複合動詞は「語」か「語+」か	81
5.	語彙的複合動詞の問題点	86
6.	統語的複合動詞の問題点	92

第3章 脳内辞書（メンタルレキシコン）とアクセスモデル 100

1.	脳内辞書（メンタルレキシコン）とは何か	102
2.	脳内の言語処理からみたメンタルレキシコン	103
3.	二重アクセスモデル	106

第4章 二重アクセスモデルによる複合動詞の分類 108

1.	二重アクセスモデルによる分析とそのメリット～「見返す」を例にとって～	108
2.	「間接ルート」で出されるレベル2の意味～「見返す」を例にとって～	117
3.	「間接ルート」で出されるレベル1の意味～「切り倒す」を例にとって～	120
3.1	① V1（様態）+V2	122
3.2	② V1+V2（移動）	125
4.	複合動詞のレベル移動	127
5.	複合動詞の文法化	134
5.1	語用論的推論（Pragmatic inference）	136
5.2	漂白化（Bleaching）～「追いかける」「追っかける」に見られる接辞化の条件～	145
6.	複合動詞のイディオム化（語彙化）	158
7.	複合動詞の非対称性	161

第5章 各レベルの複合動詞とそれをめぐる問題 165

1. 「レベル2」の複合動詞 167

1.1 影山の統語的複合動詞と重なるもの 169

1.2 影山の語彙的複合動詞と重ならないもの 170

2. 「レベル1」の複合動詞 173

2.1 動詞のテ形接続と複合動詞の境界線～どのような時に2つの動作が1つの動作と捉えられるか～ 175

2.2 「レベル1」のレベル移動 187

3. 「レベル0」の複合動詞 189

4. まとめ 197

参考文献

序 章

1. はじめに

新しい事態をどのような方法で言語化するのかというのは、1つの方策だけに限らず色々な可能性がある。もちろん、1つの言語の中でもいくつかの異なる方策を用いて言語化するのが普通であるが、全体的傾向としてその言語が好む方策がある。この傾向は特に複雑な概念を表す動詞において顕著に表れる。

影山・由本（1997：3）

複雑な動詞概念を表現するために日本語と英語が採る方策の違いである。すなわち、日本語が複合語という形態的な語形成を活用するのに対して、英語は複合動詞という形態ではなく、意味構造を直接的に操作することで複雑な述語概念を構築していく。

これまでの日本語と英語の比較対照研究においても、英語では複雑な述語概念が動詞1語で表されるが、日本語では目に見える形で単語を重ねて、複雑述語を形成することが知られている。例をあげてみよう。（例は 影山・由本（1997：4）より抜粋）

- (a) He laughed/smiled/chuckled/giggled/grinned/guffawed.
(彼は ハハハ/ニコニコ/クスクス/イヒヒ/ニカッ/ゲラゲラと 笑った)
- (b) She cried/wept/sobbed/blubbered.
(彼女は オイオイ/シクシク/メソメソ/ワアワア 泣いた)

「笑う」「泣く」という動作の様々な様態を表すのに、日本語では「笑う」「泣く」という動詞に「ゲラゲラ」「シクシク」などの様態を表すオノマトペを付け加えている。それに対して、英語では「guffaw」「sob」のように1単語の中に「ゲラゲラ+笑う」「シクシク+泣く」という概念を含んでいる。

このように、英語では複雑な述語概念を1つの単語で表すのに対して、日本語では複合

的に表す傾向がある。この傾向はオノマトペに限ったことではない。「ゲラゲラ笑う」「シクシク泣く」では「副詞+動詞」で笑い方、泣き方様態を表しているが、「笑い転げる・笑い崩れる」「すすり泣く・むせび泣く」のように「動詞+動詞（複合動詞）」を使っても笑い方、泣き方の様態を表すことができる。これらはオノマトペによる合成、複合動詞による合成という差はあるが、二つの要素をくっつけて複雑な状況を述べるという点では共通している。

このように日本語は複合形式が非常に発達した言語であり、その複合形式には様々なものがあるが、本研究では特に複合動詞と呼ばれる「動詞+動詞」という形式について考察することにする。これらの「動詞+動詞」という複合形式は英語においては、stir-fry（炒める）、tumble-dry（乾燥機で回して乾かす）、drip-dry（絞らずに干す）など、家用語¹が数例あるくらいで他にはほとんど見られないことが知られており、一般的には英語には複合動詞はないと言われている。

あえて誤解を恐れずに言うのなら、複合動詞はテンスやアスペクトと異なり、言語にとってどうしてもなくてはならないというような性質のものではない。そのことは英語をはじめとして、複合動詞を持たない言語が存在することからも証明されている。その一方で、日本語や韓国語をはじめとして、ドイツ語にも似たような現象が見られるなど、複合動詞を持つ言語が少なからず存在する。つまり、これらのことから、複合動詞が汎言語的な現象ではないにしても、別に日本語に特有の現象ではないことがわかる。

日本語と英語の語構成の違いを見るには、実際の文学作品がどのように翻訳されているかを比べてみると面白いと言われている。このような英語と日本語の表現形式の違いを田守（2002）はルイス・キャロルの「不思議な国のアリス」と「鏡の国のアリス」の原文と翻訳を例に挙げて比較している。

(c) …then it watched the Queen till she was out of sight; then it *chucked*.

…それから女王の姿が見えなくなるのを待ってからくっくっと笑い出した。

(d) …though still sobbing a little now and then, …

…それでもまだ、ときおりしくしく泣きじゃくる。

¹ 例は伊藤・杉岡（2002：132）から引用した。

(e) …it panted, bending its *quivering* head toward Alice, …

…鬼百合は叫び、左右に激しく実を揺らせ、興奮してぶるぶるえだした。

英語には複合動詞はないが、英語であっても日本語と同じように複合形式で複雑なイベントを述べる場合もある。句動詞 (phrasal verb) と呼ばれるもので、動詞が up, down, away, off のような副詞と一緒に使われる。これらの副詞は動詞の意味を明確にし、臨場感をもたらすという働きをしている。

(f) …, who was gently *brushing* away some dead leaves that had *fluttered down* from the trees upon her face.

…顔にひらひら舞い落ちてきた枯れ葉を、姉が優しく払いのけていたのだ。

本研究の目的は日本語における複合動詞の体系を明らかにし、複合動詞がどのような働きをするのか、またどのような動機を持って使われているのかを考察することである。そして、複合動詞の意味がどのように決定されるのかを、脳内辞書（メンタルレキシコン）へのアクセスがどのように行われているかということを通じて分析していく。

始めに断っておきたいこととして、本論文の例文番号、図や表の番号は通し番号ではなく、章ごとに構成されている。また、例文の判断についているマークは次のようになっている。

- ① 「？」……やや不安定。（人によっては許容できる可能性がある）
- ② 「？？」……かなり不安定。
- ③ 「＊」……許容不可能。完全に言えない。

2. 本研究で取り扱う形式

日本語の動詞が連続する形には2つの形式がある。

1つは「持ってくる」のように前項がテ形をとるもので、もう1つは「持ち上げる」の

ように連用形と言われている動詞語幹をとるものである。これらは両方とも動詞が連續する形式であり、複合動詞というカテゴリーの中にこの両方が入れられることも多い。このように、テ形も含めて複合動詞を広くとらえる立場もあるが、本研究においては、複合動詞を狭義にとり「持ち上げる」のような前項V1が動詞語幹（連用形）を取るもののみを複合動詞と呼び、本研究の考察対象にする。そして、「持ってくる」のように前項V1がテ形になっているものを「テ形接続」と呼ぶこととする。

考察に入る前に、テ形接続と複合動詞の位置関係を簡単に確認しておく。これらは、動詞を連續して述べるという点では共通しており、この2つが言い換えられる例も多々ある。ただ、たとえ言い換えることができたとしても、テ形接続は完全に統語的なものであり、形式的な動詞連續を表すが、複合動詞は複合した形態で1つの動詞になっている。つまり、「桜を切って倒す」の動詞は「切る」「倒す」の2つであるが、「桜を切り倒す」の動詞は「切り倒す」1つである。このことはV1とV2の間に別の要素を入れることでわかる。普通、語と語の間には他の要素を入れることができないので、このことを利用して、テ形接続と複合動詞の違いを確認する。

① 桜を「切る+倒す」→かき混ぜ操作

切って桜を倒す。

*切り桜を倒す。

② 日記を「書く+残す」→かき混ぜ操作

書いて日記を残す。

*書き日記を残す

③ 花子が「泣く+帰る」→「は」の挿入

花子が泣いては帰った。

*花子が泣きは帰った。

このように、テ形接続はV1とV2は独立した動詞であるが、複合動詞はV1とV2が合わさって1つの動詞となっている。このことは、テ形接続が「日曜日は、掃除をして、洗濯をして、布団を干して、買い物に行って、庭の手入れをした」のようにそれぞれの目的語を残した形式で自由に連続させることができるのでに対して、複合動詞はV1+V2で1語になり、1つの目的語しかとらないことからもわかる。複合動詞とテ形接続の詳しい

使い分けについては後の5章で詳しく考察する。

また、テ形接続には、上のようなわゆる動詞連続の形式と、補助動詞と呼ばれる形式がある。それらの例をあげてみよう。

益岡・田窪（1992：17）

◆アスペクトに関係するもの

「～ている、～てある、～てしまう、～ていく、～てくる」

◆授受に関係するもの

「～てもらう、～ていただく、～てくれる、～てくださる、～てあげる、～てやる、～てさしあげる」

◆その他

「～ておく、～てみる、～てみせる」

これらは、後項であるV2が文法化したもので、元の意味から拡張した意味をもつものが多い。ただ、「～ている」のように非常に文法化が進んだものから、そうでもないものまで、テ形接続の文法化には様々なレベルがある。また同じ形式でも単なる動詞連続の用法と、補助動詞化した用法の間はクリアカットに分かれるものではなく、どちらにでも解釈できるようなものもある。

- ④ a. 太郎が走ってくる。（=来る）
 - b. 家でご飯を食べてくる。
- ⑤ a. 部屋をのぞいてみる。（=見る）
 - b. 納豆を食べてみる。
- ⑥ a. 冷蔵庫にケーキを入れておく。（=置く）
 - b. ビールを買っておく。

上記の例において、aは動詞連続に近い用法で、bは補助動詞化した用法である。aの用法の時は、後項であるV2の意味が残っており、V2で言い換えができるが、文法化の進んだbの用法になるとV2には実質的な意味を置くことができなくなり、V2での言い換えが不可能になる。

このように、補助動詞化した用法であっても、V1とV2の間に「は」を入れることができる。

- ⑦ 家でご飯を食べてはくるが、何か食べるものを用意しておいてもらえるとありがたい。
- ⑧ そんなに勧めるなら納豆を食べてはみるが、まずかったら吐き出すかも知れない。
- ⑨ ビールを買ってはおくが、自分の好みで選ばせてもらうよ。

このように、非常に文法化が進んだ、つまり、補助動詞化した形式であっても別要素である「は」を入れられることからも、テ形接続は「緩やかな」動詞結合であるのに対して、複合動詞は「緊密な」動詞結合だといえるだろう。

ただ、かき混ぜ操作に関してはaとbで振る舞いが異なる。10の例をかき混ぜしてみると、同じ補助動詞化したものでも動詞連続に近いaでは、かき混ぜ操作を許容するが、完全に文法化して補助動詞となったbは、かき混ぜ操作を受け付けない。

- ⑩ a. のぞいて部屋を見る。 (=見る)
- b. *食べて納豆を見る。

このように、文法化のレベルによって、その振る舞いはやや異なるものの、テ形接続はあくまで、V1とV2が独立した形式であり、ゆえに高い生産性を持つ。反対に連用形接続はV1とV2が融合した形式であり、語としてまとまろうとする方向性を持っている。ただ、テ形と連用形はこのような差違があれども、1つの点で共通している。それは、動詞が2つ並んだ時、前項と後項のどちらかが文法化していくという傾向である。

テ形接続であっても複合動詞であっても、動詞が二つ並んだ時、前項あるいは後項のどちらかが文法化するのは偶然ではなく必然である。この背景には動詞が2つ並んだとき、どちらかがメインイベントを表すかはっきりさせたい、という自然な欲求が隠されていると考えられる。メインイベントさえ決まってしまえば、それから外れた動詞は意味の漂白化(Bleaching)がおこりやすくなり、本動詞の意味から少しずつずれていくようになる。

複合動詞は、機能的には一単語であるが、形態的には「動詞+動詞」という複合形態をとっている。つまり、一単語でありながら分析可能であるという潜在的曖昧性を持っているのである。複合動詞は、恣意的に創造され、脳内辞書（メンタルレキシコン）に記憶さ

れるという「語彙性」と、2つの構成素を持ち、それがある規則によって組み合わせられるという「規則性」という2つの面を持っているのである。この二面性が複合動詞の分析において、一筋縄でいかない複雑さを与えてきた要因である。

本研究ではこの複合動詞の「語彙性」と「規則性」という2つの面を積極的にとらえ、複合動詞を見たとき、どのようにその意味的情報、統語的情報が処理されるかということを分析することによって、複合動詞の分類を試みることにする。本研究では、複合動詞を意味と統語のインターフェイス (interface) であると考え、この2つがどのように接しているのかを考察していく。そして、複合動詞は臨時的、一時的な語として創造されたものが、規則性を持った文法的要素として登録されていくという、ダイナミズムを持っていことを証明していきたい。

本件研究の構成は以下のとおりになっている。

1章では、従来の先行研究における複合動詞の研究を概観する。複合動詞は、これまで、形態論、意味論、統語論などの様々な立場から論じられてきた。それらを検証しながら、先行研究でどのような先行研究が行われてきたかを確認していく。

2章では、影山（1993）「文法と語形成」で述べられた「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の分類を確認していく。これらの問題点を確認することによって、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」という二分類の妥当性と、このように分けることによって起こる問題を考える。

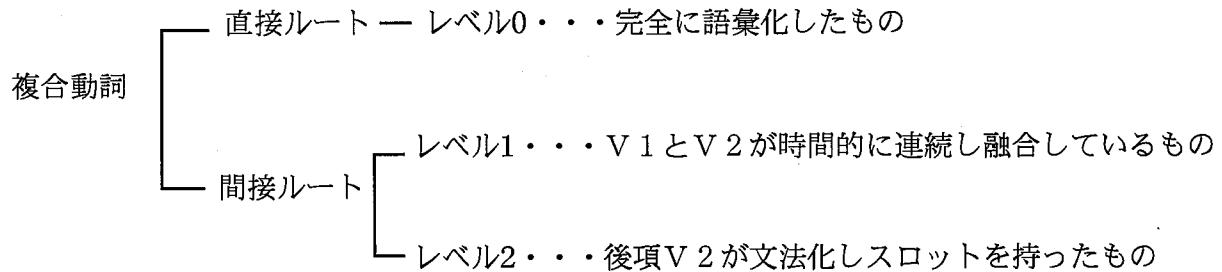
3章では、本研究で使う「二重アクセスモデル」について解説する。「二重アクセスモデル」とは視覚呈示された語が、どのように脳内辞書（メンタルレキシコン）にある意味にアクセスするのかを表した、脳科学におけるモデルである。このモデルは、門田（2003）などで提案されており、現在、実験によってその有効性が確認されつつあるモデルである。

4章では、「二重アクセスモデル」を使って、複合動詞がどのように脳内辞書（メンタルレキシコン）において意味が確定されるかを概観する。本研究では、脳内辞書（メンタルレキシコン）へのアクセスに大きく分けて2つあると仮定した。

1つは、複合動詞全体を1つのユニットとして検索をかける「直接ルート」であり、もう1つは、複合動詞をV1とV2という分析的な形態として計算する「間接ルート」である。そして「直接ルート」で出される意味として「レベル0」、「間接ルート」で出される意味として「レベル1」と「レベル2」があるとした。

本研究における複合動詞分類のフレームをまとめると以下のようになる。

<図1>



複合動詞の意味のレベルは固定された物ではなく、色々な要因によって移動する。この複合動詞のレベルの移動に、「文法化」と「イディオム化」という2つの要因が関わっていることを確認する。

5章では、各レベルにどのような複合動詞が入るかを詳しく検討する。そして、本研究における分類と影山（1993）で述べられている「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」がどのような位置関係にあるのかを見ていく。

第1章

日本語の複合動詞についての先行研究

1. 複合動詞を扱う部門

これまで、複合動詞は形態論、意味論、統語論の3つの分野でそれぞれ独立して研究されることが多く、これらが積極的に結びつけられることは少なかった。先行研究に入る前にこれらの概略を簡単に見た後に、個別の論を詳しく見ていくことにする。

まず、形態論的立場から、複合動詞を眺めてみる。複合動詞の後項V2に焦点を当てれば、それらは派生や屈折といった接辞的な点、あるいは複合という語形成の点から分析することが出来る。つまり、複合動詞の後項V2である「～はじめる」「～つづける」「～おわる」「～すぎる」「～なれる」などが、補助動詞あるいは接辞とよばれるような規則性をもったものとして働いているという分析である。このように複合動詞を捉えると、複合動詞の前項V1と後項V2の結合は規則的で、かつ、予測可能なものに見える。また、前項V1に焦点を当てれば、動詞の連用形という活用の問題になり、連用形がどのような働きをしているかという問題にもなる。

次に、意味論的立場から複合動詞を眺めてみる。意味の問題は日本語学で以前より議論が重ねられてきた問題で、それには大きく分けて3つの問題がある。

1つ目の問題として、形態と意味のズレがある。複合動詞はその名の通り、2つの形態素の「複合」から成り立っているが、複合動詞の中にはあきらかに2つの形態素の和とは考えられないものが数多く存在する。例えば、「心が落ち着く」の「落ち着く」は形態的には「落ちる+着く」という2形態に分けることができるが、「落ちる」と「着く」の意味を足しても、「落ち着く」の意味である「心が静まる」は出てこない。また、「見舞う」を「見る+舞う」に分解したものから、「病気になった人を訪れる」という意味は出てこない。このように、複合動詞は形態と意味があわないものが数多く存在し、それらの意味が複合された際にどのように出てくるかが問題になる。

2つ目の問題として、複合動詞の多義性があげられる。「隣の人に話しかけた」の「～

かける」は運動の方向性を表しているが、「危うく死にかけた」の「～かける」は、「死ぬ直前」というアスペクトを表している。また、「ご飯に合わせ酢をふりかけた」の「～かける」は本動詞「かける」の意味を残しており、「撒く、浴びせる」という動作を表している。このように、複合動詞後項V2は多義であるものが数多く存在し、その意味の広がりと相互の位置関係が問題となってきた。

3つ目の問題として、複合動詞の使い分けの問題がある。例えば、「始動」「開始」といわれる形式には「雨が降りはじめる」「雨が降りだす」「雨が降りかける」のように似たような意味を表す異形態が複数存在する。先行研究では、これらがどのように使い分けられているのかが考察の焦点となってきた。

最後に統語論的立場から複合動詞を眺めてみる。日本語の複合動詞を概観する前に、そもそも統語論において語形成がどのように扱われてきたかという、その背景から検証することにしよう。生成文法において、語形成がどのように行われるかということについては、次のような3つのアプローチが行われており、現在でも論争が続いている。

- ① レキシコンはあくまで静的な収納庫であり、語形操作は統語部門で行われる
- ② すべての語形成がレキシコンで行われる
- ③ 語形成は、レキシコンで行われるものと統語部門で行われるものがある

語形成におけるアプローチの多様性は、生成文法の理論的発展と絡んでいる。1960年代後半から1970年代前半にかけて隆盛を極めた生成意味論では、語の形成は文の生成と同じように統語部門で取り扱うとされた。これに対する反論として、Chomsky (1970) は語と句の違いを明らかにし、屈折接辞は統語部門で、派生接辞は語彙部門で形成するという「語彙論」の仮説を示した。この Chomsky (1970) の仮説をめぐって様々な検討がなされた中で、屈折を含むすべての形態操作を語彙部門で行うという強い語彙論が生まれた。(Jensen& Stong-Jensen (1984))

これに対して、最近、語彙化されて辞書に登録された語を除いた語の形成は統語部門の問題であるという、生成意味論を復活させた考え方方が再び出てきており(Lieber(1992))、ミニマリスト・プログラムにも影響を与えている。

このように、英語ですら語形成をどこで扱うかは、統語部門と語彙部門の間を行ったり来たりしており、現在ではこの3つの立場が併存している状態である。このように、語形

成がどこで行われるか定まらないのは「語」のもつ複雑な性質に起因している。「語」の中には、いわゆる「語」的な恣意的なものから、「句」的な規則性をもったものまで、その内実は一律ではない。このように「語」と「句」は概念的には明確な区別があるが、實際にはそれらの境界線はそれほど明確なものではない。

英語などの屈折型言語ですら、語形成がどの部門で行われるかはっきりしないのに、語基に接尾的な要素を次々と累加していくことによって語を作る、膠着型の言語である日本語では、なおさらわかりにくくなる。宮岡（2002）では、日本語と同じ膠着型言語であるエスキモー語と日本語を分析する「『語』とはなにか」の中で、「語」について次のように述べている。（下線は著者による）

宮岡（2002：18）

シンタックスとだけいえば、ふつう、語順、文の変形、文の内部の操作の問題など、文における統語法だけを考えてしまいやすいからである。しかし（日本語もかなりその傾向がつよい）複統合的な言語では、語がしばしば文的な小宇宙を形成する。形態素が結合して語をつくる形態法的な過程が、分析的な言語ならば、語が結合して文をつくる統語的な過程にも似た生産的な結節機能をもつからである。

このように、日本言は「語」に、かなり複雑な形態的結合をとることができ、このことは、日本語の複合動詞をどの部門で扱うべきか、という最も基本的な問題を複雑にしてきた。それでは、現日本語複合動詞の研究が形態論、意味論、統語論の立場から、どのように研究されてきたのかを見ていきたいと思う。

2. 形態論的立場から見た複合動詞

それでは、日本語の複合動詞について形態論的な立場からどのような問題があるか見ていくことにする。その前に、一般的に形態論がどのようなものを扱うのかを英語で確認する。言語学の分野のなかでも形態論は非常に立場が不安定な分野で、他の分野との関係が常に問題になってきた。近年、脳科学と言語学が互いに歩み寄りを見せている中、脳内の

単語処理と語彙処理の問題と関係して、形態論は脳科学と言語学がぶつかりあう最前線に成りつつある。

後に詳しく述べるが、本研究は最近の脳科学の研究で明らかにされつつある脳内の語彙処理のシステムを利用して複合動詞の分析を行う。よって、従来の形態論や意味論、統語論とはかなり異なるパラダイムを取ることになる。その手始めとして、まず、形態論を概観しながら、従来の形態論で述べられてきたことが、現在、脳科学の研究においてどのように捉えられているかということを確認したいと思う。

まず、形態論を定義してみる。形態論とは、どのような要素がどのように組み合わさって語を作り出しているのかという「語形成」に関わる論である。形態論は単語以下の単位を扱っているため、通常、文法論では統語論の前に位置づけられているが、形態論で受けた変化が統語構造に影響することもあり、他の部門と独立して存在しているわけではない。

ここで形態論について大石（1988）で述べられていることを引用する。

大石（1988：3）

形態論では辞書（あるいは語彙目録（lexiconとも呼ばれる））と、語を作り出す形態規則（すなわち、形態規則（morphological rule）あるいは、語彙規則（lexical rule））を含む。辞書には、語を作り出す要素である語と接辞がリストになって記載されており、新しく作り出された語も、また、このリストに加わることになる。

論理的に可能な語構成の型は以下に示すとおりであり、英語においてはすべての型に対応する例が存在する。英語における語構成について簡単に見たあと、脳科学でそれがどのように証明されているかを見てみることにする。

＜英語における語構成＞

- (a) 屈折 (walked)
- (b) 派生
 - 接尾辞付加 (child-less)
 - 接頭辞付加 (un-kind)
 - 特別な接頭辞付加 (en-large)

- (c) 複合語 (coffee-shop)
- 特別な複合語 (passer-by)
- (d) 転換(blanket (毛布で覆う))

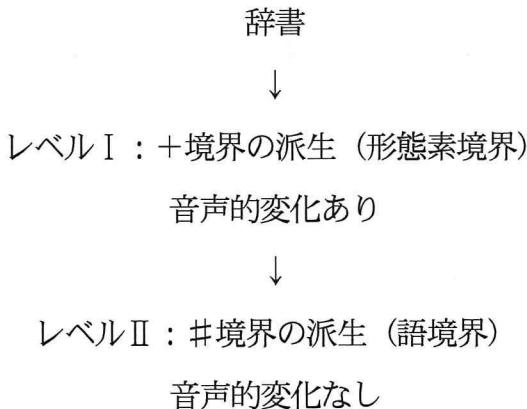
英語の動詞の屈折形としては、三人称単数現在形、過去形、過去分詞形、-ing 形がある。名詞には数と格の屈折形がある。屈折と派生の根本的な違いは、屈折が統語論における他の要素との関係（時制、数など）との呼応を示すのに対して、派生は新しい語を作るためのものである。よって、派生ではその接辞が付くことによって、基体に意味や品詞の変化をもたらす。屈折は「基体+接辞」の意味が合成的なのに対して、派生語の意味は合成的ではない。屈折接辞-ed がついた語は、常に「過去」という意味を担うが、派生接辞-action がついた語の関係は一定ではない。

- ① organize (組織する) organization (組織されたもの)
- ② fix (固定させる) fixation (固定されること)

動詞に同じ-action が付加されたものであっても、①は「もの」を表し、②は「こと」を表すことから、-action という接辞は必ずしも同じ意味を表すわけではないことがわかる。また、派生接辞のうち接頭辞は品詞を変えないことが知られているが、右側主要部の原則のため、接尾語は基体の品詞を変えることが多い。

また、Allen (1978) は強制の移動や音の変化など何らかの音声的変化をもたらす接辞をレベル I、そのような変化をもたらさないものをレベル II として、音韻境界を用いて接辞を分類した。平たく言えば、レベル I は語の内側にあり、レベル II は語の外側についている接辞ということができるだろう。そして、レベル I の派生はレベル II の派生より先に適応されたとした。これを「レベル順序づけの仮説」という。よって、レベル I の接辞の外側にレベル II の接辞が付くことを述べた。

<図1>レベル順序づけ



なお、レベルI、レベルIIにおける接辞は次のようなものがあげられている。

レベルI：強勢の移動や音の変化など、なんらかの音声的変化をもたらす

democracy, humidity, possible, librarian, width, confusion, pleasant, cigarette,
impossible, ennoble

レベルII：音声的変化なし

believable, childlike, featherless, cheerful, employment, sisterhood, friendly,
wooden, talented, quickly, misunderstand, dishearten

2.1 脳科学におけるAllen (1978) のモデル

近年、「言語と脳」の研究の発展がめざましく進歩している。脳科学の分野で失語症の研究が進むにつれ、脳内における形態論、脳内辞書（メンタルレキシコン）についての研究が次々と発表されるようになった。このAllen (1978) のモデルの妥当性を証明するために、Kehayia, Caplan & Pigott (1984) が、英語の失文法失語患者を対象に実験を行った。失文法失語は、脳の左側頭葉にあるブローカ野に損傷を受けると起こる失語症の一つで、言語学観点からの研究が最も進んでいる。彼らの話し方には助詞や助動詞など機能範疇(functional category)に属する単語が省略され、名詞や動詞など語彙範疇(lexical category)に属する語が残るという特徴がある。

<失文法失語患者の話し方>荻原 (2002 : 194)

- (a) 自分 思ったあのう 相手 伝えない。 (患者の実際の発話)
- (b) 自分が 思ったことを 相手に 伝えられない。 (患者の意図している発話)

<失文法失語患者の特徴>

語彙範疇に属する語は保持されるが、機能範疇に属する語は失われやすい。

レベルⅠは語の内側で派生されるので、レキシコンで作られる語に含まれる接辞と考え、

レベルⅡは語の外側で派生されるので、語形成規則によって付加される接辞と考える。

- ① レベルⅠ (レキシコン) +ity, +al (名詞化), +al (形容詞化)
- ② レベルⅡ (語形成規則) #able, #ness, #ment

これらがついた単語10個を5名の失文法患者に読ませたところ、次のような結果となつた。

- ① レベルⅠ (レキシコン) 正答率 76~88%
- ② レベルⅡ (語形成規則) 正答率 22~42%

つまり、レキシコンで作られているレベルⅠの復唱は容易であるが、語形成規則で作られるレベルⅡは復唱が困難であることが分かる。失文法失語患者は語彙範疇に属するものは保持されるので、レベルⅠの接辞は障害の影響を受けないが、レベルⅡの接辞は屈折と同じように障害の影響を受けやすいことが分かる。このように、同じ接辞であっても、その語形成のメカニズムの違いによって差違があるのである。

これと同趣旨の研究に Mathews, Obler, Harris & Bradly (2001) がある。彼らは同じ -er で終わる3つの形式をとりあげて、4名の失文法患者に音読の検査をした。

- ① -er で終わる屈折接辞 (e.g. richer) 正答率 62%
- ② -er で終わる派生接辞 (e.g. helper) 正答率 59%
- ③ -er で終わる単純語 (e.g. chowder) 正答率 77%

ここでは、単純語と屈折 ($P > .03$)、単純語と派生語 ($P > .05$) で有意差が見られた。つまり、派生接辞であっても、-er という生産的で意味が透明な性質を持つものは単純語と比べて、屈折と同程度に障害の影響を受けることが示されている。このように、従来、形態論で言わされてきたことが、脳科学の分野でも証明されつつある。

2.2 複合動詞後項V2の問題～補助動詞か接辞か～

それでは、日本語において語はどのようにになっているだろうか。まず、単語は単純語と合成語にわけられる。そして、合成語の中に派生と複合が入れられている。

これらの関係を阪倉 (1986) から引用した図で示す。

<図2> 阪倉 (1986)

単語 (A) 単純語

- (B) 合成語 (1) 複合語 (二つ以上の構成語より成る)
- (2) 派生語 (一つの語基と一つ以上の接辞とよりなる)

単語には「山」「道」「鳥」「大人」のようにこれ以上の形態素に分けられない純粹な単語と、二つ以上の要素に分析できる合成語に分けられる。合成語の中でも「山道（やまみち）」「山鳥（やまとり）」のようにそれぞれの構成素である「やま」「みち」が自立できるものは「複合語」と呼ばれ、「ことり」「大人っぽい」のように、単語の語幹に独立できない要素である「こ～」「～っぽい」がついて形成されたものを「派生語」と呼ばれている。そして、このような非独立的な要素は「接辞」と呼ばれている。つまり、単独で自立できる要素かどうかというのが「複合」と「派生」の境界線ということになる。

それでは、複合動詞は複合か派生かということになる。もちろん、名前をみれば「複合」であるが、実はその名の下に様々なものが入れられている。複合動詞と聞いて、すぐに思いつく「切り倒す（きる+たおす）」「走り始める（はしる+はじめる）」のような例はV1とV2の意味の和から複合動詞の意味が出てくるため、正真正銘の「複合」動詞ということができるが、あきらかに「複合」と言えないような複合動詞の例がある。

<後項V2が自立できない複合動詞>

走り込む（はしる+こむ？），言いかねる（言う+かねる？），探しあぐねる（さがす+あぐねる？），しゃべりまくる（しゃべる+まくる？），降りしきる（降る+しきる？），黙りこくる（黙る+こくる？）行きそびれる（行く+そびれる？）ほめそやす（ほめる+そやす？），眠りこける（眠る+？こける）

<前項V1が自立できない複合動詞>

突っ走る（つく？+はしる），おったまげる（おち？+たまげる），こみ上げる（こむ？+あげる），こびりつく（こびる？+つく）しょげかえる（しょげる？+かえる）

<前項，後項とも自立できない複合動詞>

突っ込む（つく？+こむ？）

このような例は前項V1あるいは，後項V2の要素が自立できない（あるいは，自立語として存在しない）ものをとっている。これらの例は別に特別な例ではなく，複合動詞の中に数多く存在している。このように複合動詞と呼ばれるものの中にも，片方の要素が自立的ではなく，「複合」とは言えないようなものが数多く混じっている。また，もう1つの問題として，複合動詞と呼ばれるものの中には，補助動詞と呼ばれる一群がある。

阪倉（1986：8）

「損なう」「かける」のようなものは，ふつう補助動詞と呼ばれている，日本語のシントックスとして合成語において，その中心となってこれを意味的・機能的に取纏め包摶される関係にある。（中略）これに対して，右の複合動詞の場合には，前部要素に対する修飾語の付加が可能であったということは，それだけその意味の具体性が薄れ，いわば形式化されていて，広い包摶力を持ち得るものになっているということである。

そして，この補助動詞と呼ばれるものは，既に，いわゆる接尾語に近い。右の「かける」や「はじめる」「おわる」「さす」「てしまう」「ておく」「てみる」のようなアスペクトに関するものなどは，接尾語と考える方が適当であろう。

ここまでくると、論が循環していることがわかる。つまり、複合語と派生語の違いは形態的に自立できるかどうかであった。複合語は自立的な自由形態素が2つ結びついたものであり、派生語は語幹に非自立的な接辞がついたものであった。ところが、複合語の中でも「～はじめる」のように、さまざまなV1を取っているものは接辞に近い、言い換えれば、派生語に近いと述べられているのである。確かに「～はじめる」は様々な語に付くことができるが、本動詞「～はじめる」の意味をよく残しており、前項V1とV2の意味は合成的である。

つまり、接辞と複合の境界線がはっきりしないのである。形態的にみれば、「突っ走る」の「つっ」や「探しあぐねる」の「～あぐねる」のように自立できない動詞的要素を接辞と言うことができるだろう。これらは「突っ走る」「言いあぐねる」のようにいくらかの生産性をもっているが、その生産性は大変限られたものである。

それに対して、補助動詞と呼ばれるものは様々な語に付くことができ、様々な語に付くことができるゆえに、接辞的だと述べられている。つまり、複合動詞においては、何が接辞で何が複合なのか、その基準が非常に曖昧なのである。

2.3 複合動詞前項V1の問題～連用形の意味～

形態的にみれば、複合動詞前項V1は連用形をとっている。連用形はその名の通り、用言に連なる形式で、城田（1998）では次のように述べられている。

城田（1998：51）

連用形は、動詞Aが副詞化し、他の用言ないし、用言に導かれる文Bにかかり、修飾するかたちである。副詞化といっても、他の用言に包み込まれる形で融合的にかかる形容詞や、状詞の副詞形ことなり、動詞Aは或程度の独立性を保つつつ、Bにかかる形態である。

この他に連用形は名詞的用法ももっている。つまり、日本語の動詞は「(にが)笑い、(うさぎ)飛び」のように連用形を名詞として使うことができるということである。このようにして作られた名詞は普通の名詞と区別して「転換名詞」あるいは「動詞由来名詞」

と呼ばれている。「動詞由来名詞」は大きく分けてコトを表すものとモノを表すものの2つに分類できる。

英語などで接辞によって動詞から名詞を作り出すことが知られているが、このような動詞由来名詞は、基体の動作の表す「行為の結果として作られる産物」などの具体物を表す「結果名詞 (result nominal)」と、基体動作の表す「事象 (event)」を指す「過程名詞 (process nominal)」にわけられる。これと同じような区別が、日本語の接辞を伴わない「動詞由来名詞」においても適用される。

まず、コトを表すものについて見てみよう。元々、動詞であったものが転換されて名詞になったのであるから、動作に関わる何らかの部分が取り上げられて名詞化したと考える。以下に示すように、伊藤・杉岡 (2002) では動詞が名詞になるタイプを3つに分けてい るが、大きく分けて「動作」と「結果」という2つのタイプがあると言って良いだろう。1つは動詞全体、つまり事象 (event) 全体を名詞として表す①のようなもので、もう1つは、②のような動作の結果あるいは、③のような変化の結果あらわれた状態を名詞として表したものである。

英語の動詞由来名詞と日本語の動詞由来名詞については伊藤・杉岡 (2002) で詳しく述べられているので、ここでは日本語について簡単にまとめておく。それぞれの例については伊藤・杉岡 (2002: 93) から抜粋した。

<コトを表す動詞由来名詞>

① 行為や出来事を表す

笑い、泳ぎ、争い、誘い、眠り、踊り、訴え、励まし、求め、調べ、動き
買い戻し、焦げつき、繰り上げ、譲り合い、立ち入り、貸し出し、読みとり

② 変化の程度を表す（～がいい、～がわるい）

出、当たり、聞こえ、滑り、切れ、育ち、ウケ、ノリ

③ 結果状態を表す

へこみ、（パイプの）詰まり、（刃の）反り、（立派な）作り、出来、仕上がり

次はモノを表す動詞由来名詞をあげてみよう。これらは動詞にまつわる具体的あるいは抽象的なモノを表している。

<モノを表す動詞由来名詞>

- ① 内容：考え，思い，悩み，問い合わせ，望み，答え，話し，感じ，祈り
- ② 結果産物：包み，（お）握り，塗り，蓄え，備え，切り抜き，書き置き
- ③ 動作主：すり，見張り，見習い，付き添い，飛び入り
- ④ 主体（～（す）るもの）：支え，助け，流れ，妨げ，覆い，囲い
- ⑤ 道具：はかり，はたき，ふるい，鋤（すき）
- ⑥ 対象：つまみ，吊し（=既製服），差し入れ，知り合い，使い古し
- ⑦ 場所：通り，果て，（池の）まわり，住まい，吹き溜まり，受け付け，押し入れ

これらのことから分かることは、動詞の「連用形」という形式は、単語未満の形式であり、本質的に曖昧であるということである。つまり、連用形であるものが「動詞」として使われているのか、「副詞」として使われているのか、「名詞」として使われているのか、形式だけでははっきりしないのである。つまり、形式的には動詞であっても、機能的には動詞ではない可能性がうかがえるのである。

2.4 複合動詞の項の継承

従来の先行研究ではV1とV2の項の継承が問題とされてきた。良く知られている研究として山本（1983～34, 1992）がある。山本では前項V1と後項V2が新しく作られる複合動詞にどのように継承されるかによって、次の4つに分類した。

① 前項動詞と後項動詞のいずれもが格支配関係を有する

男がたばこを投げ捨てる

男がタバコを 投げる

男がタバコを 捨てる

② 前項動詞のみが格支配関係を有する

男が空を見上げる

男が空を見る

* 男が空を上げる

③ 後項動詞のみが格支配関係を有する

災難が打ち重なる

* 災難が打つ

災難が重なる

④ 前項動詞、後項動詞のいずれもが格支配関係を持たない

失敗を繰り返す

* 失敗を繰る

* 失敗を返す

ここから、複合動詞は前項V 1と後項V 2が一致することもあれば、全く一致しないこともあります。かつ、前項を継承することもあれば、後項も継承することもあるということがわかる。つまり、すべての可能性があるのである。

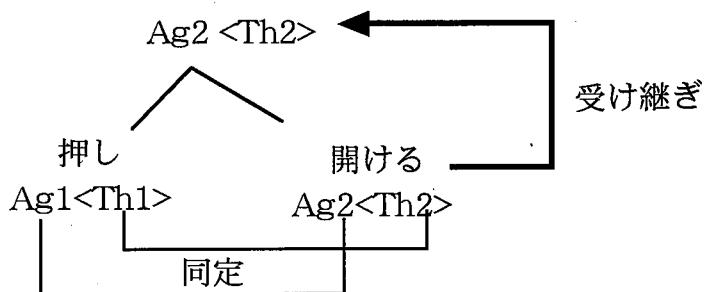
これより、もっと踏み込んだ研究として、影山（1993）、影山・由本（1997）がある。影山は複合動詞において「右側主要部の原則」をうち立て、語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure）と項構造（Argument Structure）を使って、複合動詞の項の継承を分析した。

影山（1993：106）

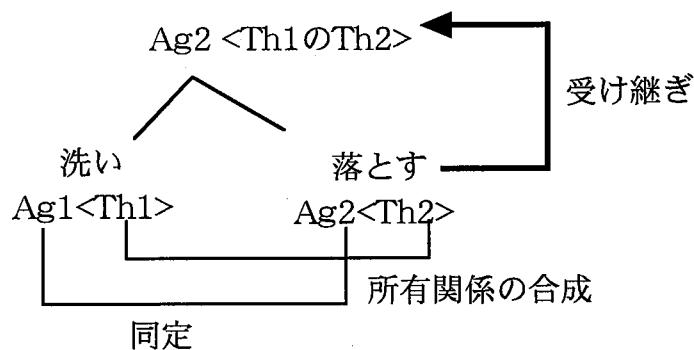
では、右側主要部の規則によって複合動詞全体の項構造がどのように決定されるかを述べよう。右側主要部の規則といつてもV 2の情報だけで複合動詞の全体が捉えられるわけではない。左側の要素と右側の要素が同じ種類の項を持つ場合は右側が優先するが、右側にはないものを左側が持っている場合は、左側のその情報も複合語全体に引き継がれると考える。

影山 (1993:106)

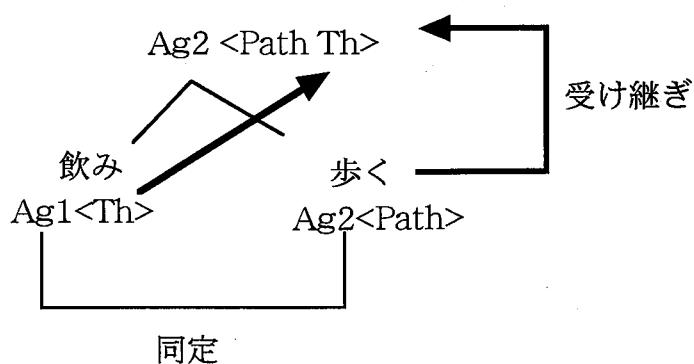
- (a) 主要部からの受け継ぎのみ
「ドアを押し開ける」



- (b) 主要部からの受け継ぎと所有関係の合成
「服の汚れを洗い落とす」



- (c) 主要部と非主要部からの受け継ぎ
「夜の町を飲み歩く」



これらの例はV1とV2の項から新しく生まれる複合動詞の項が予測できるものである。このように上手くいくものがある一方で、必ずしもV1とV2の項の継承が上手くいくものばかりでないことが知られている。それでは、どちらか片方しか項を継承していない例を見てみよう。下線部が元の動詞から継承されている項である。

<右側の項のみを継承しているもの>

01 写真を引き伸ばす

*写真を引く

写真を伸ばす

02 釘が突き出る

*釘が突く

釘が出る

03 頬に手を押し当てる

*額に手を押す

額に手を当てる

<左側の項のみを継承しているもの>

04 鍋がこげつく

鍋がこげる

*鍋がつく

05 論文を書き上げる

論文を書く

*論文をあげる

山本でも指摘されているように「落ち着く」や「繰り返す」のように、完全に語彙化しているといわれているものは、元の動詞の項から新しく出来た複合動詞の項を予測することが難しいとされている。これらのことから分かるように、複合動詞において、前項V1と後項V2の項と新しい複合動詞の項がきちんと対応しているものは限られたもので、多くの複合動詞は前項か後項のどちらか一方しか対応しておらず、全く、対応していないものも数多くある。

また、影山（1993：106）の分析では「押し開ける」が例として分析されているので、

大辞林で「～開ける」をとる複合動詞を調べると「ねじ開ける」「こじ開ける」があった。予測であれば、これらは「押し開ける」と同じような構造をとると考えられるが、実際、「こじ開ける」はこの分析では上手くいかない。

06 フタをねじ開ける

フタをねじる

フタを開ける

07 ドアをこじ開ける

*ドアをこじる

ドアを開ける

もちろん、「*こじる」という動詞は存在しないので、「こじ開ける」は複合動詞ではないという見方も可能であるが、そうすると、「ねじ開ける」と「こじ開ける」は別物であるということになる。しかし、素朴な直感として2つがそんなに違うものではないという気がするのは間違っていないだろう。

影山（1993）の中にも「こびり付く（75 ページ）」「すれ違う（111 ページ）」「しおげ返る（111 ページ）」のように、前項V1が動詞的な要素であるが、動詞かどうかはっきりしないものがいくつか見られる。この他にも「ひた走る」「ほとばしる」「こき下ろす」「すり寄る」「なぎ払う」「おびき出す」など、気を付けて探せばこのような例はいくつも発見できる。このような例は、形式的には複合動詞かどうかよく分からぬにも関わらず、我々の意識としては「こじ開ける」も「おびき出す」も複合動詞だと認識されている。つまり、これらの例は「複合動詞」としての基準、あるいは概念を満たしているのである。

従来、複合動詞は「動詞」+「動詞」の合成であるととらえられることが多かった。もちろん、そのような複合動詞が存在することは確かである。しかし、それだけで、複合動詞を分析したのでは、複合動詞の一面のみを論じていることにならないだろうか。序章で英語の「sob」は「しくしく泣く」「めそめそ泣く」のようにオノマトペをともなった表現か、あるいは「すり泣く」「むせび泣く」のように複合動詞を使って訳せることを取り上げたが、このように複合動詞は副詞による修飾とかなり近い働きをする。

本研究では、複合動詞のすべての前項V1が「動詞」であるとは考えないことにする。つまり、複合動詞を前項V1と後項V2の項が継承されてできあがるようなものではなく、積極的に副詞的に働いているV1を認めることによって、複合動詞がどのような働きをしているのかを考えてみることにする。

3. 意味論的立場から見た複合動詞

意味論としてまとめていいのかどうかは問題が残るが、複合動詞は日本語学においても様々な研究されてきた。日本語学においては従来、前項V1と後項V2にどのくらい本動詞の意味が残っているかという点から研究されることが多かった。これらの研究では、本動詞の意味が強く残っているものをV（ラージV）、文法化して意味が希薄になっているものをv（スマールv）として表し、その組み合わせによって、複合動詞を分類した。

もっとも基本的な研究として寺村（1969）があげられる。その後、様々な問題点を指摘されながらも、寺村による研究は日本語学におけるその後の複合動詞の研究に大きな影響を与えたことが知られている。寺村（1969）では、V1+V2型複合動詞をV1またはV2が「自立語としての意味がそのまま保持されているか否か」という観点から以下の4つに分類した。

寺村（1969）による複合動詞の分類

- ① 自立V+自立V・・・前項、後項ともに自立語の意味を保持
走り去る、持ちあげる
- ② 自立V+付属v・・・後項が自立語の意味を喪失
走り込む、見上げる
- ③ 付属v+自立V・・・前項が接頭辞化
取り押さえる、打ち眺める
- ④ 付属v+付属v・・・各部分が自立語の意味を消失して一語化
とりなす、のり出す

問題点としてはまず、自立語と付属語の分類がはっきりしないことがあげられる。寺村

(1969) では「走り続ける」は②自立V+付属Vとしているが、「続く」というのは元々抽象的な動詞であって、「走り続ける」は本動詞の意味を良く残しているにもかかわらず、付属vとされてしまっている。また、①自立V+自立Vの例として「持ちあげる」、②自立V+付属Vの例として「見上げる」が入っている。確かに、「持ち上げる」は「持つて、あげる」とテ形接続に言い換えができるのに対して、「見上げる」は「*見て、あげる」のようにテ形接続に言い換えができない。しかし、「あげる」の上方向へのベクトルという意味では共通しており、自立、付属の境界線がはっきりしない。

次の問題点としては、付属vの内容が一律ではないことが指摘される。付属vとしてまとめられているものの中には、②では「見上げる」の後項「あげる」が付属v、③では「取り押さえる」の「取り」が接頭辞化しているものとして付属vになっているが、これらは同じ付属vとして同じステータスに入れてもいいのだろうか。つまり、前項の付属vが接頭辞化しているのなら、後項の付属vは接尾辞化しているといえるのかということである。

この他にラージV、スマートVを利用した研究として長嶋(1976)がある。長嶋(1976)では、言い換えを利用して、I類とII類にわけた。

I類 v1+V2 (修飾要素+被修飾要素)

意味の中心をなすのは後項のV2

V1して、V2と言い換えることができる

- ・「Nが（を・に）V2」と言えるもの

(木を) 切り倒す→木を倒す

(町内を) 見回る→町内を回る

(男を) 刺し殺す→(男を) 殺す

II類 V1+v2 (被修飾要素+修飾要素)

意味の中心は前項のV1

- ・「Nが（を・に）V1」とは言えるが、「Nが（を・に）v2」と言えないもの

(本を) 読み通す→本を読む (*本を通す)

(犬が子どもに) 噛みつく→犬が子どもに噛む (*犬が子どもにつく)

(すべてのことを) 言い尽くす→すべてのことを言う (*すべてのことを尽くす)

- ・二つの動詞が対等の関係にある・・・飛びはねる, 泣き叫ぶ
- ・熟語動詞・・・繰り返す, 引っ越す

ここからもわかるように、日本語の複合動詞は前項、あるいは後項が文法化していて、本来の動詞の意味を失っていたり、変化させている一群があることは前々から知られている。前項については「接頭辞」ということで大枠は一致しているが、後項が文法化していると言われているものは「補助動詞」と呼ばれたり、「接尾辞」と呼ばれたりしており、統一した見解を持つのにいたっていない。

益岡・田窪（1992）では複合動詞は次のようにまとめられている。

益岡・田窪（1992：18）：複合動詞

＜語彙的なもの＞

◆アスペクト

～はじめる, ～だす, ～かける, ～つづける, ～おわる, ～おえる, ～やむ, ～あげる, ～あげる

◆完遂

～つくす, ～ぬく, ～とおす, ～きる

◆不完遂

～忘れる, ～そこなう, ～損じる, ～そびれる, ～かねる, ～とおす

◆その他

～なおす, ～かえす, ～つける（習慣）

＜統語的なもの＞

なぐりたおす, 持ち上げる, はたき落とす, 押し出す, こじ開ける, よじ登る,
連れ戻す

＜後項が動詞としての性質を全く失い、接尾辞的になったもの＞

転がり込む, 飛びかかる, 話しかける, 飛びつく, 呼びつける, しょげかえる,
ほめそやす, 眠りこける

これを見るとわかるように、統語的なものとして「補助動詞的なもの」があげられ、それとは別に「接辞的なもの」があげられている。つまり、文法化した後項V2が補助動詞

か接辞かはっきりしないまま来てしまった混乱がここに見られる。

益岡・田窪（1992）では、本来の性質を全く失ってしまったものを「接辞的なもの」としてあげているが、本当に「飛びつく」が接辞なもので、「押し出す」が統語的なもの（補助動詞的なもの）であるかどうかの妥当性ははっきりしない。

ここまであげた先行研究の問題点は、すべて、本動詞であるラージVと、文法化された形式であるスモールVを区別する境界線がはっきりせず、直感に頼った分類であると言うことに集約されるだろう。スモールVが本当にまるっきり違う意味になってしまふのなら、その境界線ははっきりしているが、ラージVの特性を受け継ぎつつも、何らかの要素が少しずつ抜けていた場合、どこからスモールVになるのか、その線引きは非常に困難であるし、その性質として、クリアカットに線が引けるようなものではない。

先行研究を見るとすぐ分かるように、日本語の複合動詞は前項V1と後項V2のどちらがメインイベントを担うのかは語によって決まっており、複合動詞全体としての傾向があるわけではない。また、ある動詞が前項V1にも後項V2にも使われることがあったり、同じ後項V2動詞であっても、どんな動詞を前項V1にとるのかによって、ラージVになったり、スモールVになったり、予測することが非常に難しい。このことがテ形接続で後項が補助動詞化したものと比べて、複合動詞を複雑にしている要因である。

例えばワープロの入力システムをプログラミングしているとしよう。テ形接続であれば、「いる」「おく」「しまう」の前にテ形がついた時、つまり「～ている」「～ておく」「～てしまう」の形式になったら、漢字変換をするなというルールにまとめることができる。けれども、複合動詞の場合は、「話しかける」「死にかける」「浴びせかける」「追いかける」のように、後項が同じV2でも意味が全然違っていたり、後項V2が漢字にできるかどうかは、V1の意味や、その文の中でどのように使われているかによって決定される。そのため、これらを1つのルールでまとめることはできない。このように、複合動詞は予測不可能なことが多いため、機械翻訳や入力システムなどではプログラマー泣かせだと言われている。それゆえ、それが補助動詞だろうが接辞だろうが、多くの複合動詞ははじめからV1とV2のセットで入力されることが多いと言われている。

4. 統語論的立場からみた複合動詞

最後に生成文法で複合動詞がどのように扱われてきたかを見ていくことにする。先に見たように、現在、複合動詞がどの部門で作られるかについては、以下にあげた3つの立場があり現在でも決着がついていない。

- ① レキシコンはあくまで静的な収納庫であり、語形操作は統語部門で行われる

柴谷 (1978), 長谷川 (1999)

- ② すべての語形成がレキシンコンで行われる

飯田 (2002), 今泉・郡司 (2002)

- ③ 語形成は、レキシコンで行われるものと統語部門で行われるものがある

影山 (1993), 影山・由本 (1997)

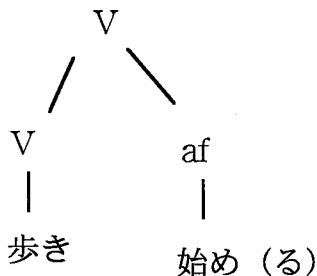
英語においても接辞がどのレベルで付加されるのかについては未だ決着がついていないことであるが、それに加えて、日本語のような膠着言語はいっそうそれが分かりにくい傾向がある。統語レベルで複合動詞が形成されているということは、前項V1が埋め込み構造になっており、そこに PRO を仮定しなければならない。ところが、複合動詞の前項V1は連用形なので、形態的に補文があることがはっきりとわからないのである。三原 (1994) ではそれについて次のように述べられている。

三原 (1994 : 74)

- (126) a. [花子iは 太郎に [PROi 模範演技をして] みせた]。
 b. [花子は 太郎jに [PROj 模範演技をして] もらった]。

そもそも、上例で「花子/太郎」がコントローラーになると言う時、PRO の存在、従って不定節の存在が前提とされているにもかかわらず、日本語において、何が不定節になるのかという議論は体系的にはなされていない。日本語は高度に膠着的な言語であるから、(126) の「してみせる/してもらう」のみならず、「歩き始める」や「書き終わる」などにしても、後項が動詞的接辞として前項に付加された (127) のような構造を持つ可能性も否定できない。(af=affix (接辞))

(127)



このように、日本語において複合動詞がどの部門で派生しているかを断定することは、非常に困難なことであり、未だ統一的見解を持つに至っていない。

4.1 複合動詞の派生は統語部門で行われるという考え方

英語における形態論の中において語形形成が統語部門で行われるという考え方を示している研究者としては、Lieber (1992) などが知られているが、日本語において複合動詞が統語から派生されるという立場をとる研究者としては、柴谷 (1978), 長谷川 (1999) が知られている。その中で最もよく知られている柴谷 (1978) を紹介することにする、柴谷 (1978) では次のような例の共通性から複合動詞に埋め込みを仮定し、アスペクト動詞が助動詞的に使われている例として、「～はじめる」を分析している。

- ① ことばの習得状況をカードの記録していくことを始めた。
- ② ことばの習得状況をカードの記録していき始めた。

後項V2「～はじめる」は他動詞であるが、それが取る前項V1は必ずしも他動詞で無くても良い。自動詞と他動詞の両方が取れる。柴谷 (1978) ではそのような後項V2「～はじめる」は、自動詞のように働いているとして、次のように述べている。

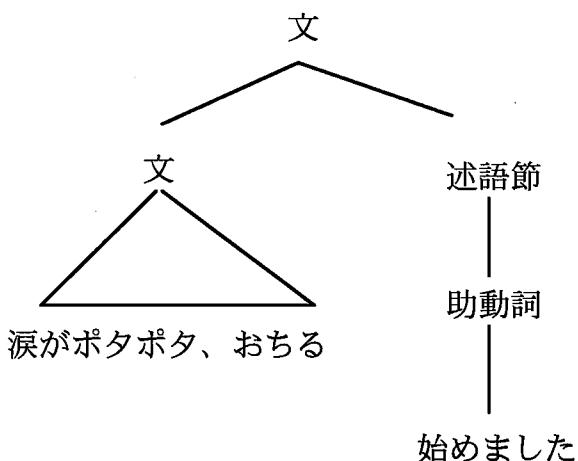
柴谷 (1978: 152)

このように、本動詞としてのアスペクト動詞と助動詞としてのアスペクト動詞とは完全に対応しない。起動の助動詞は常に「始める」であり、継続は普通は「続ける」であり、完結は「終わる」・「終える」の両方が可能である

が、前者の方が現代では一般的であろう。

結局、柴谷（1978）では、前項V1が自動詞であっても、他動詞であっても埋め込みを仮定し、以下のような構造を考えた。

柴谷（1978：151）



ここで問題になるのは、開始を表す「～はじめる」と継続を表す「～つづく」は他動詞だけで自他対応を持っていないのに、なぜ、終了を表す「～おわる」「～おえる」だけ自他対応を持っているのかということである。これについては4章で詳しく考察することにする。

4.2 複合動詞の派生は語彙部門で行われるという考え方

現在、このような強い語彙論的立場は、英語においては Di Sciullo & Williams(1987) , Pollerad & Sag(1994)などで仮定、展開されており、HPSG理論 (Head-driven Phrase Structure Grammar-主辞駆動句構造文法) と呼ばれている。このような理論では、語彙の情報に重点がおかれ、いわゆる構造的な句構造を構築する規則を設定せず、句構造を構築するためのスキーマ的な制約を設定するだけで、ほとんどの情報が語彙にあると仮定している。

日本語において HPSG 理論を利用した複合動詞の分析としては飯田（2002）、今泉・郡司（2002）などがある。

飯田（2002）では複合動詞ではなく、「嫁になり手」のような接尾辞による名詞化を分析している。従来、「手」は統語部門における語形成の証拠として捉えられてきたが、これに対して、飯田（2002）はこれらが語彙部門で行われるという分析を行い、語彙形成は語形成部門のみで行われることを主張した。

今泉・郡司（2002）では、「出る」「出す」を取る語彙的複合動詞を取り上げ、それらを HPSG 理論を使って分析し、語彙的複合動詞の中にも一般的な制約を導き出すことができることを論じた。また、反対に、あるV1が「出る」「出す」とは複合できないという選択制限もこの制約から導き出せることを述べた。

このような強い語彙論の中で重要な点は、それまで単なるランダムな単語の羅列と考えられていたレキシコンの中に、語形成という統語規則とは異なる規則をうち立てたことである。しかし、レキシコンの中にも語形成規則を認めると、どのレベルまでの語形成がレキシコンで行われるかという問題が出てくる。つまり、同じ現象を分析をしていても「語」や「句」というものをどのように捉えるかによって、どの部門で語形成が行われるかということに対する分析が異なってくるのである。

4.3 複合動詞の派生は統語部門と語彙部門で行われるという考え方

これまで見てきたように、レキシコンと語形成が文法論全体の中でどのような位置づけになっているかは未だはっきりしていない。語形成が統語部門で行われるのか、語彙部門で行われるかというのは立場の違いはあれども、語形成をどちらかの1つの部門で行うという考え方を取っている点では共通している。これらの考え方に対して、語形成の派生には統語部門と語彙分門の両方があるというモジュール形態論の立場がある。

日本語においてモジュール形態論をとる分析として影山（1993）、影山・由本（1997）などが知られている。影山（1993）では、日本語において語形成では語彙部門だけではなく、統語部門でも行われることを証明し、語彙部門で行われる語形成を語彙的複合動詞、統語部門で行われるものと統語的複合動詞として分類した。

影山（1993）では語彙的複合動詞をA類、統語的複合動詞をB類としているが、議論を簡素化するために、ここでは語彙的複合動詞、統語的複合動詞という名称を用いる。よって、影山からの引用にはA類、B類という記述の後に（ ）で、本研究で用いる語彙的複合動詞、統語的複合動詞という注を入れることにする。また、影山の議論に基づいた記

述においても語彙的複合動詞、統語的複合動詞という記述を用いることとする。

語彙的複合動詞の特徴として影山は以下のように述べている。

影山（1993：78）

A類（語彙的複合動詞）の複合動詞の生産性は主にV2に依存し、「搔きむしる、*こすりむしる、ちぎりむしる」や「思い知る、?見知る、*考え知る、*聞き知る」のようにV1の可能性がごく少数の動詞に限定されるものから、「買い取る、吸い取る、ぬぐい取る、奪い取る、切り取る」や「買い取る、吸い取る、ぬぐい取る、奪い取る、切り取る」や「買い込む、吸い込む、差し込む、落ち込む、ふさぎ込む」のようにかなり多数のV1と結合するものまで、様々な度合いが見られる。しかし、生産性の高い場合でも語彙的な結合制限があり、いずれにしても複合動詞全体の形を辞書に登録しておくことが必要である。その結果、これまで聞いたことがない複合動詞に出食わすと、注意を引かれることになる。

統語的複合動詞の特徴として影山は以下のように述べている。

影山（1993：78）

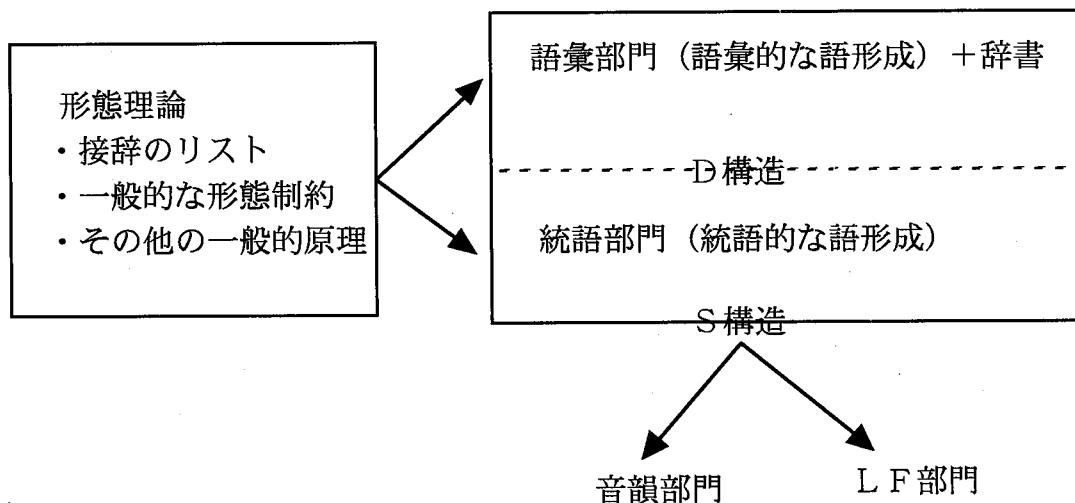
B類（=統語的複合動詞）のほうは、ちょうど文や句が自由に作られるように、語彙的な制限を受けずに形成される。もちろん、例えば「続ける」は継続可能な動詞を要求するから、「老人は生き続けた」がよいのに対して、「*私の長女が生まれ続けた」はおかしい。しかし、「女の子ばかりが何人も生まれ続けた」とすると適格になる。これらは意味の制限であって、「生まれ（る）」という特定の語彙形式が「続ける」と結合するか否かという語彙的な制限ではない。

また、影山（1993）では語彙的複合動詞は「意味の慣習化」と「語彙的な結合制限」という「語」の特徴を備えているので語彙部門で派生され、そのほとんどが辞書（レキシコン）に登録されていると考え、一方、統語的複合動詞は「語」よりも「文」や「句」に近いものとして、「意味の透明性」と「生産性」を備えているとしている。

つまり、語彙的複合動詞はD構造（深層構造）において、V1とV2の2つが合わさって一語となっているが、統語的複合動詞はV1とV2がD構造（深層構造）では別の動詞になっていることを主張している。

影山（1993）で述べられているモジュール形態論のモデルは次のようにになっている。

影山（1993：356）



影山（1993）では、まず語彙部門があり、そこで形成された語が統語部門のD構造に挿入され、D構造からS構造に至る過程において、動詞編入などの統語規則が適用されると考えられている。よって、語彙的複合動詞は統語的複合動詞より先に形成されるとして、語彙的複合動詞の外側に統語的複合動詞がつくことができるがその逆はないとしている。

語彙的複合動詞→統語的複合動詞

このことを語彙的複合動詞「～こむ」と統語的複合動詞「～はじめめる」で確認してみる。

① 「語彙的複合動詞」 + 「統語的複合動詞」

客が船に 「乗り込み」 始めた

② 「統語的複合動詞」 + 「語彙的複合動詞」

客が船に 「乗り始め」 込んだ

また、語彙的複合動詞は、2つの動詞の組み合わせに限られていて、3つ以上は重ねることはできないという語に特有の「二股枝分かれの制限」があるとしている。それに対して、統語的複合動詞は3つ以上の組み合わせができるとしている。例は影山（1993：93）より引用した。

③ 語彙的複合動詞の連続

- * 積み上げ重ねる
- * 積み重ね上げる

④ 統語的複合動詞の連続

- そろそろ選手が疲れ始めました
- 脱落し始めかけた

影山（1993）では語彙的的複合動詞と統語的複合動詞の境界ははっきりとしており、中間的なものはないとしている。

影山（1993：93）

語彙部門と統語部門の境界は必ずしも明確ではないのであるが、V-V複合動詞については一応、その区別が守られている。

影山（1993）では複合動詞の語形成がどのように行われるかという語形成の方法について述べられているが、それに対して、本研究はメンタルレキシコンの研究の成果を利用し、複合動詞がどのように解釈されていくかという過程に主眼をおいて考察する。

つまり、影山（1993）では、複合動詞はどのようなV1やV2を選択するのかという語形成の「アウトプット」の方法を考察することによって複合動詞を分析していると言えるが、本研究では「インプット」からどのような解釈にアクセスするかを考察することによって、複合動詞を分析すると言い換えられるだろう。

このようにパラダイムが異なるため、本研究と影山（1993）の研究とは直接的にクロスするわけではないし、影山（1993）の論に対して反論しているわけではない。本研究

においても、影山（1993）の主張を引き継いでいる部分も多い。

議論を始める前に、影山（1993）と本研究の基本的な考え方の違いを簡単にまとめておく。

まず、影山（1993）では分けて考えていたが、本研究はD構造とS構造を仮定しない。現在のミニマリスト・プログラムにおいてもD構造とS構造は破棄されており、それらを仮定しないことについては問題ないだろう。文法とは「音声」と「意味」を結びつける規則の体系であり、それらを結びつける規則を考えるのが文法研究であると考える。よって、複合動詞においても「音声化されたもの（表記されているもの）」とその「意味」がどのように結びつくかを考えることによって、その間に存在する規則を抽出することを目的とする。この規則ができるだけ簡素化するため、あえて、D構造とS構造を想定しない。この点で影山（1993）と異なっている。

また、影山（1993）では、語彙的複合動詞と統語的複合動詞を積極的に分ける方向で議論されているが、本研究においても、語彙的なものと統語的なものが存在するという点では影山（1993）を踏襲する。後項V2がVPを取るような複合動詞は統語レベルで派生していると考えることは妥当なことであるし、異を唱えるつもりはない。ただ、本研究でD構造とS構造を想定しないことからも分かるように、これらを別レベルのものとして積極的に分ける方向では考えない。語彙的複合動詞と統語的複合動詞は確かに異なっているが、これらは異なるルートから造られる複合動詞であると考えるからである。

結論から先に述べると、本研究では、まず複合動詞を意味的に不可分のひとまとまりになっているものと、2つの部分に分析可能なものの2つのタイプにわけられる。そして、分析可能なものの中にも前項にVのみとるものと、VPという補文がとれるものがあると考える。本研究では複合動詞は文法化の一種と考え、その文法化の度合いにはいくつかのレベルがあり、明確に区別できるものではないと考える。つまり、後項V2はその前項としてVのみを取るものからVPを取るようなものまで、その文法化の度合いによって、いくつかの段階に分かれると考えるのである。

これから議論の進め方としては次のように行う。2章では影山（1993）の分析を詳しく検討し、その問題点を指摘する。3章では、メンタルレキシコンと呼ばれる人間の脳内辞書（心的辞書）でどのように語彙を格納しているかということについて仮定されているアクセスモデルを見る。これらは、文字で書かれた単語表記からメンタルレキシコンへどのようにアクセスされるかという方法論であり、インプットされたものがどのように

解釈されるかということに対するモデルである。

4章では、本研究が仮定する「二重アクセスモデル」を使って、日本語の複合動詞を分析し、そのメリットと妥当性を検証する。

そして、5章では各レベルにどのようなタイプの複合動詞があるのかを検証しながら、本研究での分類と影山（1993）で述べられた語彙的複合動詞と統語的複合動詞がどのような位置関係にあるのかを確認する。

第2章

統語的複合動詞と語彙的複合動詞

日本語における複合動詞の研究は、影山（1993）の研究が1つの大きなターニングポイントとなった。影山（1993）は1章で述べた「モジュール形態論」の立場をとり、語形成は複数の部門やレベルで起こると考えている。語形成は統語部門か語彙部門のどちらかで行われるとされてきた従来の研究に対して、語形成を意味部門と統語部門に分けるという考え方には多くの研究者の支持を得て、その後の複合動詞に研究に大きな影響を与えた。

複合動詞はV1+V2 という動詞が二つ重なった形態をとっているが、その内実を検証してみると、必ずしもすべての複合動詞を動詞V1 と動詞V2 の合成として捉えることができないことが知られている。影山（1993）ではこのように意味の計算ができないものを「語彙的複合動詞」、合成的で意味が透明なものを「統語的複合動詞」として複合動詞を大きく2つに分けている。影山（1993：75）ではその例として以下のようなものをあげている。

影山（1993：75）

A類（＝語彙的複合動詞）

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放つ、飛び込む、（隣の人に）話しかける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、誉め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ

B類（＝統語的複合動詞）

払い終える、話し終わる、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、數え直す、見なれる、登り切る、やりつける

影山（1993）は語彙的複合動詞と統語的複合動詞を区別するためのテストをいくつか設定しこれらを分類した。そして、これらのテストを通して、語彙的複合動詞は語彙部門で派生される「語」であり、統語的複合動詞は統語部門で派生され、埋め込み構造があることを証明した。影山（1993）で仮定されている語彙的複合動詞と統語的複合動詞の構造を、簡略化して述べると次のようになる。

- ・語彙的複合動詞の構造・・・太郎が 酒を [飲み歩く]
- ・統語的複合動詞の構造・・・[太郎が 自分の経験を 話し] 終える

また、影山（1993）は語彙的複合動詞と統語的複合動詞はどちらかに区別されるべきものだとし、中間的なものを認めていない。これらについて影山（1993）では次のように述べている。

影山（1993：93）

この点に関連して、森山（1988：51）は筆者の統語的複合動詞と語彙的複合動詞の区別を踏まえた上で、両者の間に中間的なものが存在すると述べている。森山が挙げているのは次の例で、

(38) やりきる, やり遂げる, やりあげる, やり尽くす, やりおおす
 例えば、「尽くす」は統語的とされるにも拘わらず「*そうし尽くす」は不適格であり、「きる」についても「??焼かれきる」のような受身形が成立しにくいことを指摘されている。しかしながら、本節で挙げたテストのすべてが十全に成立しないからといって、統語的と語彙的の中間が存在すると結論するのは短絡的だと思われる。本節で提示したのはあくまで統語的な基準であり、統語規則が意味のあるいは語用論的条件によって左右されることは広く知られている。

このように影山（1993）は統語的複合動詞と語彙的複合動詞を区別する方向で議論を展開したが、影山（1993）以後、同じモジュール形態論を取る由本（2002）において、統語的複合動詞の中に語彙的複合動詞のようにLCSの合成をするタイプがあることが指摘されるなど、その線引きが問題になっている。

それでは、影山（1993）と影山・由本（1997）の主張をまとめながら、その問題点を考えていくことにする。

1. 複合動詞の「語」としての形態的緊密性

当たり前のことであるが、複合動詞はそれが統語的なものであれ、語彙的なものであれ、それらは「語」である。つまり、複合動詞はカテゴリーの上では一つの語であり、「走る」「飛ぶ」「食べる」などの普通の動詞と変わらない。概念上、語と句は明確な区別があり、線引きされるものであるが、その一方で、実際には語と句は明確にわけられるものではないことが知られている。

ある表現が「語」であるかどうかを確認するためにはいくつかの基準があり、それらは「形態的緊密性」と呼ばれている。平たく言えば、「語」というのはそれだけでまとまりをなすので、その中に他の要素を入れることができないという性質である。

影山（1993：10-11）では、語の持つ特徴として形態的緊密性をあげているが、この「形態的緊密性」の特徴として次の4つをあげている。影山（1993）では複合名詞の確認にこの「語」であることを確認するためのテストを使っているが、これを複合動詞にも適用してみることにする。

<「語」であることを確認するためのテスト>

① 形態的な不可分性

語を統語的に分断することはできない

② 統語要素の排除

語の内部には句、格助詞、時制などの統語的要素は侵入できない

③ 外部からの修飾禁止

語の一部を外部から修飾することはできない

④ 語彙照応の制約

語の内部の要素を代名詞で指したり、文レベルの規則で削除することはできない

影山（1993）であげられている語彙的複合動詞から5つ（以下(a)～(e)）、統語的複合

動詞から5つ（以下(f)～(j)）を無作為に抽出し、上記の①～④の「語」を確認するテストを行ってみると以下のようになつた。

1.1 ① 形態的な不可分性

まず、複合動詞が形態的に分けられないことを確認するために、語の一部を移動する「かき混ぜ操作」を行つてみる。序章で確認したように、前項V1と後項V2が完全に独立しているテ形接続はこれらを許容することができる。

＜語彙的複合動詞＞

- (a) ドアを押し開く→*押しドアを開く
- (b) 家を売り払う→*賣り家を払う
- (c) プールに飛び込む→*飛びプールに込む
- (d) 先生を讃め讃える→*讃め先生を讃える
- (e) 荷物を持ち去る→*持ち荷物を去る

＜統語的複合動詞＞

- (f) 秘密を話し終わる→*話し秘密を終わる
- (g) ご飯を食べ過ぎる→*食べご飯を過ぎる
- (h) 友達と助け合う→*助け友達と合う
- (i) マラソンを走り抜く→*走りマラソンを抜く
- (j) 納豆を食べつける→*食べ納豆をつける

1.2 ② 統語要素の排除

「東京に行く」は「東京には行く」のように、別要素である「は」を入れられることから、「東京に」は「行く」から独立した句であることが分かる。間にに入る要素は「も」でも「さえ」でも何を入れてもかまわないが、ここでは「は」を入れて実験してみる。

- (a) ドアを押し開く→*押しは開く

- (b) 家を売り払う→*売りは払う
- (c) プールに飛び込む→*飛びは込む
- (d) 先生を讃め讃える→*讃めは讃える
- (e) 荷物を持ち去る→*持ちは去る

<統語的複合動詞>

- (f) 秘密を話し終わる→??話しは終わる
- (g) ご飯を食べ過ぎる→*食べは過ぎる
- (h) 友達と助け合う→*助けは合う
- (i) マラソンを走り抜く→*走りは抜く
- (j) 納豆を食べつける→*食べはつける

(f)のように連用形が完全に名詞化している「話し」は形式的に許容するが、「話し」を動詞として考えると非文になる。このように振る舞いに多少の差はあるが、複合動詞は前項V1と後項V2の間に別の要素を入れることができない。

1.3 ③ 外部からの修飾禁止

「語」の一部を外部から修飾することはできないため、「古い本箱」における「古い」は「本箱」全体にかかり、「古い本」を入れる「箱」という意味にはならない。このことを利用して、複合動詞の前項V1を修飾する副詞句を付加し、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の双方とも前項V1だけを修飾できないことを確認する。

<語彙的複合動詞>

- (a) ドアを押し開く→ドアぐいぐい押す+開く (*ドアをぐいぐい押し開く)
- (b) 家を売り払う→家をたたき売る+払う (*家をたたき売り払う)
- (c) プールに飛び込む→「プールに飛ぶ」が言えないので作成不可能
- (d) 先生を讃め讃える→先生を一生懸命讃める+讃える (先生を一生懸命讃め讃える)
- (e) 荷物を持ち去る→荷物をしっかり持つ+去る (*荷物をしっかり持ち去る)

<統語的複合動詞>

- (f) 秘密を話し終わる→秘密をペラペラ話す+終わる
(??秘密をペラペラ話し終わる)
- (g) ご飯を食べ過ぎる→ご飯をぱくぱく食べる+過ぎる
(?ご飯をぱくぱく食べ過ぎる)
- (h) 友達と助け合う→「友達と助ける」が言えないので作成不可能
- (i) マラソンを走り抜く→マラソンをとろとろ走る+抜く
(??マラソンをとろとろ走り抜く)
- (j) 納豆を食べつける→納豆をもりもり食べる+つける
(??納豆をもりもり食べつける)

語彙的複合動詞と統語的複合動詞は基本的に前項V1のみを副詞で修飾することはできない。ここで「基本的に」と述べたのは、いくつかの条件により、このテストに適合しないため、その振る舞いが確認できない文があるからである。このテストが合わない文には次の2タイプが考えられる。

1つは、(c)や(h)のように、複合動詞の取る格関係と前項V1の取る格関係が異なる場合はまず文章自体が作成不可能なため、このテストでは確認できないと考えられる。

もう1つは、(d)の「讃め讃える」のように、前項V1と後項V2が並列関係にあるものはV1のみを修飾する副詞が想定しにくく、どうしても副詞がV1とV2の両方にかかってしまうように解釈できるため、やはりこのテストでは確認できないと考えられる。このように、いくつかこのテストでは確認できないものはあるが、基本的に副詞はV1のみを修飾できないと考えることが出来るだろう。

これらの現象から複合動詞は統語的複合動詞であれ、語彙的複合動詞であれ、V1とV2が「語」という形態的な緊密性を持っており、言うなれば「殻」のような境界線を持っていることが確認できる。

1.4 ④ 語彙照応の制約

このように「語」であることを確認するためのテストにおいて、①～③までは語彙的複合動詞も統語的複合動詞も同じような振る舞いを見せており、この2つに差はほとん

どなかったが、この語彙照応の制約になると、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の間に大きな違いが現れる。

まず、「語彙照応の制約」とは何かということを確認しておく。

「語彙照応の制約」（影山（1993：80））

語（複合語を含む）の一部分だけが文中の照応に参加することはできない

よって、次のような例は許容されない。

- (01) 庭が草だらけだから、[*それむしり] をしなければならない。
- (02) 本箱→*それ箱
- (03) 山登り→*そこ登り
- (04) 可愛いさ→*そう-さ

これを複合動詞にもあてはめてみる。理屈としてはV1+V2 の前項V1だけを何か別のもので置き換えるべきであるが、複合動詞においても例 01～04 のように照応形である「そう」をV1に使った「*そうV2」は非文である。

影山（1993）ではV1を「そうする」という形式で置き換え、その結果、語彙的複合動詞はV1を「そうする」で置き換えることができないが、統語的複合動詞はV1を「そうする」で置き換えることができる、すなわち語彙照応形の制約は受けないということを明らかにした。

＜語彙的複合動詞＞

- (a) ドアを押し開く

→*太郎がドアを押し開いたのを見て、花子もそうし開いた

- (b) 家を売り払う

→*弟が家を売り払ったのを聞いて、兄もそうし払うことにした

- (c) プールに飛び込む

→*太郎がプールに飛び込んだので、次郎もあわててそうし込んだ

- (d) 先生を讃美讃える

→ *太郎が自分の親を讃め讃えるのを聞いて、花子もそうし讃えた

(e) 荷物を持ち去る

→ *太郎が自分の部屋に荷物を持ち去ったので、花子もそうし去った

<統語的複合動詞>

(f) 秘密を話し終わる

→ 太郎が自分の秘密を話し終わる頃、花子もそうし終わった

(g) ご飯を食べ過ぎる

→ ? 太郎がご飯を食べ過ぎると、花子もそうし過ぎた

(h) 友達と助け合う

→ 太郎が弟と助け合ったので、花子もそうし合うことにした

(i) マラソンを走り抜く

→ 太郎がマラソンを走り抜いたのに感動して、花子もそうし抜いた

(j) 納豆を食べつける

→ ? ? 太郎は納豆を食べつけており、弟の次郎もそうしつけている

なぜ、語彙的複合動詞が「そうする」テストに合格しないかについて、影山（1993）では、語彙的複合動詞「遊び暮らす」を例にとって次のように述べられている。

影山（1993：80）（下線は筆者）

(7) 遊び暮らす → *そうし暮らす、押し開ける → *そうし開ける、追い払う → *そうし払う、仕舞い込む → *そうし込む、見落とす → *そうし落とす、泣き叫ぶ → *そうし叫ぶ

日本語では動詞だけを代入する表現がないので、(7) ではV'を代用すると思われる「そうする」を用いている。当然、「そうする」は副詞「そう」と動詞「する」から成る句であるから、(7) では「そうし暮らす」、「そうし開ける」等が全体で一語の複合動詞であるというのではない。構造的には「そう」が副詞として独立し、「し暮らす」の部分だけが複合語を形成するはずである。しかし、V1として用いられた「し」は機能的には

「そう」と結びついて初めて意味を成すから、「し暮らす」という複合語の内部の「し」とその外部の「そう」を結びつけるためには語の境界を越えなければならない。これは語彙照応の制約に違反することになる。

「語」であることを確認する①～④のテストにかけた結果をまとめてみると、語彙的複合動詞は典型的な「語」の特徴を全て備えていると言うことがわかる。それに対して、統語的複合動詞は①～③の特徴は備えているものの④の語彙照応形の制約だけは受けない。このことについて影山（1993）では統語的複合動詞について次のように述べている。

影山（1993：81）

- a. 太郎は走っているのを見て、次郎もそうし続けた。
- b. 調べ終える→そうし終える、秘密をしゃべりまくる→そうしまくる、食べ過ぎる→そうし過ぎる、手紙を出し忘れる→そうし忘れる

(7) (8) の対比は、A類（語彙的複合動詞）B類（統語的複合動詞）の複合動詞の派生過程の違いを示している。A類（語彙的複合動詞）は語彙部門で形成され、複合動詞全体が1つの動詞としてD構造で形成されるから、照応関係が成立する統語構造においてはもはやその内部は見通せない。他方、B類（統語的複合動詞）複合動詞がその内部に照応表現を含むことができるということは、その構成要素であるV1とV2は、照応関係が決定される統語的な段階において別々の構成素であることを物語っている。

確かに、④の語彙照応の制約に関しては、語彙的複合動詞と統語的複合動詞は大きな違いがある。しかし、その一方で、語であることを確認する①～③の法則には従っており、統語的複合動詞であっても「語」としての振る舞いをすることも確かである。

これが、完全に合成的、統語的であるテ形接続であると、すべての制約に違反し、その構成が完全に統語的であることが確認できる。テ形接続で「語」であることを確認するためのテストの結果がどのようになるか確認してみよう。なお、テストに使った「切

って倒す (=切り倒す)」「押して開ける (=押し開ける)」は語彙的複合動詞と言い換えるが可能なもので、意味的にはほとんど同じだと言われているものである。つまり、形態的な派生は統語部門で行われているが、意味的には語彙部門で作られる語彙的複合動詞と同じということである。

<① 形態的な不可分性>

- (05) 太郎が桜を切って倒す→太郎が切って桜を倒す
 (06) 花子がドアを押して開く→花子が押してドアを開く

<② 統語要素の排除>

- (07) 太郎が桜を切って倒す→太郎が桜を切っては倒す
 (08) 花子がドアを押して開く→花子がドアを押しては開く

<③ 外部からの修飾禁止>

- (09) 太郎が桜を切って倒す。→太郎が桜をばさばさ切って倒す
 (10) 花子がドアを押して開く→花子がドアをぐいぐい押して開く

<④ 語彙照応の制約>

- (11) 太郎が桜を切って倒す
 →太郎が桜を切ると、次郎も楓をそうして倒した。
 (12) 花子がドアを押して開く
 (花子と京子は両手いっぱいに荷物を持っていて手が使えない)
 →花子がドアを腰で押すと、京子も肩でそうして開けた。

これを見ると分かるように、意味的には語彙的複合動詞と近いものであっても、統語的に作られるテ形接続は「語」の緊密性を持たない。ここからわかるることは統語的複合動詞といっても、テ形接続と比べると「語」的であるということである。これらのことまとめると次のようになる。

<表1>

	語彙的複合動詞	統語的複合動詞	テ形接続
① 形態的な不可分性 かき混ぜはできるか	✗ できない	✗ できない	○ できる
② 統語要素の排除 別の要素は入れられるか	✗ できない	✗ できない	○ できる
③ 外部からの修飾禁止 V1だけ修飾できるか	✗ できない	✗ できない	○ できる
④ 語彙照応の制約 そうするで置き換え可能か	✗ できない	○ できる	○ できる

これに関連して、「そうする」で置き換え可能とされた統語的複合動詞の中でも、文脈を付けて「そうする」にするとやや座りが悪いものがある。例として、先にもあげた統語的複合動詞「そうする」テストをもう一度あげてみる。

<統語的複合動詞>

(f) 秘密を話し終わる

→太郎が自分の秘密を話し終わる頃、花子もそうし終わった

(g) ご飯を食べ過ぎる

→? 太郎がご飯を食べ過ぎると、花子もそうし過ぎた

(h) 友達と助け合う

→太郎が弟と助け合ったので、花子もそうし合うことにした

(i) マラソンを走り抜く

→太郎がマラソンを走り抜いたのに感動して、花子もそうし抜いた

(j) 納豆を食べつける

→? ? 太郎は納豆を食べつけており、弟の次郎もそうしつけている

(g) 「そうし過ぎる」(j) 「そうしつける」のような例は、言い換えの例としてはかなり不安定である。なぜならば、影山（1993）でも述べられているように、「そうする」は意図的な行為を表すため、「雨が降り始めた」「ニキビができはじめた」のような意図性のない動作は「そうし始めた」で言い換えることができないからである。「～すぎる」や「～つける」は「～はじめる」「～つづける」と異なり、命令形にすることができないことからもかなり意図性が低いことがわかる。

- (13) ご飯を食べ始めろ！
- (14) ご飯を食べ続けろ！
- (15) *ご飯を食べ過ぎろ！
- (16) *ご飯を食べつけろ！

命令形にできないものは、動作主の事態に対するコントロール力が低いと考えられるため、意図的な動作を表す「そうする」と意味的に合わないはずである。このことを「風邪を引く」が「そうする」に置き換えられることで確認してみる。

- (17) *太郎が風邪を引くと、次郎もそうした。
- (18) *風邪を引け！

「そうする」は意図的な動作しか置き換えることができないことから、「そうする」で言えるものは必然的に命令形にできるということになる。それでは、なぜ「そうしV2」と言うことはできるが命令形にはなれないという、一見、矛盾した現象が起きるのだろうか。よく見ると「そうする」で置き換えると不安定になる「～すぎる」「～つける」については、「そうしすぎる」「そうしつける」のようにコンテキストがない方がはるかに良いことに気づかされる。となると、なぜ、コンテキストがない状況でも「そうする」に置き換えて言えるのかということが問題になってくる。

複合動詞の前項V1を「そうする」に置き換えると、構造的には「そう」が副詞として独立し、「し+V2」の部分だけが複合語を形成する。しかし、V1として用いられた「し」は「そう」と結びついて初めて意味をなす。そのため、「そう」と「し」を結び付けなければならなくなり、結果として語の境界を越えてしまう。このように「そうする」テストの目的は、語彙照応の制約に反することを確認することにある。つまり、「し」は機能的に「そう」と結びついて初めて意味をなすので、「し+V2」では意味的に独立できないと考えられているのである、ところが、もし「しすぎる」という形態で独立できると考えれば、この仮定はあまり効力のないものになってしまふ。

「しすぎる」「しつける」という形式が独立しているかどうかには2つの可能性がある。

1つの可能性としては、連用形「しそぎ」「しつけ」が名詞になっており、それに動

詞化する「ル」がついて「しすぎル」という構造になっている可能性である。「しすぎ」をインターネットで検索してみると、新聞の見出しであるが次のような例が見られた。

(19) 小泉首相 「みんな気にしすぎ」 早期解散の考えはないと明言

(<http://www.mainichi.co.jp/eye/feature/article/koizumi/200212/14-1.html>)

(20) 公正さ意識しすぎ? 民主系点検委

(<http://www.mainichi.co.jp/eye/feature/details/vote2000/article/11/28-04.html>)

この他にも「サービスしすぎ」「悪ノリしすぎ」など様々な例が存在することから、「しすぎ」で名詞化していることがわかる。「しつけ」においても「しつけ」自身、名詞として辞書に登録されている上、「しつけル」という動詞の用法がそのものが辞書に登録されている。それに対して、他の「そうする」で言い換えられる例「～おえる」「～つづける」などは、「しおえ」「しつづけ」とは言えないでの、この点で異なっている。

もう1つの可能性としては、影山（1993）では日本語は動詞だけを代用する形式はないとしているが「し続ける」「やり続ける」のように「そう」を落とした「し」が動詞の代用形として働いており、それに文脈指示である「そう」がついて、全体で照応形として働いている可能性である。「し過ぎる」「し続ける」「し終わる」「しまくる」のように「そう」がない形式が独立して使えることを実例から確認する。

(21)

「人が望むようにしすぎる人、平気で人を支配したがる人-対人関係を幸福にする心の仕組み」（本のタイトル）

(22)

印刷をし続けると、プリントサーバが印刷を受け付けなくなったり、パスワード要求画面が出ます。（<http://buffalo.melcoinc.co.jp/qa/pserver/b0400170.html>）

(23)

まず、それぞれの立ち位置を確認する。楽器のセッティングをし終わると、次はサウンドチェックが始まる。

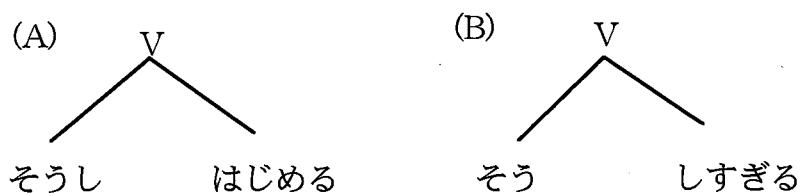
(http://www.magnetco.com/hayashi/live_report/20020709/repo.html)

(24)

世の中には狂った様に買い物をしまくる人間がいるものだが、実は私もその一人だ。とにかく物を買いまくる。ストレスが溜まると、買い物に走る。ストレスがなくても、買ってしまう。（「浪費バカ一代～ショッピングの女王 Part2～」の紹介文より）

これらの例をみるとわかるように「しそうする」「しつづける」「しおわる」「しまくる」という形式は「そう」がなくても単独で使えることが分かる。つまり、「しV2」という形式でいえるものは、「そう+しV2」という構造になっている可能性がある。このことは「そうする」テストに合格するものには以下の（A）（B）という2つの異なる構造を持ったものが混じっている可能性を意味する。

(25)



(A)の構造であれば「そうする」が完全に照応形として機能しているが、(B)の構造では照応形として機能しているということはできない。しかし、これらは完全に同一形態なので、それがどちらの構造になっているのかは、「そうしV2」という形式だけでは判断することはできないため、文脈を付けた「そうする」テストで確認するしかない。(B)は形態的には「そう」と「しV2」は独立したものであるため、「そうする」に言い換えられても、それが語の境界を越えているということはできない。

この形態と意味のズレについては、影山（1993）でも指摘されており、次のように述べられている。

影山 (1993 : 82)

このように「そうし始める」という表現は、形態的にはソウ [シ始メル] という構造なのに、意味解釈上のまとめりは [ソウシ] 始めるとなり、形態と意味の食い違いを呈することになる。

影山 (1993) では、「語（複合語を含む）の一部分だけが文中の照応に参加することはできない」という「語彙照応の制約」により、語彙的複合動詞は「そうする」が入ることができずに、統語的複合動詞は「そうする」が入ることができると考えた。「そうする」が VP あるいは V' と置き換えることができることを考えると、「そうする」で置き換えられるものが [VP] V2 という構造を持っているのではないかということは納得できる議論である。

しかしながら、日本語において動詞だけを指示表現を使って代用することはできないという議論と、実際問題として、「し続ける」「し過ぎる」という形式が独立できないという話とは別レベルの話である。

「そうする」で置き換えられ、かつ、命令形が作れる「そうし続ける→そうし続けろ！」のようなものは、「そうする」が正真正銘 VP を置き換えていると言ってもいいが、命令形が作れない「そうし過ぎる→*そうし過ぎろ！」「そうしつける→そうしつけろ！」のようなものは、本当に VP を置き換えているかどうかははっきりしない。

それでは、このように命令形になれないものをどのように捉えたらしいのだろうか。本研究では「そうする」と置き換えられるが、命令形にならない「しすぎる」「しつける」のような例は、VP レベルでは置き換えをしていないと考える。これらは、「する」という一般的な動作を表すものを V1 にして、「し V2」という形式で独立できる性質を持っていることから、後項 V2 が [V] V2 のように、複合動詞になるための「スロット」を持っていると仮定する。この、括弧〔 〕で表されるものが「スロット」である。

スロットとは、動詞の項のように、その動詞が持っている、他の動詞をはめこむための「穴」や「すきま」のようなものである。初めから他の動詞と結合するための「穴」「すきま」がある動詞を、スロットを持っている動詞と定義することにする。

影山 (1993) の統語的複合動詞で、「そうする」で命令形にできないものはかなりあり、リストアップすると次のようになる。

(26)

- ① そうしすぎる→*そうしそぎろ！
- ② そうしつける→*そうしつけろ！
- ③ そうしそびれる→*そうしそびれろ！
- ④ そうしそこなう→*そうしそこなえ！
- ⑤ そうしかねる→*そうしかねろ！
- ⑥ そうしあやまる→*そうしあやまれ！
- ⑦ そうしあきる→*そうしあきろ！
- ⑧ そうしかける→*そうしかけろ！
- ⑨ そうしえる→*そうしえろ！

このように、「そうする」テストには問題があることは事実であるが、一方で語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分ける区切りとなっていることは、紛れもない事実である。したがって、本研究でも語彙的複合動詞と統語的複合動詞という区別は意味のある区別であると考える。しかし、「そうする」テストに合格してもVPを置き換えていとは言えないものがある。それでは、「そうする」テストに合格するということは何を表しているのだろうか。本研究では意志表現しかとれない「そうする」テストのかわりに「する/やる」をV1に入れる、「する/やる」テストを提案する。

本研究では、後項V2が文法化されると、複合動詞になるためのスロットをV2が持つようになり、そのスロットに一般的な概念を表す「する」「やる」「なる」のような語をいれて、複合動詞を形成できると考える。つまり、「しすぎる」「しそびれる」「やりつける」「やりあきる」「なりえる」などの「する/やる（なる）」テストに合格するV2は、複合動詞になるためのスロットを持っていると考えるのである。典型的には統語的複合動詞がこれにあたる。

一方、V1とV2が特別な関係（ユニークな関係）で結びつき、その一語で語彙化されているものは、そのようなスロットを持っていないと考える。このようなスロットを持っていない複合動詞の、典型的なものが語彙的複合動詞である。例をあげると、「見舞う」はV1「見る」とV2「舞う」という2語が特別な関係で結びついており、「し舞う」「やり舞う」では意味のある複合動詞を形成することができない。また、「押し

「開く」も同様にV1「押す」とV2「開く」が特別な関係で結びついており、この2つがあわざって1つの意味をなしている。よって、V1に「する」「やる」のような一般的な概念を表す動詞を入れて「やり開く」「し開く」ということはできない。

このようにV2動詞の前にスロットがあるかどうかを確認するテストを「する/やる」テストと呼ぶことにする。「する」は自動詞用法、他動詞用法があって、自他両用の形式であるが基本的には動作主を取る。よって、動作主を取り得ない複合動詞の場合は「する」や「やる」では確認できないので、その時は「なる」を使うこととする。また、「する」は連用形になった時、「し」という一語になる。この、一語であるという音韻的な理由でやや座りが悪くなる場合があるので、その場合は「やる」の方が複合動詞になりやすい。

本研究は「そうする」テストの代わりに「する/やる」テストでわけた複合動詞の分類を提案するが、それについては4章及び、その途中の章で考察していくこととする。

1.5 代用形「そうする」の意味的な要因

「そうする」は日本語において、照応形を確認するためのテストフレームとして、よく用いられてきた。しかしながら、それがどのような働きをするかはあまり議論されてこなかった。この「そうする」に関して非常に興味深い指摘が三原（2003）でなされている。そうするテストは統語的な振る舞いを確認するために使用されているが、その置き換えにはかなり意味的な要因が関わっているという指摘である。

従来の研究において、「そうする」はVPまたはV'を置き換えるもので、Vを置き換えることはできないとされている。

そのことをNakau(1973:45)の例で確認してみよう。

- (27) 太郎はテレビを見た。次郎も {そうした・*テレビをそうした}

この制約をもっと簡単に述べると、「そうする」の中に直接目的語を残すことができないという制約にまとめることができる。三原（2003）では次のような例をあげて、それを証明している。

- (28) 太郎は [vp 息子に理科を教えた]。花子もそうした。
- (29) 太郎は 息子に [v' 理科を教えた]。?花子も 娘にそうした。
- (30) 太郎は 息子に 理科を [v 教えた]。*花子も 娘に 算数を [v そうした]。

三原（2003）では例29は多少落ち着きが悪く、例31、例32のようにしないと容認性が低いと判断する話者もいると述べられている。確かに例29は非文ではないにしてもかなり座りが悪い。

- (31) 子も娘に, 悪戦苦闘しながらも, そうした。
- (32) 花子も娘に, 昔習ったことを思い出しながら, そうすることにした。

これについて三原（2003）では次のように述べられている。

これは、要するに、「そうする」中のそう（基本的には様態表現）を読み込み易い文例の方が、落ち着きがよいという問題だと思われる。つまり「そうする」は「する (=V) + α」であるということである。

このように、「そうする」は統語的な要因だけではなく、かなり意味的な要因がかわっていることがわかる。「そうする」はVPまたはV'を置き換えるもので動詞Vだけを置き換えることができないことは述べたが、複合動詞に関しては不思議な振る舞いをする。

- (33) 太郎は3ヶ月で博士論文を [書いた]。
 ??それに対して、花子は1ヶ月で修士論文を [そうした]。

三原（2003）では動詞「書いた」だけを置き換える例33は直接目的語「修士論文」が残っているので、落ち着きが悪い例になるが、「書いた」を複合動詞「書きあげた」にすると、途端に許容性があがることが指摘されている。「書きあげた」が1単語であるならば、予測としては「書いた」と同じ振る舞いにならなければならない。

(34) 太郎は3ヶ月で博士論文を [書きあげた]。

それに対して、花子は1ヶ月で修士論文を [そうした]。

「書いた」も「書き上げた」も動詞1語であることは変わらないが、「書いた」が真正銘のVであるのに対して、「書き上げた」は「V+α」の意味を持っているという意味的な要因のせいで適格性が向上することが、三原（2003）では指摘されている。

つまり、複合動詞「書きあげる」は、単なる動詞以上の表現効果を持っているのである。「大辞林」で「書きあげる」を引いてみると以下のように述べられている。

「大辞林」

かきあ・げる 40 【書(き)上げる】 (動ガ下一) [文]ガ下二 かきあ・ぐ

(1)最後まで書いて完成させる。書き終える。

「論文を一・げる」

(2)一つ一つ書いて並べる。書き立てる。

「注意事項をもれなく一・げる」

「～あげる」は語彙的複合動詞であるが、その意味として、「位置移動」「動作の完了」という2つの意味を持っており、他動詞としか結合しない。

<位置移動>

具体的な移動・・・押しあげる、蹴りあげる、担ぎあげる、取りあげる、持ちあげる

抽象的な移動・・・見あげる、追いあげる、搔きあげる、

<動作の完了>

書きあげる、編みあげる、塗りあげる、作りあげる、洗いあげる、歌いあげる、買いあげる、数え上げる、

具体的な移動の場合は、位置移動の様態として解釈できるV1を取る、とまとめることができるが、動作の完了の場合、V1にとる動詞を一般化することは難しい。ただ、その意味として当該の動作が終わった後、対象物に何か新しいプラス評価の状態が生まれるということを含意している。

このことは、「～あげる」がプラス評価である「きれいに」とは共起するが、マイナス評価である「きたなく」と共起しないことからもわかる。

(35)

きれいに書きあげる	*きたなく書きあげる
きれいに編みあげる	*きたなく編みあげる
きれいに洗いあげる	*きたなく洗いあげる
きれいに歌いあげる	*きたなく歌いあげる

これらのことから、複合動詞は単なる語と語の合成ではなくて、その意味の中にかなり副詞的な効果を含んでいることがわかる。つまり、複合動詞は一単語であるが、意味的にはかなり副詞的なものを含んでいることが分かる。

したことから、代用形「そうする」は単に動詞を置き換えるという統語的な操作だけではなく、かなり意味的な操作も含まれていることがわかる。

2. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分けるテストの問題点

1節で確認した「そうする」テストは、影山（1993）において語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分類するときのテストとされている。つまり、照応は統語構造における現象なので、それが言えるということは、もはや「語」ではなく統語構造上その動詞が独立に存在していると考えるのである。

しかし、1節では「そうする」で言い換えられるということが、単に照応を表しているだけではなく、もっと複雑な理由があることを確認した。また、統語的複合動詞は統語的と言われているが、真に統語レベルで作られているテ形接続と比べれば、まだ「語」としての特性を残していることも確認した。「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」と「テ形接続」の振る舞いをまとめた表1をもう一度あげておく。

<表1>

	語彙的複合動詞	統語的複合動詞	テ形接続
⑤ 形態的な不可分性 かき混ぜはできるか	✗ できない	✗ できない	○ できる
⑥ 統語要素の排除 別の要素は入れられるか	✗ できない	✗ できない	○ できる
⑦ 外部からの修飾禁止 V1だけ修飾できるか	✗ できない	✗ できない	○ できる
⑧ 語彙照応の制約 そうするで置き換え可能か	✗ できない	○ できる	○ できる

これをみると、確かに語彙的複合動詞と統語的複合動詞は「そうする」置き換えテストではその振る舞いに差があったが、語を確認する他のテストでは差がなかった。一方で、完全にV1とV2が独立しているテ形接続は、すべてのテストで統語的であるという振る舞いを示している。これから分かることは、統語的複合動詞と言っても、単位としてはやはり「語」であり、たとえ補文をとることができたとしても、未だ「語」としての性質も多分に残しているということである。

また、「そうする」テストの問題点は1.1節で確認した。この議論によって、統語的複合動詞といわれている複合動詞は確かに統語的複合動詞と異なる振る舞いをするが、その現象は一枚岩ではなく、異なった理由で「そうする」テストを許容している可能性が出てきた。

それでは、それ以外の語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分けるテストはどうなっているのだろうか。

影山（1993）で語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分けるためのテストとしてあげられているものは次の5つである。

- ① そうするテスト
- ② 主語尊敬化テスト
- ③ V1受身形テスト
- ④ サ変動詞テスト
- ⑤ 重複構文テスト

この中で最も代表的なものとしてあげられているのが「そうする」テストであるが、

そこには色々な問題点があることをこれまでに見てきた。それでは、他のテストはどうなっているか確認してみることにする。ただし、これらは基本的にV1とV2が独立していることを確認するためのテストであるとまとめることができる。つまり、語彙的複合動詞であれば、V1とV2は切り離せないし、統語的複合動詞ならばV1とV2は切り離せるというのが、これらのテストの主旨である。

2.1 主語尊敬化テスト

主語尊敬化テストとは、V1だけを「お～になる」という主語尊敬化の形式にしてみる。もし、語であれば、語には「形態的緊密性」という特性があるので、前項部分だけ「おV1になりV2」とすることはできずに、尊敬化する時は、複合動詞全体にかかり「おV1V2になる」になるとされている。（例は影山（1993：84））

＜語彙的複合動詞＞

- (36) ノートに書き込む→*お書きになり込む（○お書き込みになる）
- (37) 手紙を受け取る→*手紙をお受けになり取る（○お受け取りになる）
- (38) 泣き叫ぶ→*お泣きになり叫ぶ（?? お泣き叫びになる）

影山（1993）では「お泣き叫びになる」言えるとされているが、「お書き込みになる」「お受け取りになる」と比べると不安定な例のように感じられると述べている。

＜統語的複合動詞＞

- (39) 歌い始める→○お歌いになり始める
- (40) しゃべり続ける→○おしゃべりになり続ける
- (41) 電車に乗り損ねる→○電車にお乗りになり損ねる

もちろん、意味的制約として、主語が人間でかつ、尊敬化していえるような動作でなければならないという制約が付くため、「水がこぼれ落ちる」などの無生物のものはこのテストには合格しない。

影山（1993）の主語尊敬化の主張を簡単にまとめると次のようになる。

- ① 統語的複合動詞は「おV1になりV2」のようにV1を主語尊敬化できる。
- ② 語彙的複合動詞は「おV1V2になる」のように複合動詞全体で尊敬化される。

影山（1993）ではこのテストによって、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方の用法を持つ「～かける」「～わされる」がどちらに属するケースか分けられるとしている。

◆ 「～かける」

＜語彙的複合動詞＞

- (42) 先生はその案に疑問を投げかけた
- (43) *先生はその案に疑問をお投げになりかけた

＜統語的複合動詞＞

- (44) 先生はボールを投げかけた
- (45) 先生はボールをお投げになりかけた

◆ 「～わされる」

＜語彙的複合動詞＞

- (46) 先生は家に書類を置き忘れた (=家に書類がおいてある)
- (47) *先生は家に書類をお置きになり忘れた

＜統語的複合動詞＞

- (48) 先生は家の鍵を掛け忘れた (=家の鍵は掛かっていない)
- (49) 先生は家の鍵をお掛けになり忘れた

影山（1993）であげられている語彙的複合動詞の例は「書き込む」「受け取る」「泣き叫ぶ」の3つだけである。これらの例をみると、確かにV1の主語尊敬化はできずに、複合動詞全体で尊敬化しなければならないという、影山（1993）の主張は正しいように思われる。そこで確認のため、他の語彙的複合動詞「切り倒す」「売り払う」「歩き回る」においても主語尊敬化テストを行ってみることにする。すると、不思議なことがわかる。

- (50) a. ジョージ・ワシントンが桜を切り倒した
 b. ? ジョージ・ワシントンが桜をお切りになり倒した
 c. ?? ジョージ・ワシントンが桜をお切り倒しになった
- (51) a. 天皇が皇后の実家を売り払った
 b. ? 天皇が皇后の実家をお売りになり払った
 c. ?? 天皇が皇后の実家をお売り払いになった
- (52) a. 水戸黄門が全国を歩き回った
 b. ? 水戸黄門が全国をお歩きになり回った
 c. ?? 水戸黄門が全国をお歩き回りになった。

これらの例は語彙的複合動詞なので、予測としては、V1を主語尊敬化したbのタイプは非文になり、複合動詞全体を尊敬化したCのタイプは完全に言える例になるはずである。しかしながら、実際やってみると、どちらもかなり不安定な例になった。悪いながらもそれに無理矢理グレードを付けると、完全に言えると予測されたCの例である「??お切り倒しになる」「??お売り払いになる」「??お歩き回りになる」の方がより悪く感じられる。

それではなぜ、このようなことになったのだろうか。主語尊敬化の形式である「お～になる」を分析してみると「お+連用形+になる」という形式を取っている。この連用形は1章の「2.3 複合動詞前項V1の問題～連用形の意味～」で確認したように、実は名詞用法も持っている。つまり、これらは「おVになる」「おNになる」であるか、形態的にははっきりしないのである。

また、これに良く似た形式として、漢語サ変動詞の語幹から作る「ご研究になる」のような用法がある。この「研究」というのは動的概念を表すが、それ自身は名詞であるので「ご研究になる」は「ごNになる」と解釈することができる。接頭辞「お」と「ご」の違いはそれが和語か漢語かの違いだと考えれば、同じものだと考えて問題がないだろう。このように「おXになる」のXは動詞か名詞かはっきりしない。

しかし、「になる」の「に」が格助詞と考えるなら、名詞であることはむしろ当たり

前のことののような気がする。反対に、「おXになる」が名詞と考えた方が、影山（1993）であげられた「お書き込みになる」「お受け取りになる」が言えることに納得できる理由が与えられる。なぜなら、これらの例は「書き込み」「受け取り」のように複合動詞が名詞用法を持っている例であり、一方で、「お切り倒しになる」「お売り払いになる」のような例は「切り倒し」「売り払い」「歩き回り」が名詞用法を持っていない。

こう考えると、影山（1993）では「お泣き叫びになる」が言えるとされていたが、「泣き叫び」が名詞化しているかどうかは微妙なので、やや不安定に感じられたのだろう。影山（1993）では、統語的複合動詞の例としてあげられていた、「鍵を掛け忘れた」をもう一度見てみよう。

＜統語的複合動詞＞

- (53) 先生は家の鍵を掛け忘れた (=家の鍵は掛かっていない)
- (54) 先生は家の鍵をお掛けになり忘れた
- (55) 先生は家の鍵をお掛け忘れになった。

統語的複合動詞ならば、主語尊敬化の形式としてV1だけ主語尊敬化した形式が選択されることが想定される。しかし、これらの例は「お掛けになり忘れた」とも言えるし、「お掛け忘れになった」とも言える。つまり、どちらを使ってもかまわない。なぜなら、「かけわすれ」という形式で名詞化しているからである。実例を見てみよう。

(56)

研究室内注意事項

1. 遠心機のタイマー、PCR機のこと、試験管のふた
2. 水漏れ事故、流し
3. ネットワークコンピュータ
4. 鍵のかけわすれ

(<http://www.bio.nagoya-u.ac.jp:8001/~hori/z1keijiban2.html>)

このように、「おXになる」には名詞的な要素が入ると考える。普通の動詞の場合、それらの連用形は基本的に名詞用法を持っているので、たいてい動詞は「おXになる」

という形式を取ることができる。一方、複合動詞の場合、連用形は名詞用法を持つていいるものと持っていないものがある。名詞用法をもっているものは「おXになる」と言えるが、名詞用法を持っていないものは言えないという制約にまとめられるだろう。

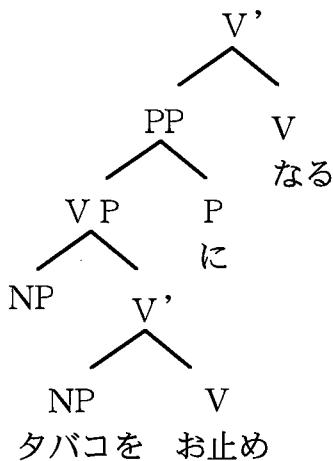
影山（1993）の主語尊敬化の主張をもう一度振り返ってみよう。

- ① 統語的複合動詞は「おV1になりV2」のようにV1を主語尊敬化できる。
- ② 語彙的複合動詞は「おV1V2になる」のように複合動詞全体で尊敬化される。

①に関してはYESである（完全に言える）が、②に関しては必ずしも100%YESではない（言うことはできない）。本研究においても、影山（1993）の主語尊敬化のテストの意義は十分理解しており、統語的複合動詞はV1とV2が語彙的複合動詞に比べて独立していることは事実であるし、統語的複合動詞はV1だけ尊敬化ができることも確かである。その一方で、語彙的複合動詞であっても、「おV1V2になる」にならないものもあるし、語彙的複合動詞でも「おV1V2になる」になるものもある。

影山（1993）では「おXになる」について次のような構造を想定している。

影山（1993：86）



このように設定してしまうと「鍵をお掛けになり忘れた」の時は上手くいくが、「鍵をお掛け忘れになった」になる理由が上手く説明できなくなってしまう。

このように統語的複合動詞で「おV1V2になる」と言えるものは色々ある。

(57)

- お書き直しになる（お書きになり直した）
お話し合いになる（お話になり合った）
お食べ残しになった（お食べになり残した）
お書き損じになった（お書きになり損じた）
お取り忘れになった（お取りになり忘れた）

これらは「おV1 なりV2」でも「おV1V2になる」でもどちらの形式でも、主語尊敬化をすることができる。

2.2 V1受身形テスト

V1受身形テストについては影山（1993）でも反例が多いことが指摘されているので簡単にまとめることにする。

影山（1993：87）

従って、受身形の排除がA類（=語彙的複合動詞）にも当てはまるることは当然予測できる。

(23) *書かれ込む (cf. 書き込む), *押され聞く (cf. 押し聞ける)

しかしこの制限はB類（=統語的複合動詞）には成り立たない。

(24) 名前が呼ばれ始めた, 愛され続ける, 殺されかけた

後で（§3.3.2.3）見るように、すべての複合動詞がV1受身形を許すわけではないが、原則的には可能である。

影山（1993:165）ではその違いをV2が補部としてVPを取るかV'を取るかというという違いで説明しており、V'を取るものはV1を受身形にすることはできないとし、次のような例をあげている。

(58)

「～遅れる」 *なぐられ遅れる

- 「～そびれる」 *誉められそびれる
 「～飽きる」 *誉められ飽きる
 「～かねる」 *叱られかねる
 「～忘れる」 *殴られ忘れる
 「～残す」 *調べられ残す
 「～尽くす」 *調べられ尽くす
 「～直す」 *調べられ直す

詳しい議論は影山（1993）に譲るが、受身形テストはかなり例外が多いので、これだけで語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分けるのは困難である。

2.3 サ変動詞テスト

影山（1993）では、サ変動詞はD構造では「雑談をする」のように句を構成しているので、語彙的複合動詞の前には現れないと仮定した。（例は影山（1993：88））

(59)

- *壁にポスターを接着し付ける（貼り付ける）
- *柵をジャンプし越す（飛び越す）
- *吸引し取る（吸い取る）
- *沸騰し立つ（沸き立つ）

影山（1993：94）で上げている反例は「～あるく」である。これは「借金し歩く、調査し歩く」など例外的に許すとしている。この理由として影山（1993：364）では次のように述べている。

影山（1993：364）

「食べ歩く、調べ歩く」など「～歩く」は尊敬語や代用形式などのテストからすると語彙的複合動詞に分類されるのに、ただ1つサ変動詞との結合（借金し歩く、調査し歩く）については統語的な様相を呈している。一般

に語彙部門で作られた複合動詞はD構造に挿入されるときは单一のVであり、その内部構造は統語的に見通せない。これはD構造において形態構造の枝分かれを取り扱うという一般規約 (bracket erasure: Keparsky 1982) によるものであり、その結果、たとえ「し+V」という語彙的複合動詞があったとしても、その中の「する」の統率力は統語構造には及ばない。ところが「～歩く」は、その語彙的な特性として、形態的枝分かれ構造を保つことができるようである。つまり、「し歩く」は語彙部門で派生されながらも、(89a) の統語的な「し終える」と同じ形態構造を統語部門でも保持していることを考えれば、それにVN編入が適用して「借錢し歩く」などが派生されることになる。

これをみると「～歩く」は統語的複合動詞を認定するテストには合格しないが、構造的には語彙的複合動詞と同じであると述べられている。

しかし、「～歩く」が特別に例外的な例というわけではなくて、語彙的複合動詞であっても、サ変動詞との結合を許す例は他にいくつも思いつく。例えば、「～回る」は「吹聴し回る」「謝罪し回る」「確認し回る」のように言えるので、実際の用例を調べてみた。

(60)

選挙カーが絶叫し回る。

「頑張っております！」

絶叫して頑張ってる気になるのは一種のトリップだ。何に頑張っているのか、うるさすぎて伝わって来ない。

毎日新聞より

(<http://www.mainichi.co.jp/entertainments/engei/senka/2003/0501.html>)

(61)

「心の不況を吹き飛ばそう」をモットーに8ページのタブロイド判の月刊紙を発行。この新聞が故小渕恵三首相の目に止まり、明るい話題掲載に対し感謝の「ブッちホン」をもらったこともある。街の賑わいを肌で感じるために自転車で取材し回る。

(http://naniwa-ikiiki.uketsuke.jp/show_event_detail.php?uno=38)

この他に「～返す」も、「質問し返す」「抗弁し返す」「買収し返す」「スパイし返す」のようにサ変動詞を取ることが可能である。

(62)

一方、Intelytics は、Web サーファーがこうしたスパイ行為を「スパイし返す」ための無料サービスを 2 週間以内に発表する計画だ。「Personal Sentinel」と呼ばれるこのソフトは、舞台裏で稼動している Web バグの数をリストして、「危険水準」に達した Web サイトをユーザーに警告するというもの。

(http://www.zdnet.co.jp/news/0103/13/e_webbug.html)

その他にサ変動詞を取れると思われる語彙的複合動詞をあげてみる。話者によっては座りが悪いと判断される例があるかもしれないが「*接着し付ける」や「*ジャンプし越す」のような例と比べればかなり良いと感じられるだろう。

(63)

「～こなす」

演奏しこなす, 運転しこなす,

「～かわす」

黙礼しかわす, 挨拶しかわす

「～のがす」

挨拶しのがす, 録画しのがす

「～もらす」

補足しもらす, 記入しもらす,

これらの例は自由にサ変動詞が取れるわけではなく、どのようなサ変動詞を取るかは語彙的にある程度決まっている。影山（1993）で言えるとされた「～歩く」でも「調べ歩く=調査し歩く」になるが、「食べ歩く=*飲食し歩く」にはならないことからもそれがわかる。もちろん、すべての語彙的複合動詞がサ変動詞をとるわけではないし、

統語的複合動詞はサ変動詞を取りやすいことも事実である。しかし、語彙的複合動詞の中にもサ変動詞を許すものが1つだけではなく、いくつもあると「例外」ですませるわけにはいかなくなる。

それでは、語彙的複合動詞の中でのサ変動詞との結合を許すものは、他の語彙的複合動詞と何が異なるのだろうか。語彙的複合動詞でV1にサ変動詞を取れるものを「する／やる」テストにかけてみる。語彙的複合動詞は「押し聞く = (*やり聞く)」と言えないように、V1とV2の結びつきが特別なもの（ユニークなもの）であるものが多いが、中にはV2が複合動詞になるためのスロットを持っている物がある。それがこのタイプである。このタイプの動詞は「やりV2」と言うことができ、次のような語彙的複合動詞がそれに当たる。

やりあるく、やりまわる、やりこなす、やりかわす、やりのがす、やりもらす

これらのV2は、V1の動作の行われる方向や、動作の完了、未完了などを表している。もちろん、統語的複合動詞と比べてV1とV2の結びつきはユニークであり、強い意味制限がある。例えば「～あるく」は、普通に「歩く」のではなくて、「あちこち歩き回る」という意味で使われている。これらの例としては「食べ歩く」「飲み歩く」が良く知られているが、これだけではなく色々な例がある。

(64) 「～あるく」

言い歩く、売り歩く、買い物歩く、探し歩く、出歩く、飛び歩く、流れ歩く、浮かれ歩く、渡り歩く、騒ぎ歩く、彷徨い歩く、持ち歩く、連れ歩く

また、単独の複合動詞では言いにくいが、コンテキストがあれば言えるようなものがある。それが「殴り歩く」のような例である。単独で「殴り歩く」を聞いても状況が想定しにくく、やや不安定な例であるが、コンテキストによって、「たくさんの人を殴つて回る」という解釈が与えられれば適格になる。

(65)

彼等は待った。ラジオは三分近く沈黙し、又ぶつぶつ言った。三分後、レコードで『切

りこみ隊の歌』が流れ出した。命一つと引きかえに、千人万人斬ってやる……。続いて学徒出陣の歌、必勝歌。

「お待たせいたしました。陛下の玉音、重大発表ともに十四時まで延期されました。十四時にもう一度ラジオの前にお集り下さい」

久方ぶりに緊張がたかまり、午後は仕事が手につかなかった。みんな重大放送の内容について勝手な予想を喋り合った。教師は殴り歩いたが効果はなかった。

小松左京短編集「地には平和を」より

(<http://www.papy.co.jp/act/book/komatu01/>)

語彙的複合動詞は、それ全体が辞書にまるごと登録されているものが多いことは間違いないが、その一方で「～あるく」のように文法化が始まり、生産性を獲得しつつある例も見られる、これらは統語的複合動詞の生産性には及ばないが、いくらかの生産性を持っており、その意味制限の中で新しい複合動詞を作ることが可能である。

別の言い方をしてみると、「食べ歩く」「飲み歩く」「言い歩く」はその形式全体が辞書（レキシコン）に登録されているような、1回的、非生産的な結合ではなく、後項V2「～あるく」は潜在的に何かの要素を取るスロットを、文法的性質として獲得している。そして、そのスロットにどのような性質の動詞が来るのかもある程度決まっており、我々は辞書に登録された例以外でも、その動詞が「～あるく」のV1として相応しいかどうか判断できる基準を持っているのである。単独では言えないが文脈があれば適格であると判断できることが、そこに我々の文法性判断が働いていることの何よりの証明である。

これらのことから、辞書には無いが、コンテクストが揃えば「ポスターを破り歩く」「ドアを叩き歩く」「ガイドブックを読み歩く」のような例も適格になると予想される。

2.4 重複構文テスト

最後に重複構文テストについて簡単にまとめてみる。重複構文とは、V1を2つ重ねて「走りに走った」のような形式にすることである。重複構文は音韻的制限もある上に、この構文が行為・動作の反復を現すことから、状態動詞、到達動詞、達成動詞は重複構文をとることができない。また、音韻的条件として、語幹が1モーラの語は「見る」な

どは、「*見に見た」のように重複できない、このように、2モーラ以上の活動動詞しかこのテストに合致しないため、制限された範囲での適応となる。

影山（1993）では次のように述べられている。

影山（1993：91）

特に重要なのは、この動詞重複が統語部門で起こるという点であり、この特性を利用すれば、B類（＝統語的複合動詞）の統語性が証明できるはずである。すなわち、B類（＝統語的複合動詞）動詞はV1に動詞重複を許すことができるが、A類（＝語彙的複合動詞）はそれができない。ただし、前述の意味特性のため、B類でも全ての動詞がここに当てはまるわけではない。アスペクトを表すB類動詞の中では「～始める」「～終える」は不適格であり、「～続ける」「～まくる」などが適合する。これは意味的制限であり、語彙的な統語的な議論とは別問題である。

それでは、影山（1993）で上げられている例を確認してみよう。

（例は影山（1993：91）より引用）

＜統語的複合動詞＞

- ① 大臣はそれをひた隠しに隠し続けた。
- ② 彼女は結婚問題で苦しみに苦しみ抜いた。
- ③ 選手達は、公式戦の開幕を控えて走りに走り込んだ。
- ④ 鍛えに鍛え抜かれた身体
- ⑤ その日は運がつきにつきまくった。

＜語彙的複合動詞＞

- ⑥ *行方不明の子供を探しに探し歩いた。
- ⑦ *トーナメントを勝ちに勝ち抜いた。
- ⑧ *子供達に愛情を注ぎに注ぎ込んだ。
- ⑨ *敵を待ちに待ち構えた。

影山（1993）は、このテストによって「～抜く」「～込む」の中にも語彙的なものと統語的なものがあると指摘している。

- (66) 統語的複合動詞 「苦しみ抜く」「走り込む」
 語彙的複合動詞 「勝ち抜く」「注ぎ込む」

しかし、これにはいくつか問題ある。1つ目の問題として、統語的複合動詞「～ぬく」「～こむ」は、「そうする」テストや主語尊敬化テストにはあまり適合しないことがあげられる。

- (67) 「そうする」テスト
- a. *太郎が苦しんだ。次郎もそうし抜いた。
 - b. *太郎が走った。 次郎もそうし込んだ。
- (68) 主語尊敬化テスト
- a. ?? 先生がお苦しみになり抜いた。
 - b. ?? 先生がお走りになり込んだ。

2つ目の問題として、動詞重複が本当に統語の問題か今ひとつはっきりしないことである。「～ぬく」の場合、統語的複合動詞と語彙的複合動詞の意味が似ており、意味的な違いがはっきりとわかりにくい。仮に、統語的複合動詞「苦しみ抜く」を「十分に～する」、語彙的複合動詞「勝ち抜く」を「最後まで～する」という簡単な意味にまとめてみよう。

「知り抜く」は「*知りに知り抜く」と言うことが出来ないので、振る舞いとしては語彙的複合動詞である、しかし、意味的には統語的複合動詞の「十分に知っている」に近いという矛盾が起きてしまう。

また、「守り抜く」は「守りに守り抜く」と言うことができるので、振る舞いとしては統語的複合動詞である、しかし、意味的には語彙的複合動詞の「最後まで守る」に近い。

このように動詞重複は単なる統語の問題ではなく、深く意味の問題が関わっており、

動詞重複だけで統語的複合動詞か統語的複合動詞かを決めるることは、かなり危険なことであると言わざるをえないだろう。

3. 複合動詞の相互承接

以上、影山（1993）であげられている統語的複合動詞と語彙的複合動詞を分類するテストの問題点を見てきた。影山（1993）の統語的複合動詞であればV1とV2を互いに独立させることができ、語彙的複合動詞であれば、V1とV2は形態的緊密性を保持しているという考え方自体には異を唱えるつもりはない。しかし、統語的複合動詞であっても、語の「形態的緊密性」を確認する4つのテストのうち、3つまでは「語」として振る舞いを見せていることから、完全に「語」ではないとはいうことはできない。つまり、統語的複合動詞であっても多分に「語」としての性格は残しているのである。統語的複合動詞は本来「語」であったものが拡張されて、「句」をとれるようになったものであると考える方が自然である。

これに対して、影山（1993）では語彙的的複合動詞と統語的複合動詞の境界ははつきりとしており、中間的なものはないとしている。

影山（1993：93）

語彙部門と統語部門の境界は必ずしも明確ではないのであるが、V-V複合動詞については一応、その区別が守られている。

しかし、影山（1993）の語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分けるテストを見れば見るほど、本当にこの2つは明確に線引きができるのだろうかという疑問が湧いてくる。また、これらの統語的複合動詞と語彙的複合動詞を分ける5つのテストは、本当に同じステータスであるのかという疑問が湧く。

つまり、統語的複合動詞とされているもので、重複構文テストにだけ合格して、他のテストに合格しないものは本当に統語的複合動詞としていいのか、反対に、語彙的複合動詞とされているもので、サ変動詞テストに合格するものは本当に語彙的複合動詞としていいのかという素朴な疑問である。

たとえ、語彙的複合動詞と統語的複合動詞が連續的なものと考えるとしても、基準を設けて、この2つの間のどこかで境界線を引かなければならないことは、十分に承知しているが、それでも、これらははっきりとした別物であると述べるか、グラデーションがある段階的なものであると述べるかではかなり異なっているだろう。

本研究では複合動詞とはルースな一時的、語彙的なV1とV2の結合から、文法化した統語構造に発展していく文法化(grammaticalization)の過程である考え、その文法化(grammaticalization)の度合いにはグラデーションがあると考える。

影山(1993)では「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」は中間的なものがない、明確に二分されるものとして論じられていた。そして、統語的複合動詞の認定にさまざまなテストを設けていた。結果として、統語的複合動詞は完全にVPを補文としてとるものだけに入れられることになり、統語的複合動詞の性格は明確になったのだが、反対に、語彙的複合動詞という名の下に、色々な1つにものがまとめられてしまうことになってしまった。

本研究では影山(1993)では「語彙的」とされていたものの中に、完全に1回的、語彙的なもの(「見舞う」「落ち着く」「入れあげる」「出会う」「寄り添う」のようなもの)と、結合制限はあるが、V1とV2が一定の意味関係で結び付き、いくばくかの生産性を持つもの(「切り倒す」「押し開ける」「揉み消す」「押し上げる」のようなもの)を積極的にわけることとする。

また、V1とV2の関係が分析的な複合動詞の中にも、V1とV2の関係が完全に文法化され、VPをとるものと、Vしかとるものができる複合動詞があることを検証する。複合動詞はV1とV2の関係が分析的なものであっても、基本的には「語」であり〔 〕V2という構造をもっているとする。そして、〔 〕で表される「スロット」の中にVをとるものと、文法化されVPをとれるようになったものがあると考えるのである。そうしてこのように考えることで、より複合動詞の性質が明確になることを後に確認する。

影山(1993)では語彙的複合動詞は、2つの動詞の組み合わせに限られていて、3つ以上は重ねることはできないという語に特有の「二叉枝分かれの制限」があり、それに対して、統語的複合動詞は3つ以上の組み合わせができるとしているとしていた。また、必ず、語彙的複合動詞の外に統語的複合動詞が付くことを指摘した。

(例は影山(1993:93)より引用した。)

<複合動詞の相互承接>

- ① 「語彙的複合動詞」 + 「統語的複合動詞」

客が船に 「乗り込み」 始めた

- ② 「統語的複合動詞」 + 「語彙的複合動詞」

客が船に 「乗り始め」 込んだ

影山 (1993 : 93)

また、A類 (=語彙的複合動詞) は2つの動詞の組み合わせに限られていて、3つ以上重ねることはできない。これは語彙部門における複合語形成が基本的に2つの要素にしか適応しないという二叉枝分かれの制限 (第1章) の現れであると思われる。これに対して、統語的な複合動詞の場合はV1とV2の関係は統語構造において補文関係であるときまっているから、3つ以上の積み重ねが可能になる。

本研究ではそれが語彙的複合動詞であっても、統語的複合動詞であっても、基本的に複合動詞は「語」なので、力の強弱はあるにしても「二叉枝分かれの制限」があると考える。そのため、語彙的複合動詞であっても統語的複合動詞であっても複合動詞の結合は2つであって、多くても最大で3つまでしか結合できないと考える。

影山 (1993 : 93) では複合動詞の連続について次のような例があがっている。

<複合動詞の連続>

- ③ 語彙的複合動詞の連続

*積み上げ重ねる

*積み重ね上げる

- ④ 統語的複合動詞の連続

そろそろ選手が疲れ始めました

脱落し始めかけた

影山（1993）はこれによって、語彙的複合動詞は3つの連続を許さないが、統語的複合動詞は3つ以上連続を許しているとことを示した。しかし、筆者には「④統語的複合動詞の連続」もかなり悪く感じられ、反対に「③語彙的複合動詞の連続」の「積み重ね上げる」はかなり許容できるように思われる。実際に「積み重ね上げる」の例を調べたら実例がいくつも存在した。

(69)

田中耕一さん あいさつ要旨

地道な積み重ね発見に／富山は永遠の古里です 2003.03.03

私がなぜ、ノーベル化学賞という世界に認められる発見ができたのか。両親の背中を見て育ったこと、周りの人に恵まれたこと、地道に積み重ね上げることを学んだこと…。富山の県民性と言われる、粘り強さ、コツコツやるといったことなど富山で育ったことが大きく影響していることは間違ひありません。

北日本新聞記事

<http://www.kitanippon.co.jp/pub/hensyu/nobel/2003/030303.html>

(70)

その富士の山は、この京に例えれば比叡山を二十ほど積み重ね上げた程で、恰好は塩尻のようであった。

伊勢物語 9段訳より

http://www4.justnet.ne.jp/~hana3/Ise_gn9.html

(80)

三塚蔵相が無能な政治家ならば別だが、辞めて"けじめ"をつけさせるのではなく、恒久対策に尽力させて、経験を積んだ政治家に伸びる為のチャンスを与えるべきではないのか。辞任はその結果を見てからでよい。その方が三塚蔵相自身、担当官庁の組織を把握することもできるし、積み重ね上げた経験を、為政に反映させることができるのだ。それは政治家の育成にもつながり、結果、国民の利益となることを意味している。

<http://www.sidetrak.com/Japanese/shoji33.html>

これを見ると「積み重ね上げる」が非文ではないことがわかる。つまり、語彙的複合動詞でも3つ重ねることが可能なのである。

影山（1993）では、語彙的複合動詞が3つ連続しており、一見、その反例のように見えるものとして、「見つけだす、おっぽり出す、引っ張り出す、引きずり回す」などがあると指摘し、それらに対して次のように述べている。

影山（1993：93）

「見つけだす、おっぽり出す、引っ張り出す、引きずり回す」などは一見、反例のように思えるが、「見つける、引っ張る、引きずる」などは一語として語彙化されていると見なされる。

まとめてみると、これらは「見る+つける+出す」という3語ではなくて、「見つけだす」と解釈されるので、2語であるという主旨である。しかし、語彙的複合動詞は語彙部門で派生され、そもそもが、1語であるというのが影山の主張なので、その点では「見つける」と「積み重ねる」は大差ない。もちろん、「見つける」は「積み重ねる」と比べると分析不可能で生産性がない。しかし、これは語彙的複合動詞「積み重ねる」の意味規定と全く同じである。影山（1993）の説明では「見つけだす」が言えて、「積み重ね上げる」が言える理由が説明できない。

これらの現象を解決するために、本研究では複合動詞がどの順番で相互承接するのかはある程度決まっており、その相互承接のルールがあるとする。例えば、アスペクトを表すものは一番後ろにくると考えれば、複合動詞は①のように「乗り込み始めた」と連続しなければならず、アスペクトを表す「始める」が真ん中にきている②の「乗り始め込んだ」が言えなくなるのは当然の帰結である。

それでは、語彙的複合動詞が3つ連続した「積み重ね上げる」はどのように解釈すればよいだろうか。本研究では基本的に複合動詞は時間軸にそって合成されると考える。複合動詞で表される事態は、時間軸に沿って「積んで、重ねて、上げる」という順で認識される。そのため、それを言語形式化する時もその認識を反映して「積み重ねあげる」という順で相互承接されることになる。

複合動詞の相互承接のルールを簡単にまとめると次のようになる。

<複合動詞の相互承接のルール>

- ① 最大3つまでである
- ② 時間軸の流れによって合成される
- ③ アスペクトを表すものは最後にくる

それでは、これらの特徴について順をおってみていくことにする。

① 最大3つまでである

まず、最大3つまでという数の制限について考えてみよう。定延（2000）では数にまつわる様々な文法現象について興味深い考察を行っている。その中で「チャンク」という情報の単位を取り入れて説明している。チャンクというのは「情報」の単位なので、形態的な単位ではない。よって、「D・P・F・I・H・A・E」というアルファベット7文字と、「TV・CD・PR・AM・OK・WC・CM」という7語は、情報的には同じ7チャンクということになる。

定延（2000）は「中国語」「流行語」のように、接辞「語」と語基「中国」「流行」などが合体した「派生語」を「2チャンク仮説」で説明している。このような派生語は基本的に「中国」+「語」、「流行」+「語」という2チャンクで形成されているという仮説である。

2チャンク仮説にしたがって、「見たさ」という接辞を考えてみると、これらは「キムタク」とくっついて「キムタク見たさ」のようになる。

ところが、表面的には「派生語」の容量が2チャンクから3チャンクに拡張されていくようにみえる現象として、「こわいもの見たさ」をあげている。これらは「こわい」「もの」「みたさ」のように一見、3チャンクで形成されているように見える。これに對して、定延（2000）では次のように述べている。ここで言われている「参照箱」とは参照情報を管理するための人間の心内の作業領域のことを指す。

定延（2000：163）

しかし、参照箱のこうした容量の拡張は、表面的なものにすぎない。「こ

「わいもの見たさ」の場合も、参照箱はやなり2チャックの意味情報しかおさめていない。むしろ接辞「見たさ」と合体する語基の意味（[こわい] [もの]）の方が、1要素、1チャック（[こわいもの]）に圧縮されているといえる。

圧縮が生じるかどうかは、意味的な1チャックらしさに大きくかかっている。今の「こわいもの見たさ」の場合は、要素「[こわい] [もの]」のうち「[もの]」の意味が具体性を欠き、前の要素「[こわい]」と合わせてはじめて意味的に1チャックになるという事情のために、圧縮が生じている。

影山（1993）で動詞が3つ付くとされた「見つけだす、おっぽり出す、引っ張り出す、引きずり回す」などはこのタイプである。影山でも「見つけだす」は「見つける」で語彙化していると指摘していたが、語彙的複合動詞の中で、完全に一語化しているものが、どのような位置づけになるのかについては、特に指摘していなかった。影山（1993）では語彙的複合動詞のレベル分けを行っていないかったが、本研究では積極的に1チャックの複合動詞と、2チャックでできている複合動詞を分類する。1チャックとは、V1とV2の結びつきは非分析的で、その一回的な結びつきで語彙化している真に語彙的なもののことを目指す。

これらは別に特別なものではなくて、「見つける」「落ち着く」「見失う」「見張る」「踏み切る」「聞き分ける」「問いただす」「煮詰まる」「着流す」「言いよどむ」「繰り返す」「繰り上げる」「見込む」「見つかる」「割り切る」のようにいくらでも見つけることができるが、完全に語彙化しているものは、単なる「語」という意識はあっても、それが「複合動詞」という意識があまりないかもしれない。

完全に語彙化されたものは情報的には1チャックと認識されるので、「落ち着き払う」「問いただし返す」のように3語に成りやすい傾向がある。

しかし、この最大3つまでの制約は語彙的複合動詞だけの制約ではなく、統語的複合動詞においてもかかってくる。つまり、意味計算の都合上、統語的複合動詞だからといって、自由にいくつでも複合動詞が連続できるわけではないのである。基本的に2つが一番自然で、もし連続できるとしても最大3つまでである。そのことは統語的複合動詞を連続させてみるとわかる。統語的複合動詞は語彙的複合動詞と比べて、自由に結合できるが、それでも、意味的に可能なものでも4つ連続させると非文になってしまう、

(81)

調べつくす

調べつくしきる

* 調べつくしきりおえた

(82)

書きまくる

書きまくり続ける

* 書きまくり続けあきた

(83)

話し合う

話し合い直す

* 話し合い直し終わる

② 時間軸の流れによって合成される

先に「積み重ね上げる」が時間軸の流れに沿って合成されていることを確認した。しかし、時間軸に沿った3つの動詞が必ずしもいつも連続できるわけではない。複合動詞が3つ連続する時、V1とV2が1チャンクとなるかどうかは意味的な問題であるため、「落ち着く」「見つける」のように元々1チャンクのものは当然として、本来は2チャンクのものであっても、1チャンクらしいと認定されれば1チャンクになることができる。ただ、これは意味の問題であって、いつ1つのチャンクになるかを規定することは難しい。ただ、その傾向として、どんなものが1チャンクになりやすいかについては、まとめることができる。それは、複合動詞が連続できるかどうかということには、時間的に近接しているかという「近接条件」が関わっているということである。つまり、元々2チャンクしか入らないところを拡張して、無理矢理3チャンクにしているので、V1とV2とV3は時間的に近接していればいるほど、まとまりやすくなる。

「積み重ね上げる」は「積む」ことが「重ねる」ことになり、かつ、それが「上げる」という方向性もっている。これらは「積む」→「重ねる」→「上げる」という時間軸にそって認識されるが、これらはほぼ同時に近い時間的近接性を持っている。複合動詞としても「積み重ねる」と「重ね上げる」との両方が存在するので、これらが「積み重ねる」+「重ね上げる」形式で融合しているとも考えることができるだろう。

「積み重ね上げる」は語彙的複合動詞が3つ連続したものだったが、良く似た例で「走り抜き去る」を考えてみよう。V1+V2「走り抜く」は影山（1993：76）では統語的複合動詞としてあがっているものである。一方、V3「～去る」は影山（1993：75）では語彙的複合動詞としてあがっているものである。つまり、「走り抜き去る」は統語的複合動詞に語彙的複合動詞が付いた形式になっている。

影山（1993）では「～ぬく」は語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方の用法を持っているとされているので、「走り抜く」が語彙的複合動詞の用法である可能性もあるが、それでも語彙的複合動詞が3つ重なっているので、影山（1993）の反例となる。

これは「走り抜く」と「抜き去る」というものが合成されており、「走る」ことによって「抜き」、かつ、「去る」という移動も表している。これらは「走る」→「抜く」→「去る」という時間軸にそって認識されており、かつ、V1とV2とV3の動作がほぼ、同時に近いという時間的近接性も満たしている。

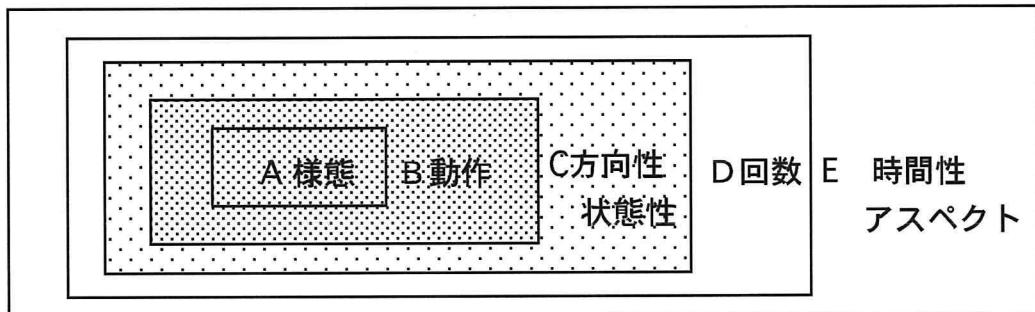
③ アスペクトを表すものは最後にくる

複合動詞が連続できるかどうかは意味的な要因が大きいが、それが接続するときの順番は形式的に決まっている。つまり、自由に3つの動詞が連続でいるわけではないのである。本研究において複合動詞は、＜図1＞のような順で相互承接されると考える。複合動詞の意味は多種多様であり、その全てにラベルをはることはできない。そのため、ここであげた＜図1＞はあくまで、大体の傾向であり、絶対的なルールとしてはアスペクトのような時間を表すものは最後にくるということである。

便宜的にAからEまでの5つの区切りを設定したが、これは5つの動詞を連続できるというわけではない。複合動詞は3つまでしか連続できないので。「積み重ね上げる」のように[A 様態] [B 動作] [C 方向性] で構成される場合もあるし、「乗り込み始めた」のように[B 動作] [C 方向性] [E 時間性] で構成されるものもある。

これらは総てのカテゴリーから1つずつ、というわけではなく「雨が降り出し始めた」のように、アスペクトを表すというカテゴリーから2つ付くこともできる。ただ、「～出す」は「這い出す」のように[C方向性]の用法も持つており、その意味では形態的には[B動作] [C方向性] [E時間性]という順番を保持している。

＜図1＞複合動詞の相互承接



＜図1＞で濃く色をつけたところは、影山（1993）の語彙的複合動詞の用法と重なることが多い、白いところは統語的複合動詞の用法と重なることが多い。よって、全体的な傾向としては、「語彙的複合動詞+統語的複合動詞」になることが多く、影山（1993）の観察とも重なる。

ただ、語彙的複合動詞は3つ連続できないというわけではなく、条件さえ満たせば3つ重なることができる、しかし、アスペクトや回数を表すことが多い統語的複合動詞と比べると、生産性は低くなることは否定できない。また、統語的複合動詞であっても3つまでしか連続できない。これは、複合動詞が2チャンクで形成された語であるために必然的に要求されることであって、多くても3チャンクまでしか連続できない。

4. 複合動詞は「語」か「語+」か

先に、複合動詞は2チャンクという2つの要素から合成されることを見たが、その内容についてもう少し詳しくみてみることにする。チャンクとは情報の単位なので、それがアルファベット1文字でも、単語1語でも区別しない。

1章の「2. 形態論立場から見た複合動詞」のところで、接辞のレベル順序づけを見たが、そこでみたことをもう一度まとめてみる。

◆ レベルIの接辞 例 in-

- ・音声的変化をもたらす

impossible (*in-possible), illegal (*in-legal.)

- ・語より小さい形態素に付加されることもある。

(下線部はそれだけで独立して使えない拘束形態)

inert, intrepid, insipid

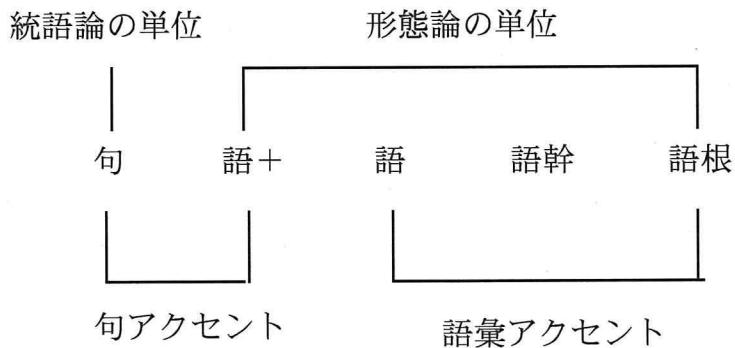
◆ レベルIIの接辞 例 un-

unkind, unhappy, unnatural, unpleasant, unlikely

- ・音声的変化をもたらさない
- ・いつも語に付加される

Selkirk (1982) では、レベルIの語形成を単語より小さい、R (root) という単位を設定し、レベルIIの語形成をW (word) という単位を仮定した。影山 (1993) では語より大きい語+という単位を設定し、句の関係を次のように表した。

<図2>影山 (1993:343)



松本他 (1997) ではこれを受けて、次のような単位を設定した。ここでは漢語を分析の対象にしており、複合動詞については特に触れられていないが、議論を平行して行うことができると思われるため、まず、漢語で見てみることにする。

- ① R (root, 語根) 訪中, 着陸, . . .

- ② S (stem, 語幹) 國際, 積極, 消極・・・
- ③ W (word, 語) 日本, 国立, 教師・・・

まず、Rについてまとめてみよう。Rはそれ以上分析できない、最も小さい形態単位である。「訪中」は「訪米」と「訪～」は後ろに漢字1字の要素を取り、「*訪中国」など後ろに漢字2字の要素を取ることが出来ない。このようなRが2つ結合した時、SあるいはWになる。Sは漢字2字からできる要素であるが、個々には独立できない要素のことを指す。「國際」や「積極」「消極」などは、普通そのままでは表れず「國際的」のように接尾辞を伴って表れるか、「國際關係」「國際人」のように複合語として表れる。

Wも漢字2字からできる要素であるが、これらはいわゆる「語」と呼ばれるもので、独立して用いることができる要素である。

SとWの関係について、松本他（1997）では次のように述べられている。

松本他（1997：30）

一般的に、1字漢語をR、2字漢語をSとすると、「國際」も「訪米」も共にSということになる。ところが、後者は独立して用いることができる。ほとんどの2字漢語は「訪米」と同じように機能するから、特に条件が付かない限り、Sはそのままの形で自動的にWに「格上げ」されるものと仮定しておこう。「國際」や「積極」は格上げを受けない例外である。

和語の場合も、基本的には漢語と平行的に分析できる。例えば、「甘(い)、食べ(る)などの単純語基をRとし、RとRが結合して、「甘酸っぱ(い)、食べ歩(く)」のように合成されるとSに格上げされる。

ここで、松本他（1997）らは「食べ(R)」と「歩き(R)」という単位が結合して、「食べ歩き(S)」というSを形成していることを指摘している。SとWは同形態なので、自立できればWで、自立できなければSということになる。

また、松本他（1997）では「食べ(R)」はRとなっているが、「食べが悪い」のように「食べ」という連用形で名詞になることから、Wとしての用法も持っている。R=Wというのはおかしい上、連用形は独立できるので、本研究では連用形をSとして扱う

ことにする。連用形がSなのか、Wなのかは絶対的に決まっているのではなく、コンテクストから考えて相対的に決まってくる。

例えば、「食べ歩く」のようにV2がSを指定する時、この「食べ」はSとして振る舞うし、「食べが悪い」のように格助詞の前に表れた時は、この「食べ」はWとして振る舞う。

本研究において、複合動詞の基本的な構成は「S + S」であると定義する。これが意味することは、複合動詞を動詞と動詞の結合「W+W」という考えを放棄するということである。特に複合動詞の前項V1は連用形をとっており、それが動的なものであることは間違いないが、それが動詞か名詞か、あるいは副詞かは形態的にも機能的にもはつきりしていない。

このように考えることで、「こびり付く」「ひた走る」「にじり寄る」「がぶり寄る」のように、前項V1が形態的に動詞かどうかわからないものや、「飛び込む」「食い止す」「酔っぱらう」のように後項V2が本動詞かどうか分からぬものが包括的に扱えるようになるという利点がある。つまり、「W+W」と考えると、あきらかに動詞ではないこれらのものが問題になるが、「S + S」と考えるのなら、語未満のものでも複合動詞を形成することが可能であると考えられるからである。

＜複合動詞の語構成＞

複合動詞は「S + S」という単位が合成されたものである。

その一方で、「～はじめる」「～おわる」のようなものをSと考えるのにはすぐには納得できないかもしれない。ただ、ここでSと言っているのは、複合動詞後項V2として使われた時の「～はじめる」や「～おわる」の機能であって、本動詞「はじめる」「おわる」がSであるということではない。「～はじめる」「～おわる」は形態としては「語」と同じ形態をとっているが、機能としてはSであるということである。しかし、ここで問題となるのは「～はじめる」や「～おわる」のような統語的複合動詞と呼ばれるものは「句」を取れることである。これらが「句」を取れることが、統語的と呼ばれる所以の1つになっている。それでは、「S + S」で一語になっているものが「句」を取ることができるのであるか。

「語」というのは形態的緊密性を持っており、その内部に別の要素が入ることができ

ないことは前に確認したが、語の中にも「句」が取れるものがある。

(84) 山登り	*高山一登り
雪囲い	*ひどい雪一囲い
原稿書き	*読みやすい原稿一書き

(85) 町作り	子供に安全な町一作り
人探し	初恋の人一探し

例 84 と例 85 は両方とも動詞の連用形を後ろにとった複合形態である。けれども、例 84 のような「～登り」「～囲い」「～書き」はその前に「句」を取ることはできないが、「～作り」「～探し」は「句」を取ることができるという違いがある。このように、動詞派生の複合名詞において良く似た形態をとっても、その前項に「語」を取るか「句」を取るかという大きな構造的な違いがある。この他に複合名詞で句を取れるものとして、「～風」「～用」「～級」などがあげられている。

このようなものは、初めはその前項に「語」のみを取っていたが、それらが次第に拡張されて、「句」を取れるようになったと考えられる。

ここであげたものは複合名詞の例であるが、複合名詞であっても「句」が取れるのであるから、複合動詞において「句」をとるものがあるのは全く不思議ではない。

松本他 (1997 : 30)

さて、これまで、語形成は語根 (R) → 語幹 (S) → 語 (W) という単位に基づいて行われ、例外的に句まで広がる可能性があることを見た。つまり、これまでの考え方では語形成の最大の単位は語であり、それより大きいものは句として統語論に所属することになっている。しかしながら、通常の語より大きい単位であるけれど、それでも統語論ではなく、形態論の単位であるようないわば、語と句の中間的な単位が認められる。

このような「句」をとれる複合語をどのように捉えるかは、その個人の言語観によるだろう。Lieber(1992)のような立場をとる研究者は「句」を取るものは統語部門で扱

うべきだと主張するであろうし、HPSG の立場をとる研究者は語彙部門で扱うべきだと主張するだろう。これらは言語観の問題であるので、本研究ではそのどちらが正しいかという議論には特に深入りしない。

そのかわり、記述として複合動詞にはV（連用形）しか取れないものと、VPを取りれるものがあるとまとめておくことにする。ここでV（連用形）と書いたのは便宜上のことで、先に述べたように機能的にはSであり、Wより小さい単位である。そして、ある複合動詞後項V2が前項V1にVをとるかVPを取るかはある程度決まっていると考える。

これらについての詳しい考察は4章で行うので、ここでは本研究の基本的な考え方を示すにとどめておくことにする。

＜複合動詞の後項V2＞

複合動詞後項V2は、前項V1にVしか取れないものと、VPが取れるものがある。

V（連用形） + V2

VP + V2

このように、語と句の境界線は曖昧であり、影山（1993）のように語彙的複合動詞と統語的複合動詞がきっぱりと2つに二分されるようなものではないことがうかがえる。しかし、語彙的複合動詞と統語的複合動詞はかなり性質が異なっていることも事実であり、どこかで基準を設定し、複合動詞を分類する必要がある。

それでは、以下、影山（1993）の語彙的複合動詞と統語的複合動詞の問題点を洗い出し、語彙的複合動詞と統語的複合動詞という2分法以外の分類の可能性を探ってみることにする。

5. 語彙的複合動詞の問題点

2章の最初にあげた影山（1993）で語彙的複合動詞の典型的な例としてリストアップされているものをもう一度あげておく。

影山（1993：75）（下線は筆者）

A類（=語彙的複合動詞）

飛び上がる，押し開く，泣き叫ぶ，売り払う，受け継ぐ，解き放つ，飛び込む，（隣の人に）話しかける，こびり付く，飲み歩く，歩き回る，踏み荒らす，誉め讃える，語り明かす，聞き返す，震え上がる，呆れ返る，持ち去る，沸き立つ

この中には様々なものが入れられており、「こびり付く」のように、前項V1が動詞の形態をとっていないものも入れられている。ちなみに「こびり付く」は影山・由本（1997）では抜かれ、代わりに「貼り付ける」「泣きはらす」「勝ち抜く」のような例が付け加えられている。

また、影山（1993）では主に項構造（argument structure）を使って語彙的複合動詞を分析していたが、影山・由本（1997）では語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure, 略して LCS）を使って分析されている。

語彙的複合動詞の特徴を簡単にまとめると次のようになる。

＜語彙的複合動詞の特徴＞

- ① 語彙部門で形成される。
- ② 形態的緊密性を持ち、完全なる「語」である。
- ③ 辞書に登録されている
- ④ 生産性が高い場合でも語彙的な結合制限があり、意味の慣習化がある。
- ⑤ 2つ以上結合できない。
- ⑥ 他動性調和の原則がある。
- ⑦ 右側主要部の関係がある。（並列関係を除く）

この中で特に重要な主張として「他動性調和の原則」がある。語彙的複合動詞にはV1とV2の結合に制限があり、「ドアを蹴り開ける」であれば、「蹴る」も「開ける」も他動詞である。もし、「開ける」に対して「開く」という自動詞を使って、「*ドアを蹴り開いた」にあると非文になってしまう。このように、非対格自動詞は非対格自動詞としか結びつかないという制約を「他動性調和の原則」という。影山は他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の項構造（argument structure）を次のように設定し、語彙

的複合動詞のほとんどが項レベルで形成されたとした。ここでは、Xが外項を表し、Yが内項を表す。

<動詞の構造>

1. 他動詞 : <X<Y>>
2. 非能格自動詞 : <X< >>
3. 非対格自動詞 : <Y>

<「他動性調和の原則」から予測される語彙的複合動詞の組み合わせ>

1. 他動詞+他動詞
2. 他動詞+非能格自動詞
3. 非対格自動詞+非対格自動詞

「他動性調和の原則」を平たく言い換えると、主語として外項を取るものは外項を取るものと結合し、内項を取るものは内項をとるものと結合すると言い換えることができるだろう。この他動性調和の原則は、複合動詞V1 + V2の結合パターンが項構造によつて、決められているということを述べているが、語彙的複合動詞はこの上にさらに語彙的な条件が課せられている。

影山・由本（1997：74-75）では語彙的複合動詞のV1とV2の意味関係として次の4つを設定している。

<語彙的複合動詞のV1とV2の意味関係>

- ① 並列関係
- ② 付帯状況
- ③ 手段・原因
- ④ 補文関係

それでは、これらの関係について、影山（1993）、影山・由本（1997）であげられている具体例を見ながら確認していくことにする。

① 並列関係

並列関係の例としては「こいねがう, 恋い慕う, 忌み嫌う, 媚びへつらう, 思い描く, 思い煩う, あわてふためく, 泣き叫ぶ, 堪え忍ぶ, 驚きあきれる, 恐れおののく」などがあげられる。これらは単に二つの動詞が並んでいるのではなく、同一動作主でかつ、同じアスペクトの特性を持っている必要がある。このように、V1とV2が対等に結びつく、並列関係は厳しい結合条件を持っている。

② 付帯状況

付帯状況の例としては「持ち寄る, 遊び暮らす, すすり泣く, はい寄る」などがあげられる。これらは、右側主要部の関係を持っており、V1の事象がメインイベントであるV2に付随して起こっていることを表す。よってV1は継続的な動詞を取る。時間的にはV1とV2は同時に行われる。

③ 手段・原因

手段・原因の例としては「切り倒す, 吸い取る, 勝ち取る, 泣き落とす, 泣きはらす, 言い負かす」などがあげられる、これらは、右側主要部の関係を持っており、V1が表す事象がV2の表す事象より先行するという時間的因果関係がある。語彙的複合動詞の中で最も生産性が高い。

④ 補文関係

最後に一番の問題となるのが補文関係である。なぜなら、補文関係とは典型的に統語的複合動詞に見られるとされているのであるが、その一方で、影山（1993）は、語彙的複合動詞にも補文関係を設定しているからである。これについて、影山（1993）では次のように述べられている。

影山（1993：109）

補文関係は§3.1で述べた統語的な複合動詞に典型的に見られるものであるが、語彙的な複合動詞にも典型的に見られる。（ここで補文関係というのは、統語構造を直接に指すのではなく、そのような意味関係にあることに留意したい）ここには、従来の研究で「強調（震え上がる、静まり返る）」（姫野 1982a）、「副詞的（干上がる）」（Tagashira 1978）、「主述、補足の関係（置き忘れる、売れ残る）」（森田 1990）など様々に呼称されていたものが含まれる。

語彙的複合動詞における「補文関係」とはそのような意味解釈になるという意味レベルのもので、統語レベルで補文関係を持っている統語的複合動詞とは異なるとされているが、統語的複合動詞であっても、これらは形態的に補文マーカーを持っているわけではないので、あくまで補文構造があると仮定されているにすぎない。このため、この2つの線引きが非常に微妙になってくるのである。

その上、影山の語彙的複合動詞で補文関係を取るとされているものはかなりの数に上り、その意味関係も雑多である。

影山（1993：110）

項構造で補文関係を要求すると思われるV2

- a. ~払う（完全にその状態にある）：落着き払う、酔っ払う、出払う
- b. ~渡る（隅々まで及ぶ）：響き渡る、晴れ渡る、澄み渡る、知れ渡る、鳴り渡る、行き渡る、冴え渡る
- c. ~違う（動作を間違う）：聞き違う、掛け違う
- d. ~違う（動作が一致しない）：入れ違う、行き違う、すれ違う
- e. ~逃す（不成功）：見逃す、取り逃がす
- f. ~止す（中途放棄）：言い止す、食い止す、読み止す
- g. ~果たす（完遂）：使い果たす、討ち果たす
- h. ~漏らす（失敗）：書き漏らす、聞き漏らす
- i. ~付く（着手）：寝つく、居付く、住み付く
- j. ~落とす（不成功）：言い落とす、書き落とす、聞き落とす、見落とす、釣り落とす、取り落とす

- k. ~交わす (動作のやりとり) : 言い交わす, 呼び交わす, 見交わす, 酌み交わす, 取り交わす
- l. ~回す (動作を繰り返し行う) : 搔き回す, 引っ搔き回す, 小突き回す, 押し回す, 撫で回す, こね回す, いじくり回す, 誉め回す
- m. ~習わす (習慣) : 言い習わす, 書き習わす, 呼び習わす
- n. ~返る (完全にその状態になる) : 沸き返る, し�ょげ返る, 静まり返る, 呆れ返る
- o. ~頻る (事象の継続) : 鳴り頻る, 降り頻る
- p. ~こなす (習熟) : 使いこなす, 歌いこなす, 着こなす, 弾きこなす, 読みこなす, 乗りこなす

語彙的複合動詞と統語的複合動詞の補文関係の違いについて影山 (1993) では, 完了のアスペクトを表すといわれている語彙的複合動詞「上げる, 上がる」と統語的複合動詞「終える, 終わる」を比較している。

語彙的複合動詞「上げる, 上がる」・・・項構造レベルの補文構造
統語的複合動詞「終える, 終わる」・・・統語的な補文構造

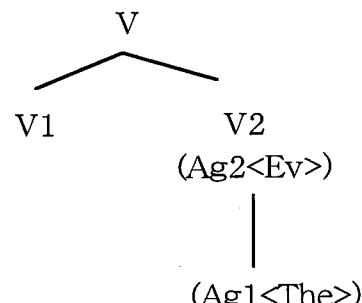
統語的複合動詞はその前項に「VP」を取れるので, 構造的には「VP + 終える」となっており, 語彙的複合動詞は「V」しかとれないで構造的には「V + 上げる」になっているはずである。語彙的複合動詞の場合, その前項は EVENT を取って, なおかつVであるというのは, 理論上破綻している。

影山 (1993) では補文をとる語彙的複合動詞の構造を次のように設定している。

影山 (1993: 109)

語彙的複合動詞「~上げる」

V1 + V2
歌い 上げる
(Ag1<The>)



影山（1993）の補文関係としてまとめられているものを見ると、並列関係、付帯状況、原因以外の意味関係がよくわからないものがすべて補文関係に入れられている。とはいえ、このような項構造で形成される語彙的複合動詞はすべて他動性調和の原則に合致しており、その点では共通している。しかし、語彙的複合動詞でも他動性調和の原則に従わないものがある。影山（1993）では「～付く、～上がる、～立つ、～掛かる、～込む、～去る、～出す」のように、他動性調和の原則に違反するものは、項構造ではなく、語彙概念構造で形成されると考えている。このように、語彙的複合動詞は様々なものが入れられており、一枚岩ではないことがわかる。

6. 統語的複合動詞の問題点

2章の最初にあげた影山（1993）で統語的複合動詞の典型的な例としてリストアップされているものをもう一度あげておく。

影山（1993：75）

B類（＝統語的複合動詞）

払い終える、話し終わる、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見なれる、登り切る、やりつける

影山（1993）影山・由本（1997）では語彙的複合動詞は語彙部門で派生され、生産性が高い場合でも結合制限があり、複合動詞全体の形を辞書に登録しておく必要があるとしているのに対して、統語的複合動詞は統語部門で派生され、生産性が高く、すべてを補文関係としてとらえることができるとしている。

影山（1997：69）

補文関係というのは、たとえば「話し終える」なら「話すことを終える」と言い換えられるように、前の動詞（V1）が後ろの動詞（V2）の目的

語（あるいは場合によっては主語）となる事象を表すという関係を表す。

これらの構造を簡単に表すと次のようになる。

- ・語彙的複合動詞の構造・・・太郎が 酒を [飲み歩く]
- ・統語的複合動詞の構造・・・[太郎が 自分の経験を 話し] 終える

語彙的複合動詞と統語的複合動詞は仮定された構造上では異なる構造モデルを立てられているのであるが、残念ながら複合動詞は補文マーカーを持たないため、形態上、はっきりとした補文を認定することができない。その一方で、語彙的複合動詞においても意味的に補文を取るとされる一群がある。これらをどのように区別したらいいかという疑問がわく。

影山（1993）で統語的複合動詞としてあがっているものは次のようなものである。

影山（1993：96）

始動：墜落しかける、印刷し出す、到着し始める

継続：演説しまくる、演奏し続ける

完了：演奏し終える、到着し終わる、調査し尽くす、困惑しきる、黙秘し通す、
考察し抜く

未遂：見物しそこなう、印刷し損じる、見物しそびれる、受諾しかねる、
返事しおくれる、投函し忘れる、印刷し残す、目測し誤る、返事しあぐねる

過剰行為：執着し過ぎる

再試行：演奏し直す

習慣：運転しつける、運転し慣れる、演奏し飽きる

相互行為：非難し合う

可能：発生し得る

語彙的複合動詞は統語部門で派生されるため、V1 と V2 の結びつきは透明で分析的であるとされている。そして、それはちょうど文や句が作れるように、語彙的な制限

を受けずに形成されると言わわれている。

「未遂」を表すカテゴリーには「～そこなう」「～そんじる」「～そびれる」「～かねる」「～おくれる」「～わすれる」「～のこす」「～あやまる」「～あぐねる」など、いくつかの語が入っている。これらを「学校に行く」「パンを食べる」というごく一般的な活動動詞と他動詞と合成してみる。

(86) 「学校に行く」

- ① 学校に行き損なう
- ②*学校に行き損じる
- ③ 学校に行きそびれる
- ④ 学校に行きかねる
- ⑤?学校に行き遅れる
- ⑥ 学校に行き忘れる
- ⑦*学校に行き残す
- ⑧*学校に行き誤る
- ⑨?学校に行きあぐねる

(87) 「パンを食べる」

- ① パンを食べ損なう
- ②*パンを食べ損じる
- ③ パンを食べそびれる
- ④ パンを食べかねる
- ⑤?パンを食べ遅れる
- ⑥ パンを食べ忘れる
- ⑦ パンを食べ残す
- ⑧*パンを食べ誤る
- ⑨?パンを食べあぐねる

②「～そんじる」⑧「～あやまる」は「学校へ行く」「パンを食べる」の両方で非文になってしまう。また、⑤「～おくれる」もかなり悪い。もし「～おくれる」が補文

を取るなら「(学校に行く) コトがおくれる」「(パンを食べる) コトがおくれる」のように自由に言えてしかるべきであるが、現実問題としてはそういうわけにはいかない。

実際に「～そんじる」「～あやまる」「～おくれる」が結合するV1を調べてみると以下のことになった。個人で調べたものなので、実際にはもっとあるかもしれないが、それでも結合する動詞に制限があることは事実だろう。

(88) 「～そんじる」

打ち損じる、書き損じる、し損じる、見損じる、やり損じる

(89) 「～あやまる」

言い誤る、書き誤る、聞き誤る、見誤る、読み誤る

(90) 「～おくれる」

言い遅れる、乗り遅れる、出し遅れる、出遅れる、死に遅れる、咲き遅れる、立ち遅れる

統語的複合動詞であっても、そのV1に入る動詞に選択制限があるものがあるという事実は、不思議な気がするが、これらのこととは自然なことかもしれない。「未遂」というカテゴリーは暫定的なものであるにしても、同じような意味を表す語が9つもあるのである。もし、これらがすべて単に行為の未遂を表し、すべての動詞と結合可能であるのならこんなにたくさんの形式は必要ないだろう。「始動」というかなり文法的なものを表すものでは「～だす」「～かける」「～はじめる」という3つの形式が存在するし、「完了」に至っては「～える」「～わる」「～つくす」「～くる」「～とおす」「～ぬく」という6つの形式があげられている。もし、これらが、それぞれ異なる意味を表すのならば、語彙の選択制限があるのは当然の帰結である。

これらのことから、統語的複合動詞であってもかなりV1の選択制限があるものと、自由につくことができるものがあることがわかる。

由本は影山と同じモジュール形態論を取る立場であるが、その由本(2002)においても統語的複合動詞の中にも語彙的複合動詞のようにV1とV2が融合し、单一の動詞と同様の振る舞いを見せるものが存在することを指摘している。それらの例として、「～なおす」「～わされる」「～つくす」「～あう」などを上げている。

由本（2002：62）

影山（1993）では、LCSのレベルにおいて起こる語形成は語彙的複合動詞に限られるという主張がなされており、統語的複合に伴うLCSの融合はそもそもない、あるいは複合語形成において重要な役割を果たしていないと考えられるため全く議論の対象にされなかつたのも当然であろう。しかし、個々の複合動詞について詳しく調べてみると、統語部門で形成される複合語の特徴を備えていながら、2つの動詞のLCSがまるで語彙的複合語のごとく融合し、その後の統語現象において単一の動詞と同様の振る舞いを見せるものが存在するのである。

そして、影山（1993）で示された語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方の性質も持つタイプが存在する可能性を指摘している。このようにモジュール形態論を取る研究者の中ですら、統語的複合動詞と語彙的複合動詞の二分法では上手くいかないことが最近になって指摘されつつある。それでは、複合動詞をどのように分類するのが最も適切なのだろうか。

詳しい考察は4章に譲るとして、本研究の考え方を簡単に述べると次のようになる。本研究では大きく、複合動詞を「語彙化しているもの」と「語彙化していないもの」の2つにわけることにする。

まず、大きな2分類として「落ち着く」「見つける」のように完全に語彙化しているAと、何らかのルールに従って形成されているBに分ける。

- | | |
|------|----------------|
| 複合動詞 | A 語彙化しているもの |
| | B 何らかの規則性があるもの |

従来の研究では、完全に語彙化しているものは複合動詞の分析から外されることが多かったが、ここでは積極的にこのグループを認定する。なぜなら、複合動詞というのは、新しい動詞を作るという語形成の一環であり、すべての複合動詞はここから始まると考えるからだ。例えば、誰かが「引き込む」という複合動詞を初めて使ったとする。一番初め、どの意味で使われたかどうかは定かではないが、「引き込む」は使

われていくうちに「引いて中に入れる」「悪事に誘い入れる」「風邪をひく」「中にこもる」などの様々な意味をもつようになる。

そのうちに「引き込む」が「引っ込む」のように音韻変化を起こすと、ますます一語としてまとまるようになり、「中にこもる」「くぼむ」のように特化した意味を持つようになる。このように、語としてまとまっていたり、「落ち着く」のようにほとんど生産性がない独立した複合動詞を「A 語彙化しているもの」にする。これらは情報的には1チャックであり、1語相当である。

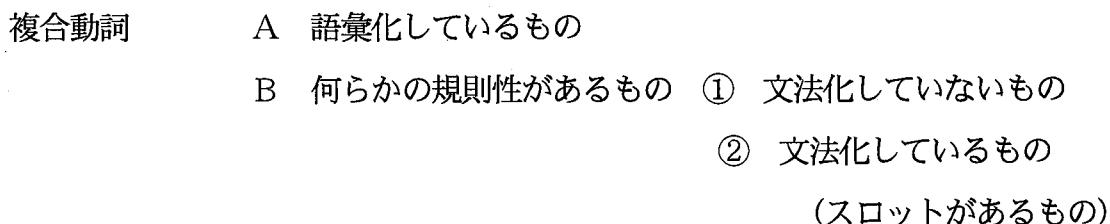
「引き込む」は「引っ込む」のように「語」としてまとまることもあるが、当然ながら「引き」+「込む」という分析的に分解する方向でも変化する場合もある。それが「B 何らかの規則性があるもの」になった場合である。このBのサブカテゴリーとして「① 文法化していないもの」と「② 文法化しているもの」の2つのタイプを想定する。

まず、「① 文法化していないもの」から見てみよう。

前項V1の「引き」が再利用されると、「引き出す」「引き回す」「引き止める」のように「様態」として表すV1として働くようになる。また、後項V2の「込む」が再利用されると、「入り込む」「染み込む」「溶け込む」のように外部から内部への移動を表すV2として色々な語と結合するようになる。

よく似た例として「引き出す」の「出す」がV2になる時、「這い出す」「押し出す」のように、内部から外部への移動を表す語として色々な語と結合する。このように、一定の意味関係をもちながらV1とV2が合成されたものを、規則性はあるもののそれらの関係は予測不可能なため「① 文法化していないもの」とする。これらの関係を図にすると次のようになる。

<図3>



次に「② 文法化しているもの」をみてみよう。

弱いながらも生産性を獲得したV2 「～こむ」 や 「～だす」 がよく使われるようになると、これらは多義性を持ち始めたり、文法化されるようになる。

まず、「～こむ」は、外部から内部への移動から、「しゃがみ込む」「折り込む」のように、小さくなったり状態を表したり、「弾き込む」「使い込む」のように運動を十分に行なったという状態を表したりするようになる。一方、「出す」は移動という空間的なものから、時間という抽象的なものへと変化していき、「降り出す」「泣き出す」のように「始動」のアスペクトを表すようになる。

そこで、同じ「B 何らかの規則性があるもの」の中でも、文法化されたV2が複合動詞になるためのスロットを持つようになったものを「② 文法化されたもの」と考える。スロットをもつかどうかは「する/やる」テストで判定する。

「やり込む」といった時、意味としては「弾き込む」「使い込む」のように、運動を十分行なったという意味になり、内部への移動という意味は認められない。同じように「やり出す」といった時、「始動」という意味になる。このように「やる」という一般的な動詞を入れたときは、どちらも元の意味である「移動」の意味は感じられずに、文法化した意味が先にあがってくる。

このような文法化にグラデーションがあり、複合動詞は「語」であるが、文法化が進むと「語」という意識が薄れ、そのV1に「句」をとれるようになる。例として「～こむ」と「～だす」を比べてみると、「～こむ」は「句」がとれないが、「～だす」は「句」がとれる。「～こむ」と「～だす」はお互いに「移動」をベースにして、拡張していったV2であるが、「句」をとれるようになった「～だす」の方がより文法化していると考えられる。

このように本研究では複合動詞を大きく分けて以上の3つに分類することにする。1つの語がどのカテゴリーに入るかは確定しているわけではない。これらは一回的な結びつきのものが、分解、再利用され、文法化していくという言語のダイナミズムを段階制のあるものとして分類した1つの案である。

はじめは一回的な「語」であった複合動詞が、分析的にとらえ直され、文法化されると共に文法的生産性を勝ち得ていくようになる。しかし、あまりにも高度に多義化したり、時代の流れとともに原義がわからなくなると、これらの複合動詞は再び「語」になってしまふ。つまり、複合動詞は「語彙」と「統語」の間にあり、その間を行ったり

來たりしているのである。

従って、非常に「語彙」的な複合動詞もあるし、反対に、非常に「統語」的な複合動詞もある。これらはすべて程度問題であって、絶対的に分けられるものではない。

第3章

脳内辞書（メンタルレキシコン）とアクセスモデル

ことばは脳のどこでどのように処理されているのかということは、常に言語学者の興味をかき立てていた。それまでは、仮説を立てられるだけであったこれらの問題について、現在、神経学、生理学、遺伝学、心理学、情報科学など学問の垣根を越えた研究が、めざましいスピードで進んでいる。そして、脳に障害を持つ様々なタイプの失語症患者に対する実験や、脳の中をリアルタイムで観察できる機械を通じて、ことばは脳のどこでどのように処理されているのかについて、実際に確認することが可能になりつつある。

アンドリュー・ラドフォード (2002 : 7-8)

Chomsky は第一言語獲得の画一性と高速処理の最も蓋然性が高い説明は、言語獲得の課程は脳内にある生物学的に与えられた生得的な言語機能 (language faculty) (あるいはコンピュータのソフトウェアの比喩を使えば言語獲得プログラム) によって決定されていると仮定することである、と主張する。言語機能は言語経験（つまり子供が受け取る音声言語入力）を基に、文法を開発するための遺伝的に伝えられるアルゴリズム（すなわち一連の手続き）を子供に与える。

チョムスキーはその当初から一貫して言語学は心理学、さらには生物学の領域のものであると主張している。脳科学の領域で、生成文法の影響を強く受けたのが失語症の研究であった。言語障害の性質を、Xバー理論や束縛原理などで説明しようとする試みがなされ、それをもとにして、健常者のもつ言葉の仕組みや構造をしきうとする方向で研究が進んでいった。

90年代に入りミニマリスト・プログラムに発展した生成文法は、ますます脳科学との接点を深めている。ミニマリスト・プログラムは計算体系のあらゆる面において、必要最小限の要素と操作のみを用いる試みであり、それを経済性の原理 (economy principle)

と読んでいる。荻原（1998）では、ミニマリスト・プログラムと脳科学との関係を次のように述べている。

荻原（1998：125）

計算システムの操作や原理にかかわっている「経済性」という概念を全面に打ち出して、以前にもまして脳の認知システム理論として、妥当な言語理論の姿に近づきつつある。この理論を用いた文法の障害研究もすでにはじまっている。

このように、近年、言語学と脳科学は急速な歩み寄りを見せているのである。しかし、これらは現在進行中の研究であり、まだ決定的な結論には至っていない。しかし、脳とことばの関係が新しい側面に入りつつあることも事実である。そして、脳科学において、脳内辞書（メンタルレキシコン）の語形成として妥当性の高いとされているモデルに「二重アクセスモデル」がある。この「二重アクセスモデル」は岩田（1996）、荻原（2002）、門田（2003）など様々な研究者において、その妥当性が実験を通して確認されているものである。しかし、これらの実験は、主に英語のスペルの認識や、漢字の認識が中心で、日本語の複合動詞を取り扱ったものはまだあまり見られない。

本研究では、脳内辞書（メンタルレキシコン）における語形成として、この「二重アクセスモデル」を支持し、それが複合動詞においてどのように当てはまるかをということを検証する。現在、日本語の複合動詞においては影山（1993）で提案されている「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」という2分類が定説となりつつある。それに対して、この「二重アクセスモデル」を使った複合動詞の分類が、より一層、複合動詞の本質を明らかにすることを主張する。

それでは、まず脳内辞書（メンタルレキシコン）がどのようなものかを確認して、その次に「二重アクセスモデル」がどのようなモデルかを検証していくことにする。

1. 脳内辞書（メンタルレキシコン）とは何か

脳内辞書（メンタルレキシコン:mental lexicon）は、「心的辞書」「心内辞書」とも訳され、心理学において創出された概念の一種である。脳内辞書（メンタルレキシコン）は人間の言語活動を情報処理のプロセスとみなし、その時に使用される脳内の語彙情報の集合体のことを指す。脳内辞書（メンタルレキシコン）の解明に関わる研究では、人間の言語処理のプロセスにおいて、どのように語彙情報への検索が行われているかということが、主な関心事となっている。

このように、脳内辞書（メンタルレキシコン）は抽象的な概念であり、一種の仮説であり、その存在を否定する研究者もいる。それでは、脳内辞書（メンタルレキシコン）について述べられている定義を引用してみることにする。

門田（2002：59）

第一言語であっても、第二言語・外国語の場合でも、人はその長期記憶（long-term memory）の中から必要な情報を検索し、こころの中のワーキングスペースであるワーキングメモリ（working memory）内で保持、加工することで、ことばの理解ならびに産出が可能になる。この長期記憶の中で特に、語の形態（綴り）・音韻・意味・統語などの情報が蓄えられている部分は、しばしばメンタルレキシコン（心的辞書：mental lexicon）という名前で表現され、このメンタルレキシコンをいわば「引いて」、意味などの情報を抽出することが、人の言語情報処理においては不可欠であると考えられている。

Aitchison（1994）は、脳内のメンタルレキシコンの特徴について次のように述べている。

- ① 各々の語は通常の紙の辞書のようにアルファベット順に並んでいない。
- ② レキシコン内にエントリーされた語の意味、個数は固定せず、たえず変化・拡大を続いている。
- ③ 個々の辞書項目は、通常の辞書よりも、はるかに多様で多くの語彙情報を有している。

さらに、Aitchison (2003) では、いわゆる紙の辞書と人間の頭の中に存在すると仮定されている脳内辞書（メンタルレキシコン）との違いを次のようにまとめている。

- ① 脳内辞書（メンタルレキシコン）は紙の辞書の情報に比べてより複雑である。脳内辞書（メンタルレキシコン）の場合は、お互いに関連する語同士の結び付きは強く、1つの語が多数の語と関連し合って、存在している。
- ② 紙の辞書はいったん出版された段階で情報は固定化されたものになるが、脳内辞書（メンタルレキシコン）はその人の経験によって常に情報が更新されたり、追加・修正される。
- ③ 1つの語彙項目に対する情報量が決定的に異なる。紙の辞書は、紙幅の制約からきわめて限られた情報しか掲載できず、脳内辞書（メンタルレキシコン）の方が、はるかに情報が多い。これは人間の記憶（より正確には長期記憶）には理論的には容量の制限がないためである。

現時点において、脳内辞書（メンタルレキシコン）という概念もまだ発展途上であり、今後の研究を待つ部分は非常に大きい。このようなレキシコンは心の中、すなわち脳内における存在はあくまでも理論上のものであるが、その存在を仮定しつつ研究をすることは大いに意義があるという考え方とともに、以下、議論考察を展開する。

これまで、脳内辞書（メンタルレキシコン）と表記してきたが、訳語がまだ統一されていないということもあり、これからは「メンタルレキシコン」という仮名書きに統一することにする。そして、本研究のメンタルレキシコンの定義として、脳内にある形態・音韻・意味・統語などの各種語彙情報、および、その事物で代表される様々な記憶心象（語概念）などが集約的に連結されているネットワークということにしておく。

2. 脳内の言語処理からみたメンタルレキシコン

脳内の具体的なメンタルレキシコンの場所については、現在研究が行われている。門田 (2003) によると、大脑損傷患者の症状から、メンタルレキシコンは左半球の側頭部で

あるという示唆が得られている。

門田（2003：209） < >の補足は筆者

この二つの系<単語を表す概念系と、単語・文章生成系>を連結してインタフェイスの役割をはたすのもいわば辞書機構（メンタルレキシコン）の役割である。語想起は名詞の媒介系<メンタルレキシコン>の働きによるものと考えられ、左側頭葉（ブロードマンの20, 21, 38野）にあるとされている。つまり、ここに損傷を受けた患者は、見た物が何であるかすぐに理解はできるが、その名前をいうことができなくなる。興味深いのは、概念系に見られたのと同様、媒介系でも名詞のカテゴリーによって関与する部分が異なっており、また、品詞によっても異なる。動詞の媒介系とされているのは、前頭葉周辺（下前頭回後部）であることがわかってきてている。

これに関連して、人間がことばを理解したり、产出する際に、脳の使う部分が異なっていることが知られている。そして、聴覚処理と視覚処理でも異なっていることがわかりつつある。近年の技術進歩により、脳の言語処理の活動を目にする形で捉えることができるようになった。これらはニューロイメージング（脳の活動の可視化）と呼ばれている。ニューロイメージングには色々なものがあるが、その中の1つである陽電子放射断層撮影法（positron emission tomography ;PET）を使った実験では、単語を見る、単語を聞く、単語を読む、単語を言う、単語を生成するというという活動で、それぞれ脳が活性化する部位が異なっていることが証明された。

このように、ことばの理解と产出では脳の使用部分が異なり、かつ、理解においても、聴覚処理と視覚処理では異なっている。よって、本研究では主に視覚提示された単語における、意味表象へのアクセスについて考察することにする。

人がそのメンタルレキシコンにいかにアクセスして語の意味を理解するかについては、これまで言い誤り（speech errors）の観察、脳損傷患者の発話時のエラー分析などとともに、提示した語の処理過程を検討する心理言語学的実験研究が数多くなされてきた。このような実験の結果から、メンタルレキシコンの語彙項目へのアクセスにおいては、文脈をもたない単独視覚提示の場合に限っても、さまざまな要因が影響することが知られている。メンタルレキシコンのアクセスに影響する要因として、門田（2002：79-81）で述べ

られているものを簡単にまとめてみると次のようになる。

① 出現頻度 (frequency) や親近性 (familiarity) の影響

高頻度語や親近性の高い単語は、検索されやすい状態でメンタルレキシコンに格納されている。この頻度や親密性は大きな影響を与える。

② 語の表記形態の影響

同じ語に異なる表記（例「赤」「あか」「アカ」）を与えることがメンタルレキシコンの検索に影響することが知られている。

③ 文字・発音の対応関係

一般的には文字と発音が規則的に対応している方が、不規則な場合より語の音韻や意味の認知処理が早くなると言われている。

④ 語の長さ (length) の影響

日本語の仮名の場合、「やま」から「がっこう」のように語が長くなるのに応じて、反応時間が長くなることが知られている。

⑤ 隣接語数 (neighborhood words) の影響

一般的に、視覚的な隣接語（例えば1文字違いの語）が多いほどその刺激語の処理が早いと言われている。

⑥ 意味論的要因

語の具体的なイメージの浮かびやすいやすさ、意味の多さ（多義性）、連想語、使用文脈の浮かびやすさなどが影響していると言われている。

⑦ 非単語、疑似単語の影響

実際にメンタルレキシコンにエントリーしていない非単語（non-word）は、その刺激語が単語として実在するかどうかの判断を求める、語彙性判断課題において反応時間が長くなり、音素結合規則や正書法に合致して、文字列としては可能であるが実際には存在しな

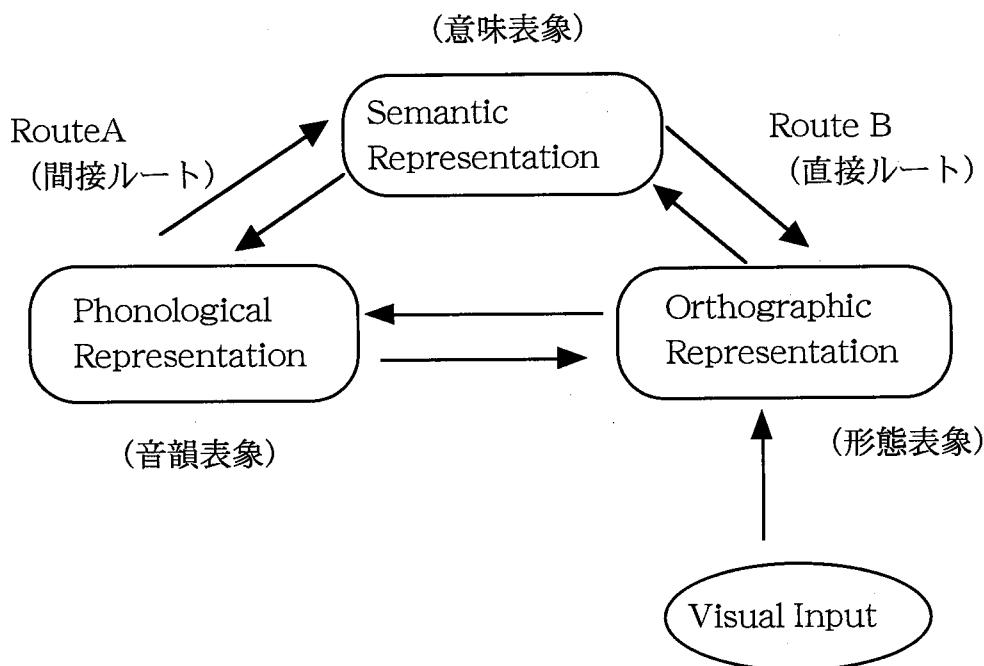
い疑似単語（pseudo word）はさらに反応時間が遅延することが知られている。

3. 二重アクセスモデル

本研究では、提示された単語がどのようにメンタルレキシコンの意味表象へアクセスするのかということについて、門田（1988）（2002）（2003）で提案されている「二重アクセスモデル」を支持する。これは、音韻表象へのアクセスモデルである「二重経路モデル」をもとに、関連する先行研究をまとめて門田（1988）で提案されたものである。本研究では門田（2003：103）で使われたモデルを使用する。

<図1>視覚提示語の意味表象への二重アクセスモデル () は筆者による

門田（2003：103）



これは語の意味情報のアクセスに、音韻（＝間接的）ルートと非音韻（＝視覚的・直接的）ルートを仮定したものである。つまり、語の意味の認知に、「音韻表象」を経て、その後で「意味表象」に向かう「間接ルート」と、「音韻表象」を媒介としない「直接ルート」の2つを仮定することである。これは、音韻ベースの分析的な処理経路、視空間イメージをベースにした全体的な処理経路の両方を仮定するという考え方である。

この2つのルートについては、入力刺激の性質や、処理方略等によって、どちらかのル

ートが優先的に利用されることはあるが、原則として両方同時に使用することが仮定されている。

また、この「二重アクセスモデル」のもととなった音韻表象へのアクセスモデルである「二重経路モデル」では、どちらが優先されるかというのには頻度の影響など様々な要因があるが、デフォルトの場合、文字全体のパターンからメンタルレキシコンにアクセスする「直接ルート」は、分析的な処理経路である「間接ルート」より、処理スピードが速いとされている。

この「二重アクセスモデル」が実験心理学の研究成果をもとに提案されたのに対して、失語症、失読症、失書症などの症例報告や、機能的脳画像 (functional brain imaging) のデータをもとに同様のモデルが提案されている。また、伊藤（2002）でも「二重メカニズム仮説」という名前で語形成には「演算処理」と「連想記憶」という2つの方法があることが検証されている。

このように、現在、メンタルレキシコンにおける意味へのアクセスは、2つの経路があることが、実験においても証明されつつある。本研究においても、複合動詞の意味へのアクセスにこの「二重アクセスモデル」を仮定することにする。

第4章

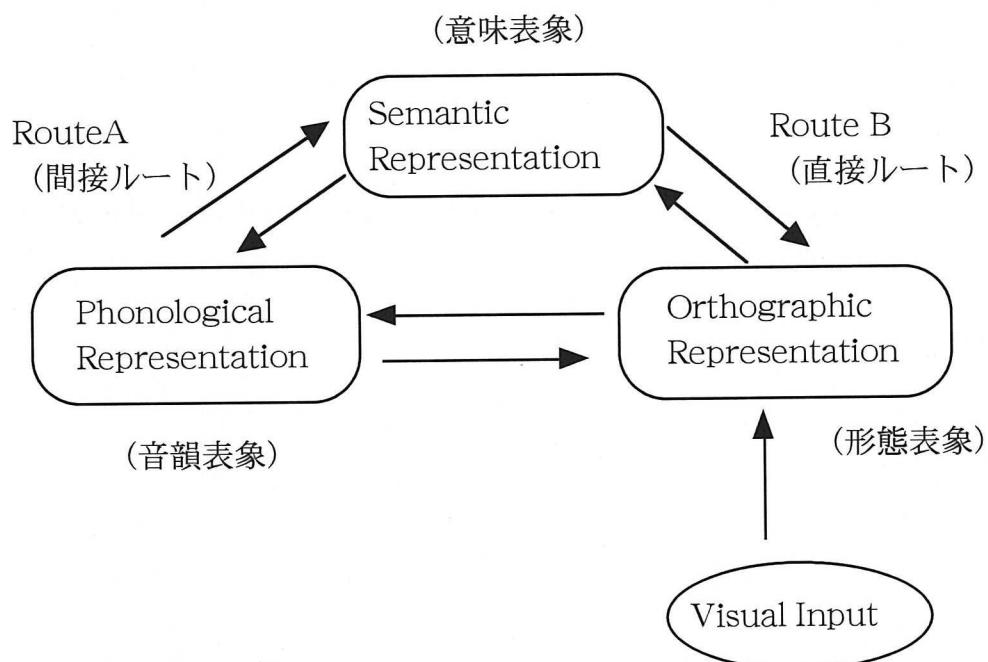
二重アクセスモデルによる複合動詞の分類

1. 二重アクセスモデルによる分析とそのメリット～「見返す」を例にとって～

この章では、複合動詞の意味がどのように決定されるかを通じて、色々な複合動詞の関係を見ていくことにする。ここで使用する「二重アクセスモデル」とは、メンタルレキシコンに蓄えられている語の意味などの情報にどのようにアクセスするかを仮定したモデルである。

<図1> 門田編 (2003:109)

()は筆者による注



「直接ルート」

文字ユニット全体から、それに相当する語の意味をメンタルレキシコンから検索する

「間接ルート」

文字ユニットを形態的に分解、分析し、その後に意味を検索する

なぜこのモデルを使うのかというと、複合動詞の持つ「語彙性」と「規則性」という2つの側面が、このモデルによって上手く説明できるからである。このモデルに従って複合動詞を分類すると、複合動詞は大きく分けて2つにタイプに分類される。1つ目は「直接ルート」で出される「開き直る」「落ち着く」のように、完全に語彙化した複合動詞であり、2つ目は「間接ルート」で出される「切り倒す」「食べ始める」のように一定の規則によって合成される複合動詞である。

ここで、語彙的複合動詞と述べているものは、影山（1993）で述べられている語彙的複合動詞とはかなり異なっている。影山（1993：78）では、語彙的複合動詞であっても複合動詞はV1とV2の合成であると考え、そのV1とV2の関係が雑多なもので、語彙化しているものを語彙的複合動詞としている。そして、生産性に関しては、V1が生産性の高い場合でも語彙的な結合制限があり、複合動詞全体を辞書に登録している必要があるとしている。

影山（1993：75）で語彙的複合動詞の例としてあげているのは、次のような複合動詞である。

A類（=語彙的複合動詞）

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放つ、飛び込む、（隣の人に）話しかける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、讃め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ

これを見ると、影山（1993）では語彙的複合動詞のV1とV2の関係は「様態・手段」「付帯状況」「並立動作」「アスペクト」「補文関係」などが見られるとし、語彙化しているものとしながらも、V1とV2の関係と捉えていることが分かる。

また、影山（1993：93）では、語彙的複合動詞は3つ以上、連続することはできないとしており、その反例として「見つけ出す、おっぽり出す、引っ張り出す、引きずり出す」をあげている。そして、これらについて次のように述べている。

影山（1993：93）

「見つけ出す、おっぽり出す、引っ張り出す、引きずり出す」など是一見、反例のようなものに思えるが、「見つける、引っ張る、引きずる」

などは一語として語彙化していると見なされる。このようにA類を語彙的な（つまり、語彙部門で作られる）複合動詞、B類を統語的な（つまり、統語部門で作られる）複合動詞と認定することによって、両者の差異は生成文法の体系から自動的に導き出すことができる。後に第6章で示すように、語彙部門と統語部門の境界は必ずしも明瞭ではないのであるが、V-V複合動詞については一応、その区別が守られている。

この記述を見ると、語彙的複合動詞は語彙部門で作られるので、「語彙」なのであるが、その中に1語として語彙化しているものと、そうでないものがあるものを暗に示している。

本研究で定義する語彙的な複合動詞とは「直接ルート」によって出される複合動詞のことを示す。これらは、完全に複合動詞全体が一つの「語」になっているものである。例えば、「落ち着く」「付き合う」「見つける」「見舞う」「引きずる」などは形態的には複合動詞の形態をとっているが、これらの形態と意味の関係は恣意的であり、意味的には1チャンク、1語相当のものである。これらは、影山（1993）の語彙的複合動詞の中では特に触れられていなかったものである。

これらの複合動詞は完全「語」である。つまり、足を交互に素早く動かす運動を「ハシル」と名付けるには特別な理由はなく、これと、同じレベルで、「見舞う」「落ち着く」「付き合う」はある動作に対して恣意的に名付けられていると考える。このように、複合動詞は形態的にはV1とV2の「複合」を取っているが、それがすべて文法的な規則に則って作られたと考えてしまうと、複合動詞の「語彙性」を救うことができなくなってしまう危険性がある。

ただ、複合動詞の場合、単独の動詞と異なるのは、形態的にはV1+V2という分析可能な2つの形態から構成されているため、何らかの理由があって、そのV1とV2が選択されていると考えられることである。つまり、「付き合う」の「人と交際する」という意味は、「付く」+「合う」の意味の和からは計算できない。しかしながら、「合う」という二人の人間の相互動作を表す形式が「付き合う」に使われているのは偶然ではないだろう。また、同じような例として、物理的な移動を表す「田舎に落ち着く」が、やがて心理的な状態「落ち着く」を表すようになったのは偶然ではないだろう。

しかし、複合動詞が「語」である限り、その語義や内実をすべて明らかにすることは「ハシル」や「ネコ」の語義を確定するのに等しい仕事である。「ネコ」の語源としては、昔、ネコの鳴き声が「ネウネウ」と表されていたからだという説や、よく寝るからだなどと諸説あるが、その中の1つに確定することは不可能である。それと同じように、それがすっかり語彙化してしまった現在、「見舞う」「落ち着く」「付き合う」の語義や語源を明らかにすることは困難なことである。

このような、「直接ルート」で出される語彙的な複合動詞は、今までの複合動詞の分析においては、周辺的なものとしてあまり省みられることはなかった。しかし、これらの例は複合動詞の中で限られた特殊な例ではなく、「見舞う」「(心が) 落ち着く」「見つける」「みとれる」「付き合う」「張り合う」「見据える」「成り下がる」「(実施に) 踏み切る」など、数多く見ることができる。

逆に、これらの複合動詞の担っている部分は、普通の動詞では言うことのできない事態を述べる、複合動詞独自の表現性が発揮される部分だと言えるだろう。複合動詞を手持ちの語で表すことができない状況を言い表すための「新語」を作る操作だと考えるならば、このような完全な語である複合動詞は、ある意味、最も複合動詞らしい複合動詞だと言えよう。

このように、複合動詞の中にも「直接ルート」と「間接ルート」という2つの経路を設定することによって、完全に語になっているものと、そうでないものとの位置関係がはっきりし、より良く複合動詞の全体の体系がとらえられるようになるのである。

では、これから「二重アクセスモデル」を利用した複合動詞の分析を見ていくことにする。すでに述べたように、本研究では、複合動詞の意味を検索するためのメンタルレキシコンへのアクセスには「直接ルート」と「間接ルート」の2つの経路があることを仮定する。そして、「間接ルート」で出される意味の下には、2つの下位分類（サブカテゴリー）があることを仮定する。よって、複合動詞の意味には3つのレベルを設定する。議論を円滑に進めるために、まず、分かりやすい例を使ってそれぞれを概観し、その後で個々の具体例について詳しく見ていくことにする。

手始めに「見返す」を例にとって、これが「二重アクセスモデル」でどのように説明されるのかを確認していくことにする。まず、「見返す」という語を単独で聞いたとき、どのような意味を思い浮かべることができるだろうか。

大辞林で「見返す」を引くと次のような意味になっている。

みかえ・す 一かへす 02 【見返す】

(動サ五 [四])

(1)もう一度見直す。

「あらためて書類を一・す」

(2)見られたことに対して、こちらも相手を見る。

「相手の目を一・す」

(3)昔あなどられた相手に、立派になった姿を見せつける。

「昔の仲間を一・してやる」

(4)後ろをふり向いて見る。見返る。

「きつね一・しー・しして前に走り行く/宇治拾遺 1」

話者によって多少の違いはあるが、まず、最初に(3)の「昔あなどられていた相手に立派になった姿を見せつける」を想定した人が多いだろう。(1)の「もう一度～する」や(2)「やられたことに対して、こちらも返す」という意味を想定する話者もいるかもしれないが、(4)の「後ろをふり向いて見る」を真っ先に思い浮かべた話者は少ないだろう。「返す」という動詞には、「ひっくり返す」「裏返す」のように「向きを逆にする」という意味があるので、動詞と動詞の合成という観点から見ると(4)の「前を向いていたものが、後ろを振り返って見る」が最初に出てきても不思議ではない。しかし、それにも関わらず、語彙的な意味の方が先に出てきやすいのは何故だろうか。このことは、分析的、合成的な意味よりも語彙的な意味の方がメンタルレキシコンでは早く決定されることを表す1つの例である。

これは「見返す」だけが特別な例ではなく、「落ち込む」「引き締める」など、「直接ルート」で出される語彙化した用法と、「間接ルート」で出される合成的な用法の両方を持っている語でしばしば起こることである。コンテクストがない状態で「落ち込む」を聞いた時、「低いところに落ちてはまる」より「意気消沈して気持ちがふさ

ぐ」の意味が先に出てきやすく、「引き締める」を聞いたとき、「引っ張ってしめる」より、「心や体をゆるみのない状態にする」という語彙化された意味の方が出てきやすい。

もちろん、これらの前提としてメンタルレキシコンに語彙的な「見返す」「落ち込む」「引き締める」が登録されているという条件は必須である。もしも、これらの語彙的な意味がメンタルレキシコンに登録されていなければ、我々は「間接ルート」のみを使って合成的に解釈するしかない。また、メンタルレキシコンに登録されていても、「直接ルート」で出される意味の方が、滅多に使われない特殊な意味であったり、「間接ルート」で出される意味の方が、日常生活において使われる頻度が非常に高い場合などは、産出される順序が逆転する可能性がある。しかしながら、「見返す」「落ち込む」「引き締める」を見ると分かるように、基本的には「直接ルート」と「間接ルート」の両方で解釈される語があった場合、「直接ルート」の方が早く意味が産出される。

それでは、「見返す」の意味が「二重アクセスモデル」の「直接ルート」と「間接ルート」で実際にどのように出されるかを考察してみよう。

議論を始める前に、「見返す」の(4)の意味、「後ろを振り返ってみる」の例として、大辞林では「宇治拾遺集」の「きつねー・しー・して前に走り行く」という例があがっている。そのため、もしかするとこれらは古い例で、現代には残っていないと感じられるかも知れない。そこで、「見返す」は現代語でも十分に使われているということを次の実例で確認してみよう。(4)の「見返す」の意味は、コンテクストがあれば良くなるが、合成的に産出されるが故に、逆にコンテクストがないとやや不安定に感じられ、語彙化している例の意味の方が早く産出できる良い例である。

(01)

定刻通りキックオフ。楽団演奏による応援が非常に心地よい。ところが、後ろに構えるバレンシア応援団の悪戯で、気分は試合観戦どころではなくくなってしまうのだ。最初はビニールで出来た空気入りの大型の棒で頭を叩かれた。後ろを見返すとバレンシアの応援団は笑っている。痛くも無いし、まあ冗談で許せる範囲だ。

(<http://homepage2.nifty.com/hrvgo/trans2/1207.htm>)

(02)

――――――この階段は、何かがおかしい。

二人は一旦足を止めた。後ろを見返すと、すぐそこに階段の入り口がある。

「これはいったい……？」

ひき返してみると、それは確かに二人が入ってきた入り口であった。もちろん店もそのままである。

[\(http://fa.puresilk.ac/zerox/black10.html\)](http://fa.puresilk.ac/zerox/black10.html)

まず、「見返す」という形態を見たとき、まず、大きく分けて2つのルートでメンタルレキシコンへのアクセスが始まる。1本目が「直接ルート」で、「見返す」という形態全体で検索をかける。2本目が「間接ルート」で、「見返す」を「見」+「返す」のようにV1とV2の意味を分析的に分けて検索をかける。

「直接ルート」と「間接ルート」は並列処理であるが、この2つの処理のスピードを比較すると「直接ルート」の方が早く意味が決定される。その理由として、まず1つ目に、形態を分解する手間がない分「直接ルート」の方がより処理手順が少ないことがあげられる。2つ目に、「直接ルート」はメンタルレキシコンにその形態が存在すれば、その時点で意味が確定するため、V1とV2に分解し、分解したV1とV2の意味を個別に確定した上で、再び1つの意味に合成しなければならない「間接ルート」より早く意味を決定できることがあげられる。つまり、「間接ルート」の方が情報処理のコストがかかるのである。

このような情報処理上のコストという経済的な理由により、通常は「直接ルート」で出される語の意味の方が早く产出されると考える。そして、出てきた意味を文全体の意味と照合して、問題がなければ意味がそこで確定する。しかし、ここで「直接ルート」の方が早く意味が確定するといつても、これらは頭の中における抽象的な作業である。「直接ルート」と「間接ルート」の差はあったとしても一瞬のことで、決して目に見えるような差ではない。ただ、これらの違いが存在することは「見返す」「落ち込む」のように、「直接ルート」で产出される意味と、「間接ルート」で产出される意味の両方をもつような語では、「直接ルート」で产出される意味の方が優先的に出てくることから確認することができる。

さらに、「直接ルート」で产出された意味が文全体の意味と照合して問題があった場

合、並行処理されている「間接ルート」で出された意味との照合を始める。「見返す」のように多義であった場合、「直接ルート」で出された意味③「昔あなどられた相手に、立派になった姿を見せつける」が文全体の意味に合わなければ、「間接ルート」で出された意味①「もう一度見直す」、意味②「見られたことを受けて、相手を見る」、意味④「後ろを振り返って見る」などの意味と文全体の意味とを順番に照合をしていく。

「直接ルート」と「間接ルート」でそれぞれ出された意味と文全体の意味の照合も並行処理されるが、それに加えて「間接ルート」で複数の意味が産出される場合は、さらにそれぞれの意味と文全体の意味との照合も並行して行われる。しかし、これらのステータスは同じではなく、よく使われる意味、つまり、出現頻度が高いもの、文法化しており意味が確定しやすいものや、コンテストから予測しやすいものは意味産出にかかる時間が少なくてすむと考えられる。逆にいえば、滅多に使われない出現頻度の低い語や難易度の高い語、多義でコンテクストや状況から意味内容の整合性を判断する必要があるような語は意味を確定するのに時間がかかるということである。

また、文という物は線状（リニア）なものである。よって、「太郎は大きくなつて父親を見返す」という文で、「太郎」「大きくなつて」「父親」という情報が入った段階で、語の意味はどんどん絞り込んでいく。つまり、「原稿を見返す」のような「もう一度～する」という意味は、「父親」という目的語が決定された時点で、優先順位が下がる。その代わりに、コンテクストから該当する意味に近いものがどんどん活性化され、意味の優先順位の並び替えが行われ、最終的には1つに絞られる。よって、「見返す」のような多義語であっても、一度に4つも5つもの意味を同時に計算しなければならないということは、実際には滅多に起こらないであろう。

このように、本研究では、複合動詞は形態的には2つの動詞の結合という形式を取っていても、それを1つの形態（ユニット）として処理するか、2つの形態（ユニット）として処理するかということで、大きく分類することにする。

ここでは「直接ルート」から出される複合動詞は、完全に「語」であると考える。このような語は「落ち着く」「見つける」「見舞う」のように曖昧さがなく、その形式で独立して存在しているものだけでなく、「見返す」のように「直接ルート」から出される意味と「間接ルート」で出される他の意味とが並立的に存在している場合もある。このような違いはあっても、「落ち着く」も「(立派になって見せつけるとい

う意味での）見返す」も、「直接ルート」で出される完全に語彙化した意味の場合、「レベル0」と呼ぶことにする。

ここで気を付けなければならないのは、これらは、「形態」のレベルではなく、あくまで「意味」のレベルであるということである。つまり、従来の研究のように「～かえす」という後項V2がどのレベルかというような分類ではない。

「レベル0」の意味

「レベル0」の複合動詞は、その複合動詞全体で1つのユニットとしてメンタルレキシコンに登録されており、「直接ルート」を使ってアクセスされる。これらの複合動詞の意味はV1とV2の2つの動詞の和からは計算不可能で、かつ、生産性がほとんどない。

このモデルのメリットとしては、影山（1993）では切り捨てられていたような、完全に語彙化している複合動詞が、上手く複合動詞の体系の中に位置づけられるだけではなく、規則に従って产出される意味と、メンタルレキシコンにそのままの形で登録されている、語彙的なものの位置関係がはっきりすることである。また、複合動詞は、本質的に多義になりやすく、「見返す」のように複数の意味を持つことも珍しくない。そのように複数の意味を持った時、影山（1993）では「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」と区別するだけであったが、このモデルを使えばその位置関係について上手く説明できる。

また、影山（1993）では、統語的複合動詞の意味は透明かつ分析的で、語彙的複合動詞は分析不可能なものとしていた。もし本当にそうならば、意味が分かりやすい統語的複合動詞の方が、早く意味が決定されるはずであるが、実際には、「レベル0」の完全に語彙化した意味の方が早く意味が決定される。そして、どうして完全に語彙化した意味の方が、早く決定されるのかという時間差については、影山（1993）のモデルでは説明することは不可能であったが、「二重アクセスモデル」を使うと、完全に語彙化した意味と、規則に従って出される意味の時間差もこのモデルでは上手く説明できるのである。

2. 「間接ルート」で出されるレベル2の意味～「見返す」を例にとって～

「間接ルート」で出される「見返す」の意味をもう一度振り返ってみよう。それは次の3つの意味が存在した。これらを「そうする」テストにかけてみると面白いことがわかる。

意味1 「もう一度見直す」

意味2 「見られたことを受けて、相手を見る」

意味3 「後ろを振り返って見る」

(03) 意味1 「もう一度見直す」

??太郎が英文要旨をもう一度、見た。次郎もそうし返した。

(04) 意味2 「見られたことを受けて、相手を見る」

太郎は花子の顔をまじまじと見た。むつとした花子もそうし返した。

(05) 意味3 「後ろを振り返って見る」

*太郎は後ろの人を振り返って見た。次郎もそうし返した。

例 04 の意味2 「見られたことを受けて、相手を見る」は、そうするテストで言うことができ、「そうし返せ！」のように命令形にできることから、VPを取りることがわかる。しかし、その他の意味は「そうする」テストには合格しない。メンタルレキシコンの中では、意味情報だけではなく、それぞれの意味がどのような統語構造をとり、どのようなV1を取るかについても登録されていると考える。

(06) 「～かえす1」

意味：「もう一度～する」

構造：Pが (Oを) V1 しかえす。

文情報：V

主語情報：主語は意志があるもの

その他：1回やると同じことが2度とできない動作はとれない

*死に返す *髪を切り返す

(07) 「～かえす2」

意味：「やられたことを受けて、相手に返す」

構造：P1がP2に（～を） V1 しかえす

文情報：VP

主語情報：主語は意志があるもの

その他：P1, P2は典型的には有情物、またはそれに準ずるもの

(08) 「～かえす3」

意味：「運動の向きを反対にする」

構造：Nが（～を） ～かえす

文情報：V

主語情報：特になし

その他：広い意味でベクトルや対立概念を含意しているもの

「見られたことを受けて、相手を見る」という意味を持つ「～かえす2」はVPを取り取ることができ、かなり文法化している。そのことは「やり返す」「し返す」という「する/やる」テストにかけてみたとき、「もう一度～する」という意味にしか解釈できないことからもわかる。

このように「～かえす」はかなり文法化しており、複合動詞後項V2は複合動詞となるためのスロットを持っていると言える。このように高度に文法化したものを「レベル2」とする。「レベル2」になると、どのV1とどのV2が結合するかということを、高い確率で予測することができるようになる。

「レベル2」の意味

「レベル2」の複合動詞は後項V2が文法化しており、前項V1を取るためにスロットを持っている。後項V2は文法化しているために、色々なV1と結合することができる。その中でも高度に文法化したV2はVPを取るようになり、そこまで文法化し

たものは、ほぼ完全にV1とV2の結合を予測することができ、意味もV1とV2の和として計算することが出来る。

「～かえす1」（もう一度～する）や「～かえす3」（運動の向きを反対にする）は、文法化が進んだ「～かえす2」（やられたことを受けて、相手に返す）と比べると、本動詞の意味を引きずっているため結合制限が厳しい。しかし、V1とV2の結合には制限があるが、その結合は分析的な解釈が可能である。よって、演繹的にV2からV1を予測することは不可能であるが、複合動詞を見て、帰納的にV1とV2が結合して産出された意味を解釈することはできる。

このように、「～かえす」のように「やりかえす」「しかえす」の形式で独立できるV2は、すでにスロットを形成しているものとする。このスロットは、文法化の度合いによって、Vしかとれないものから、最も文法化したVPをとれるものまで「レベル2」の中でもグラデーション的段階性をもっていると考えられる。ただ、複合動詞が多義の場合、何のコンテキストもない状態で抽象的な動詞「やる」が入って「やりかえす」と言った場合、この「やりかえす」は最も文法化した意味で解釈される。なぜなら、V1に意味がないので、V2に最も安定して結合し、明確だと思われる意味を担わせないと、意味が解釈できないからである。

このような理由から、「～かえす」の用法の中でも、前項V1が埋まっている「見返す」は、コンテキストがない場合、「レベル2」の意味よりも情報処理コストが低い「レベル0」の意味で解釈するのが一番早く意味計算ができる。しかし、前項V1が意味のない「やりかえす」になると、「レベル0」の意味は排除され、多義である「レベル2」の中のどの意味をとるのが一番適切か、判断するということになる。ところが、前項V1が「やる」という一般的な動詞なので、具体的な状況を設定することができず、どの意味を表すかすぐに決めることができない。結局、解釈上の問題として最も文法化した意味である「やられたことを受けて、相手に返す」と解釈するようになる。

このように「する」「やる」のような一般的な動詞を入れて、意味が取れるということは、その形式が「する」「やる」のような一般的な概念を表す動詞をとることができるスロットを持っていることを表している。このとき、解釈上、最も文法化された意味として解釈されるため、多義であるすべての意味が出てくるわけではない。こ

のように「する」「やる」、あるいは動詞によっては「なる」が入るかどうかを確認するテストを「する/やる」テストと呼ぶ。そして、「する/やる」テストに合格するものを「レベル2」の複合動詞とする。

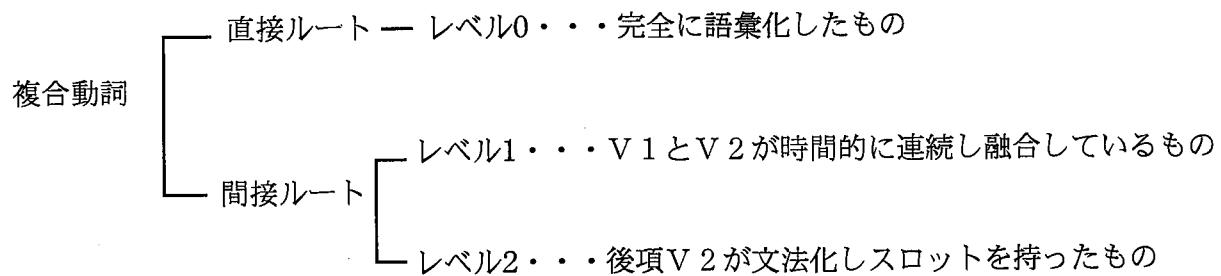
このように、その複合動詞が多義であった場合、すべての用法が等しいレベルで文法化されるわけではなく、文法化の進んだ意味からそうでない意味まで、語によって文法化のレベルは異なる。また、文法化を促進するものにはいくつかの要因があり、一定の方向性がある。このことについては、後に詳しく考察する。

「～かえす」で確認したように、本動詞が多義であった場合、複合動詞も多義になる場合が多い。その上、複合動詞にするということ自体に、本動詞からは思いもつかないような新しい用法を作り出すという潜在的可能性が潜んでいるのである。

3. 「間接ルート」で出されるレベル1の意味～「切り倒す」を例にとって～

今まで述べた「直接ルート」「間接ルート」と「レベル0」と「レベル2」の関係について簡単にまとめると次のような図になる。議論を分かりやすくするため、まず、対極にある「レベル0」と「レベル2」を考察したが、「レベル1」はこの2つの中間的な性質を持っている。

<図2>



直接ルートで出される語彙化した意味を、本研究では「レベル0」の意味と呼ぶことにする。また、間接ルートで出される文法化した意味を、「レベル2」の意味と呼ぶことにする。そして、「レベル0」と「レベル2」の間に、「レベル1」という意味を設定する。

「レベル0」はその文字ユニット全体で語彙化しており、「レベル2」は後項V2が文法化しスロットをもつたものであった。「レベル1」は、後項V2はスロットを持つほど文法化しているわけではないが、一定の意味関係をもってV1とV2が結合しているものを指す。これらの意味関係は、解釈の問題であって、そのV1とV2の関係が完全に文法化されているわけではない。そのため、V1とV2の結合には慣用的な意味制限があるものが多い。

複合語の意味特徴として窪園（1995）では次のように述べられている。

窪園（1995：52）

複合語と句構造の違いを述べる前に、両者の間に共通性があることを指摘しておく必要がある。基本的な共通性は語順に関するもので、日本語でも英語でも、複合語と句構造がともに「修飾語（modifier）+ 主要部（head）」という構造を持つ。

「レベル1」の複合動詞は文法化された形式ではないので、V1とV2が並んでいることに意味がある。つまり、これらV1とV2は時間的にも物理的にも切り離すことができない事象であると解釈されるのである。つまり、これらはメトニミーと呼ばれるような近接性によって結びついている。これらV1とV2は、時間的に先に行われるV1が前項で、その後に行われるV2が後項というように時間軸に沿って並べられる。これらはその意味によって大きく分けて2つに分類される。

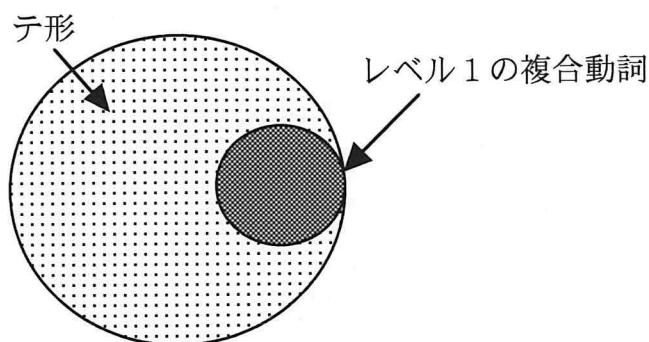
- ① V1（様態）+V2
- ② V1+V2（位置移動）

両方ともV1とV2が時間的に連続している点では同じであるため、きっちりと線引きできるものではない。これら意味解釈における「傾向」と言うべきである。つまり、V1→V2というように動詞が連続しているとき、V1とV2がどのような関係であると解釈されるのかという問題である。これは、テ形が「順次動作」「並立動作」「手段・方法」「原因・理由」など、いくつかの解釈上の意味関係を持つのと同じこ

とである。また、これら「レベル1」の複合動詞は、時間的に連続している点から、テ形と近い意味をもつため、テ形で言い換えることができる。ただし、統語的な動詞連続の形式であるテ形接続と異なり、複合動詞になる場合はかなり意味的な制限がかかってくる。なぜなら、複合動詞になるということは、「新語」を作る操作であるため、複合動詞となればメンタルレキシコンに登録される。しかし、なんでもメンタルレキシコンに登録してしまうと、メンタルレキシコンの語彙は膨大な量になってしまふ上に、意味を検索するのも大変になる。つまり、特別な価値や動機がないと複合動詞にならないのである。

よって、テ形でいえるものがすべて複合動詞になるわけではないが、基本的に「レベル1」のものはテ形で言い換えられる複合動詞であるとしておく。

<図3> テ形とレベル1の複合動詞の位置関係



3.1 ①V1（様態）+V2

先にも述べたように、V1とV2が時間的に連続している複合動詞は、テ形で言い換えられるものが多い。ただ、テ形は単に連続して起こったことを述べているだけであるが、複合動詞はそれが一語化しているため、単に連続しているのではなく、V1とV2は離れがたく融合している。その事を「切り倒す」と「切って倒す」で確認してみよう。

- (09) ワシントンが桜を切り倒した。

- (10) ワシントンが桜を切って倒した。

例 09 と例 10 ではこの二つの意味はほとんど同じである。しかし、同じように時間的に連続した動作であっても V1 と V2 が同時的ではない「切る」 + 「運ぶ」や「切る」 + 「売る」はテ形接続で述べることができても複合動詞にすることはできない。

- (11) *ワシントンが桜を切り運んだ。
- (12) ワシントンが桜を切って運んだ。
- (13) *ワシントンが桜を切り売った。
- (14) ワシントンが桜を切って売った。

このように、テ形接続と異なり、複合動詞は V1 と V2 が時間的にも場所的にも、特別な関係で結びついている。それに対して、テ形接続は時間さえ連続していれば、異なる動作主の動作でも述べることができる。

- (15) ワシントンが桜を切って、父親が倒した。

また、このタイプの複合動詞は動作主の一致で結びついており、2つの動作が同じ動作主であることを強く要求する。いわゆる、2つのイベントが結びつく「イベントの合成」であれば、「対象への働きかけ→結果」という流れで結合されても不思議はない。事実、中国語「打死」や英語「strike him dead」では、対象の一致によって、イベントの合成が行われている。しかし、日本語では「殴り殺す」は言えても、「*殴り死ぬ」は言うことができないことから、動作主の一致がより強く働いている。

- (16) 太郎が次郎を殴る。太郎が次郎を殺す。 (=殴り殺す)
- (17) 太郎が次郎を殴る。次郎が死ぬ。 (=*殴り死ぬ)
- (18) ワシントンが桜を切る。ワシントンが桜を倒す。 (=切り倒す)
- (19) ワシントンが桜を切る。桜が倒れる。 (=*切り倒れる)

このように、論理的には「*切り倒れる」という形式があってもおかしくないのだが、日本語では動作主のあるものに関しては V1 と V2 の動作主の一致が守られ、「切り倒す」しか言うことが出来ない。日本語の「殴り殺す」は先行研究では「原因

と結果」として述べられることが多かったが、中国語の「打」と「死」の関係や、英語の「strike」と「dead」の関係、つまり「殴ることによって死ぬ」とは異なっている。「対象への働きかけ→結果」というリンクで構成されている中国語や英語は、「原因と結果」として解釈されるべきものであるが、日本語の「殴り殺す」は「殴るという手段で殺す」という「様態と動作」として解釈されるべきものである。「切り倒す」も同様に、「切るという手段で倒す」ということを述べており、V1 はV2 の行われる様態を指定しているのである。

物理的に二つの動作が行われるとき、真に同時であることは「並立関係」以外ありえない。よって、物理的にはV1の方が時間的に先行する。従来言られてきた「原因と結果」という解釈は、V1 がV2 の先に起こるという、時間的ズレがあるように感じられるために出てくる、一種の語用論的意味である。基本的にV1 はV2 の様態を表しているため、これらは時間的に不可分の関係になり、多少時間的に前後があったとしても、解釈上の問題である。つまり、「切り倒す」は「ワシントンが桜を切ることと連動して、「ワシントンが桜を倒す」ということが起こらなくてはならないのである。

これらの複合動詞は、V1 とV2 が動作主の一致で結びつけられており、同一の動作主をとることができない場合は、同一対象の一致で結びつけられる。この中で最も強い結びつきは、動作主と対象の両方が一致する場合である。よって、「他動詞+他動詞」が一番典型的な例となる。これは影山（1993）で述べられる「他動性調和の原則」とも合致している。

「他動性調和の原則」（影山 1993：103）

一般に、他動詞は他動詞ないし非能格自動詞と結合し、他動詞が非対格自動詞と複合することはない。

このようにV1（様態）+V2 というパターンを持つ複合動詞は、影山（1993）で述べられるところの語彙的複合動詞と重なるところが多い。「切る」を様態にとるものをあげてみると次のようになる。

(20) 「切り～」

切り落とす, 切り倒す, 切り崩す, 切り裂く, 切り殺す, 切りそろえる, 切り出す,
切り取る, 切り抜く, 切り放す,

これらのV1 とV2 の結合は決まっているものが多いが, ここに挙げられたもの以外の例を絶対的に許さないわけではない。これらは, 制限はありながらも「様態+動作」という意味をコンテクスで保証されれば, 言えるようになるものもある。これらは必ずしも閉じられたクラス (closed class) の語ではなく, 寧ろ, 開かれたクラス (open class) の語である。

そのことを「切る」 + 「入れる」を例にとって考えてみよう。普通, これら2つの動作は「切った後, 入れる」ことが多いので, 「切るという様態で入れる」または「切りながら入れる」ということは想定しにくい。よって, 「??切り入れる」という例はかなり不安定な例である。しかし, V1「切る」がV2の様態であることをコンテクストで保証されれば, 単独では不安定だった「切り入れる」の適格性があがる。

- (21) 大きな冬瓜にざっくりとナイフを切り入れた。
- (22) カッターでたくさんの線を切り入れると, だいぶ鳥の羽らしくなった。

このようにテ形と言い換えられるものは, テ形の意味のバリエーションと対応しており, 「並列」「手段・方法」「原因・理由」と様々なラベルを貼ることができるが, 本研究では, これらを二つの動作が並んだときの解釈のバリエーションと考える。

3.2 ② V1+V2 (移動)

V1 とV2 が時間的に連続しているもう1つのパターンとして, V1が「移動様態」を表し, V2が「移動」を表すものがある。「押し上げる」は「押すという様態で, 上に上げる」と解釈すれば, ①V1 (様態) + V2とほとんど変わらないが, 空間的移動を表す動詞は文法化を起こしやすいため, 独特の振る舞いをするようになる。「~あげる」だけではなく, 後項V2に位置移動を含意するものが来ると, 意味変化を引き起こす場合が多い。その一例として, 空間的移動が時間的移動に変換され, アスペクトの用法を持つ現象がある。

<空間的移動> → <時間的移動>

押し上げる → 書き上げる

ふりかける → 死にかける

飛び出す → 泣き出す

時間的移動に変化し、アスペクトの用法を持つようになったものは、「しあげる/やりあげる」「しかける/やりかける」「しだす/やりだす」のように「する/やる」テストに合格し、「レベル1」から「レベル2」になっていることがわかる。つまり、これらはテ形になった時は移動を表す「レベル1」になり、アスペクトを表す時は「レベル2」の意味になる。

複合動詞はその潜在的な傾向として、V1とV2のどちらかを文法化しようとする傾向がある。空間的移動を表すものは時間的移動に転移しやすいことは従来より指摘されているが、このように後項V2に位置移動動詞が来たものも高い確率で文法化を受け、意味の変化を引き起こすようになる。これらは「レベル1」と「レベル2」の境界線上にある用法であるが、テ形で言い換えられる「移動」を表す用法は「レベル1」に、アスペクトを表す用法は「レベル2」に入れることにする。

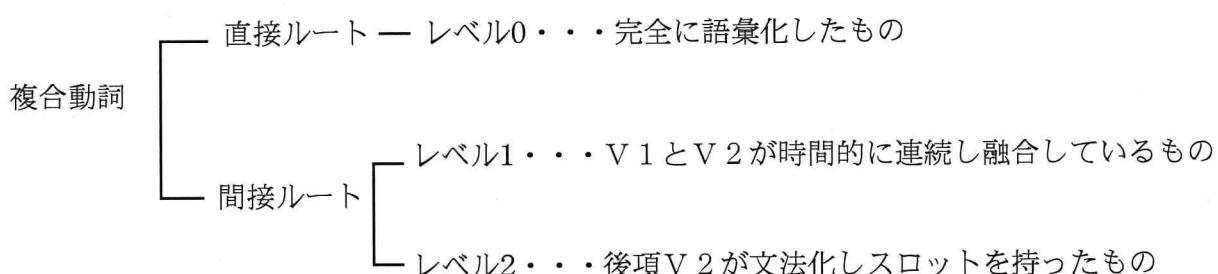
最後にレベル1の複合動詞についてまとめておく。

「レベル1」の意味

「レベル1」はV1とV2が時間的に連続して行われる複合動詞。これらはスロットを構成しているわけではないが、V1とV2は融合しており、分離不可能なものとして1語を形成している。

まとめとして、冒頭にあげた<図2>をもう一度あげておく。

<図2>



4. 複合動詞のレベル移動

複合動詞は「レベル0」「レベル1」「レベル2」の3つのレベルに分けられたが、これらは、決して形態で分けられるものではなく、意味のレベルである。つまり、従来の研究のように「～かえす」が「レベル1」になる、といったような形態による分類ではない。

もちろん、「レベル0」だけの用法しかないものや、反対に「レベル2」だけの用法しかないものなど、あの1つのレベルだけでおさまる形式も存在する。しかし、多くの複合動詞は多義であり、いくつかの意味をもっていることが多い。これは、複合動詞の1つの性質である。

複合動詞は「S + S」という「語 (W)」未満の形態を2つ結合させて「新語」を創造する操作であり、「新語」はその形態(ユニット)全体でメンタルレキシコンに登録されるが、それと同時に、それは「S」と「S」という形態に分解され、個々の形態でも登録される。つまり、複合動詞は「語」として作られるという「語彙性」と、それが2つの形態に分解できるという「規則性」を両方兼ね備えているのである。

例えば「開き直る」という語を、一番、最初に使った人が「ふてぶてしい状態に態度を変える」という意味で使ったとしよう。これらは、「開く」+「直る」とは解釈できないことからも、その形態(ユニット)全体がメンタルレキシコンに登録されている「レベル0」の意味である。ところが、一度、「開き直る」が使われると、これらは「開き+直る」という分解した形態でもメンタルレキシコンに登録される。その時、「～なおる」に「今までと違った方向に態度、精神的状態を変える」という意味で仮登録したとしよう。すると、「～なおる」は「立ち直る」など、良く似た意味で使われる可能性が出てくる。もちろん、「開き直る」「立ち直る」は他に例もなく、V1とV2の結合は非生産的であるため「レベル0」の意味であるが、これらが何回も使われているうちに、新たな例が増えていく可能性はある。新たな例が増えた結果、これらが生産性を持ち、仮登録だったものが本登録になる。本登録されると、その形態はスロットを持つようになり、レベルが上がることになる。

複合動詞は増えていくばかりではない。逆に、使われなくなって消えていく可能性もある。大辞林には「生ひ直る」という語があり、「成長して性格などが改まり以前よりよくなる」という意味が載っている。しかし、例としてあげられているのは源氏

物語からの引用である上、この言葉を聞いてすぐに意味が分かる人は、おそらく多くないだろう。また、このように、レベル0は「語」であるがゆえに、使われなくなり忘れ去られていくものも多くある。

このように複合動詞は増減を繰り返しているもので、いくつあると数えられる物ではない。

複合動詞の増減の中で、時には本動詞が消えてしまっても複合動詞の中に残る語もある。「いきり立つ」の前項V1「熱る（いきる）」は古語では「熱くなる」という意味で存在したが、現在では使われない例である。しかし、「いきり立つ」は複合動詞としては「怒りを抑えきれず興奮する」という意味で、現在でもごく普通に使われている。「いきり立つ」は前項V1が古語の例であるが、後項V2が古語の形態を残している例として、「立ちはだかる」がある。後項V2「開る（はだかる）」は古語では「ひろがる。手足をひろげてかまえる」という意味であったが、現在では使われない動詞である。しかし、「開る（はだかる）」は「立ちはだかる」という複合動詞の中に生き残っている。このように本動詞としての用法が消えてしまっても、複合動詞の中に残る場合もある。これらの複合動詞は、本来は合成的なものであったかもしれないが、完全に本動詞としての用法が消えてしまうと合成的なものとしては捉えることができず、分析不可能なものとして解釈され「レベル0」の意味として解釈されるようになる。

それでは、複合動詞のレベル移動について見ていくことにする。まず、「直接ルート」と「間接ルート」の間に見られるレベル移動を、「いきり立つ」の後項V2「～たつ」を例に考えてみよう。本動詞「立つ」が多義語であるため、その多義性を反映して、それが後項V2になった時も様々な意味になる。大辞林で「立つ」を引くと、見出しになっている大きな意味だけでも25例もある。それを見ると、「縦に体をおこす」という「動作」を表すだけではなく、「席を立つ」のような「移動」や、「泡が立つ」「神経が立つ」のような「状態」を表すこともできることが分かる。

このような「立つ」が後項V2になった「～たつ」は「興奮した（激しい）状態になる」という意味で、「煮え立つ、沸き立つ、奮い立つ、猛り立つ、浮き立つ、逸り立つ」などいくつかの語と結合する。これらは、微弱ながらも生産性を持っているが、「*煮えて立つ」ということができない。また、「煮える」+「立つ」という2つの動詞の意味の和から、「十分に煮える、煮えてわき上がる」という意味を導くことは

難しい。複合動詞は例え1回的なものであっても、1度使われると「S+S」という形態に分解され、再利用の機会を待つようになる。こうやって、少しずつ生産性を持っていったものは「レベル0」であっても、いくつかの例とともに意味のネットワークを形成する。しかし、生産性があるといつても、これらのV1とV2の結合は予測することができない上、強い結合制限があるため「レベル0」の意味である。「～たつ」も興奮した（激しい）状態を表すからといって「*怒り立つ」「*喜び立つ」「*泣き立つ」「*急ぎ立つ」「*（水が）あふれ立つ」などは、言うことができない。

その中でも、面白いのは「イライラする」の一部を使った「苛立つ」のような語があることである。複合動詞の中には「ぶうたれる」「ぐらつく」「ひた走る」「ばたつかせる」「ぶら下がる」「しょぼたれる」のように前項V1が明らかに動詞ではないものが時々交じっている。これらは形態的には動詞ではないが、V2の副詞的に様態を表すという点で共通している。逆に、様態解釈のものしかこのパターンになることはできない。これらについては、5章でもう一度触れることにする。

また、「立つ」時の様態を前項V1に取ると、「～たつ」は「降り立つ」「並び立つ」など「レベル1」の意味にもなる。これらは結合制限があるが、「立つ」時の様態と解釈されれば成立するので、「壁にもたれ立つ（=もたれて立つ）」「壁に寄りかかり立つ（=寄りかかって立つ）」など、コンテキストがあれば可能になるだろう。このように「～たつ」は「レベル0」と「レベル1」の両方の用法を持っている。このように、多義性をもった語が、その意味の違いを反映して異なるレベルで住み分けをしている場合もある。

「～たつ」は意味によって、レベルと意味が対応したきれいな住み分けをしているが、全てのケースがこのようになるわけではない。中にはレベルと意味が入り交じっているものもある。また、ある動詞が前項V1になるのか、後項V2になるのかは、必ずしも決まっているわけではない。

例えば前項V1が「切る」を取った複合動詞は、「切り落とす、切り倒す、切り崩す、切り裂く、切り殺す、切りそろえる、切り取る、切り出す、切り抜く、切り放す」のように、「様態+動作」に解釈されることが多いため、ほとんどが「レベル1」の意味になることが多い。しかし、同じように前項V1が「切る」を取った複合動詞でも「切り抜ける」は「切って抜ける」という「様態+動作」の意味を持ちにくく、「困難な状況下から力をつくしてのがれる」という「レベル0」の慣用化された意味しか

持たない。また、「切りつめる」のように「レベル0」と「レベル1」の両方の意味を持っているものもある。「切りつめる」は「切って短くする」という「レベル1」の意味も持っているが、「節約する」という「レベル0」の意味も持っている。このように意味とレベルが明確に分けられないものもある。

◆ 「切り落とす」

「レベル1」の意味・・・切って落とす

◆ 「切り抜ける」

「レベル0」の意味・・・困難な状況下から力をつくしてのがれる

◆ 「切りつめる」

「レベル0」の意味・・・節約する

「レベル1」の意味・・・切って短くする

一方、「切る」が後項V2になった時、3つのレベルの用法をもっている。「貸し切る」は「乗り物や場所を一定時間、特定の人・団体だけに貸す」という意味で「レベル0」の用法である。また、V1が「切る」時の様態として、解釈されれば「噛み切る(=噛んで切る)」「引き切る(=引いて切る)」「ねじり切る(=ねじって切る)」のように「レベル1」の用法になる。また、「～きる」がアスペクトの意味になった「書き切る」「歌い切る」は「レベル2」の用法である。この他にも2つのレベルであいまいなものもある。

◆ 「押し切る」

「レベル0」の意味・・・困難を排して目的を果たす

「レベル1」の意味・・・押して切る

◆ 「打ち切る」

「レベル0」の意味・・・物事を途中でやめる

「レベル1」の意味・・・打って切る

◆ 「言い切る」

「レベル0」の意味・・・断言する

「レベル2」の意味・・・言い終える

このように複合動詞はいくつものレベルの意味を持っていることも珍しくない。しかしながら、複数のレベル、例えば「レベル0」と「レベル1」の両方の意味を持っている複合動詞において、どちらの意味が先にできたかを知ることは難しい。一般的には分析的な「レベル1」の語が先に存在し、それが慣用的に使われるうちに「レベル0」の意味を持つようになったものもあると思われるが、必ずしもそればかりではないだろう。慣用的な「レベル0」の方が先に存在し、それが分析的な「レベル1」の意味を持つようになることもあるだろう。

このように、複合動詞の意味のレベルは絶対的なものではなく、複数の意味レベルにまたがる複合動詞もたくさんある。「レベル0」の意味は「直接ルート」で出され、「レベル1」の意味は「間接ルート」で出されるというという違いはある。これらの違いは語の分類上においては非常に大きな違いであるが、多くの複合動詞はその境界線を簡単に越えてしまうのである。反対に、複合動詞を形態や意味によりどれか1つの意味に固定することの方が、無理があるのである。

しかし、このような現象は複合動詞の宿命ともいえよう。なぜならそれは、複合動詞は「語」であるという「語彙性」と、二形態から構成されるという「規則性」という両方の側面を持っているために起こるのである。複合動詞によっては、「語彙性」を強く持ったものもあるだろうし、また、反対に「規則性」が強いものもあるだろうが、すべての複合動詞は潜在的にこの「語彙性」と「規則性」という、相反する2つの要素の中に秘めているのである。

<直接ルート> レベル0・・語彙

<間接ルート> レベル1・・スロットはないが規則的にV1とV2が結合している
レベル2・・文法化が進んで完全にスロットを持っているもの

それでは、「直接ルート」と「間接ルート」の間のレベル移動を見たので、今度は

「間接ルート」の中でのレベル移動を見てみることにする。「直接ルート」と「間接ルート」間のレベル移動は、予測不可能な偶然的なものであった。それに対して、規則的に作られる「間接ルート」のレベル移動は、ある程度の規則性が見られる。

本研究では「レベル1」と「レベル2」の違いは文法化の度合いの違いであると考える。例として「～だす」で考えてみよう。複合動詞の後項V2「～だす」には、大きく分けて2つの意味がある。1つが「レベル1」の意味である「移動」で、もう1つが「レベル2」の意味である「始動」のアスペクトである。「レベル1」であるすべての語が、必ずしも「レベル2」まで文法化されるわけではないが、「移動」を表す語は特に文法化されやすい傾向がある。また、文法化のレベルは語によって異なる。最も高い文法化を達成したものは、自由に「句」であるVPを取り取ることができる。それに対してVPをとっても主語や対象に対する意味制限をもっているものや、Vしかとれないものもある。

「移動」を表す「～だす」はテ形で言い換えられるものである。

「～だす」

<位置移動>・・・レベル1

けり出す、叩き出す、押し出す、引っ張り出す、搔き出す、抉り出す、つまみ出す、ひねり出す、つかみ出す、追い出す、くみ出す、いびり出す、いぶし出す

<始動>・・・・・レベル2

言い出す、降り出す、泣き出す、笑い出す、怒り出す、書き出す、弾き出す、読み出す、使い出す

「レベル2」は、「レベル1」より文法化した形式であり、「やりだす」と言えることからもわかるように「レベル2」のV2はスロットを形成している。そのため、「～だす」は「始動」の意味が取れる様々な動詞と結合することができ、逆に結合するV1はほとんど限定をうけない。よって、すべての「レベル1」の「～だす」は、「レベル2」の「始動」の意味で解釈することができる。

反対に、「レベル1」の「位置移動」の「～だす」は、V1に来るものが決まっている。前項V1は、「移動」のための「手段」、あるいは、「原因」的なものとして

解釈されることが多い。

「～だす」は他動詞なので、「他動性調和の原則」の予測からすれば、前項V1は「他動詞」あるいは「非能格自動詞」を取ることになるので、理屈上は「走る」「歩く」を移動様態として「歩く+出す」「走る+出す」が言ても良いはずである。しかし、実際、「歩き出す」「走り出す」はアスペクトの用法になってしまい、移動様態としては不適格になってしまふ。移動様態として「歩く」「走る」が前項に来る時は、後項V2は自動詞の「～でる」を使って、「非能格自動詞+非能格自動詞」の「歩き出る」「走り出る」と言わなければならない。このように、「レベル1」の複合動詞であっても、自他対応があるものは役割分担をしている。

また、「～だす」で表される移動は内から外への移動である。そこで、視点を変化させて、移動先に焦点があたると、「(隠れていた、見えない)内側から、何かを出現させる」という意味になる。

<出現>・・・レベル1

探し出す、考へ出す、洗い出す、生み出す、映し出す、醸し出す

これらは物理的な移動から、抽象的な移動になり、かつ視点が変化しているものである。物理的な「位置移動」よりは文法化しているが、これはまだ「レベル1」の意味である。その証拠に、「移動」と同じように、やや不安定ながらもテ形で「探して出す」「考へて出す」のように言い換えることができる。このように、文法化には色々あり、1つの方向だけではない。また、「思い出す」「売り出す」「持ち出す」のように、その形態が慣用化して特別な意味を担うと、「レベル0」として登録される。このような意味の語彙化・慣用化のことを「イディオム化」と呼ぶことにする。

「～だす」は「レベル2」まで文法化したが、「レベル1」と「レベル2」は連続的なものなので、複合動詞の中には「レベル2」まで文法化が進まないものもある。それを「レベル1」の複合動詞「～とる」で検証してみる。

「～とる」

<位置移動>・・・・・レベル1

切り取る、はぎ取る、剥き取る、搔き取る、えぐり取る、そぎ取る、削り取る、つか

み取る, 選び取る, 盗み取る, むしり取る,

<抽象的な移動>・・・レベル1

勝ち取る, 攻め取る, 戦い取る, せびり取る, 書き取る

写し取る, 聞き取る, 見取る, 吸い取る, 読み取る

「～とる」は具体的な移動から抽象的な移動へと文法化しているが、「する/やる」テストにかけてみたときに「*やりとる」「*しとる」と言えないことから、「～とる」はスロットを持っていないと判断される。このことからも「レベル1」の中で文法化がおさまっていることがわかる。その証拠に、これらの複合動詞はすべてテ形で言い換えることができる。「～とる」は抽象的な移動の中でも、「勝利を勝ち取る」「絵を写し取る」のように、主語の経験や知覚など、主語の内側領域（インナースペース）への移動を表す傾向がある。

また、同じ「～とる」の中でも「レベル0」の意味になるものもある。「見取る」は「看取る」という別漢字を当てられることもあるように、「病人の世話をする」というイディオム化した意味をもっている。

このように、ある複合動詞は文法化を受けて意味が変化し、文法化するにつれて「句」を取れるようになる。また、「イディオム化」すると特定のV1と結びつきいて、そのユニット全体で慣用的な意味を表すようになる。

このように、複合動詞の「規則性」を促進するものとして「文法化」を設定し、反対に、複合動詞の「語彙性」を促進するものとして「イディオム化」を設定しておくことにする。それでは、「文法化」と「イディオム化」にどのようなものがあるのかを見していくことにする。

5. 複合動詞の文法化

これまで、一般的な意味で漠然と文法化（Grammaticalization）という言葉を何度も使ってきたが、ここで文法化について詳しく述べることにする。まず、文法化的定義について先行研究で言われていることをまとめてみることにする。

秋元 (2002 : 4)

文法化は一般的に言って、開かれた語彙項目が閉じられたクラスの文法的要素に変化する過程を言う。その際、統語上の独立性や語彙的意味の消失、さらには音声的摩擦なども通常伴う。

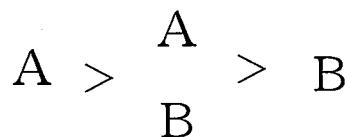
Hopper and Traugott (1993 : 7)

content item > grammatical word > clitic > inflectional affix

また、Hopper and Traugott (1993) では文法化について「語彙項目（内容を表す語）が文法（機能を表す語）になる過程（1993 : 4）」と述べ、「AはABという中間段階を経ずにBにはならない」として次のようなモデルを述べた。

<図4>

Hopper and Traugott (1993 : 36)



様々な先行研究が述べているように、文法化とは1つの変化の過程である。Hopper and Traugott (1993) のモデルに複合動詞を当てはめてみると、「レベル1」が「A」であり、「レベル2」が「B」ということができるだろう。前節の「4.複合動詞のレベル移動」でも確認したように、「レベル1」→「レベル2」は段階的な変化であり、きれいに線引きできるようなものではない。

文法化の要因として、Trouwtt(1988)は次の2つを挙げている。そして、文法化の初めの段階では「語用論的推論」が、後の方では「漂白化」が関与しているとしているが、これらの両方が働く場合もある。

- ① 語用論的推論 (Pragmatic inference)
- ② 漂白化 (Bleaching)

①の語用論的推論 (Pragmatic inference) と②の漂白化 (Bleaching) について、秋元 (2002) を参考に以下のように定義しておく。

① 語用論的推論 (Pragmatic inference)

会話の含意が、ある文脈中、何回も表れることによって、習慣化、あるいは意味化するようになる、その過程で多義が生じ、やがて一方の意味が優勢になる。

② 漂白化 (Bleaching)

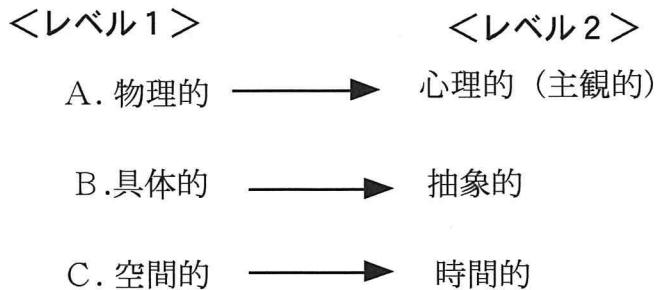
意味の弱化または消失を言う。これらは、意味の一般化 (semantic generalization) または、意味の縮小 (semantic reduction) とも言われる。これらの意味は弱化し変化するが、完全に消失してしまうわけではなく、ある程度保持されている。

文法化する「要因」として語用論的推論と漂白化をあげたが、この他にも文法構造の変化には、様々条件や特徴が多くの研究者によって提案されている。文法化とは様々な文法現象の中で起こるものであるが、一定の方向性があるとされている。一般的に、文法化が進むにつれて意味は拡大され、多義になるとされている。文法機能としては、一般化されてより広い文脈で使われるようになるに従って、主語の選択制限が消えていくとされている。また、文法化されることにより主観化が増大し、命題に対する話者の主観的態度を表すようになると言われている。

5.1 語用論的推論 (Pragmatic inference)

先に語用論的推論 (Pragmatic inference) を「会話の含意が、ある文脈中、何回も表れることによって、習慣化、あるいは意味化するようになる、その過程で多義が生じ、やがて一方の意味が優勢になる」と定義したが、この多義への変化には一定の法則がある。複合動詞が語用論的推論 (Pragmatic inference) を受けてどのように変化するかについて、Hopper and Traugott (1993), 秋元 (2002), 日野 (2001) を参考に、次のようなモデルを設定する。

<図5>



語用論的推論 (Pragmatic inference) が働く方向として、「A.物理的なものから心理的なものへの変化」「B.具体的なものから抽象的なものへの変化」「C.空間的なものから時間的なものへの変化」という3つの方向性を仮定する。矢印の左側が「レベル1」の意味であり、矢印の右側が「レベル2」の意味に対応している。

これらの変化は文法化の進む方向性であり、段階性のあるものだと考える。よって、複合動詞それぞれによって、文法化の度合いが異なる。これらは意味的な変化であるが、これらを統語構造上の変化としてみると、矢印の左側は本動詞の意味を残しており、[V] V2という構造を取る。しかし、文法化が進むにつれて、次第に [VP] V2のように補文を取れるようになり、動詞の選択制限や、主語の選択制限がなくなっていく。これらの方向性は独立したものではなく連動しているものであり、2つ以上のものが連動して働く場合もある。

今まで、何度か例に出してきたが、ここでもう一度「～あげる」を取り上げてみる。「～あげる」には次のような用法があった。

<位置移動>

具体的な移動・・・押しあげる、蹴りあげる、担ぎあげる、取りあげる、持ちあげる
抽象的な移動・・・見あげる、追いあげる、搔きあげる、

<動作の完了>

書きあげる、編みあげる、塗りあげる、作りあげる、洗いあげる、歌いあげる、買ひあげる、数え上げる

まず、「～あげる」における「B.具体的なものから抽象的なものへの変化」を見てみよう。これらは元々「押し上げる」という具体的な上方向への移動が、その方向

性だけ抽象化された結果「見上げる」のような抽象的な移動を表すようになったと考えられる。

次に、「～あげる」における「C.空間的なものから時間的なものへの変化」を見てみよう。これらは「書き上げる」「編み上げる」のようにアスペクトとして「完了」という意味をもっている。「上へあげる」という空間的な移動がここで時間的なものへ変化していることがわかる。

最後に「～あげる」における「A.物理的なものから心理的なものへの変化」を見てみよう。影山（1993）、日野（2001）でも言われているように、「～あげる」は単なる「完了」ではなく、かなり評価的な意味が入っていることが以前より指摘されている。ちなみに影山（1993）では、「～あげる」は補文をとる語彙的複合動詞として考えられている。

影山（1993:110）

補文関係を取る「上げる」にも本来の上方向（花火を打ち上げる）という意味的概念が比喩的に残っている。上方向ということは「良い」というメタファーにつながる（cf.Lakoff and Johnson 1980）から、「歌い上げる、育て上げる、勤め上げる、鍛え上げる、磨き上げる」等に見られるように、対象物を慈しみ、それを良くするという含蓄が得られる。しかし、あらゆる場合に「上向きは良いことだ”Good is up”（Lakoff and Johnson 1980:22）」というわけにはいかない。このメタファーは他動詞には成立するが、自動詞には無縁である（禿げ上がる、震え上がる、抜け上がる。）その点で、「し上げる、刷り上げる」が好意的意味合いを持つのは、他動詞からの逆形成として説明できる。そして、他動詞「上げる」の場合だけ好意的含意が生じるのは、他動詞の表す動作主の情熱的な努力を前提としていることに突き詰められるものと考えられる。

このように、「～あげる」の意味には単なる空間から時間の変化だけではなく、「完全に」「立派に」「きれいに」という「良い」という心理的、主観的評価が入る。このように「空間」的なものは単なる位置関係を示すだけではなく、「上」や「前」を表すものはプラス評価、「下」「後」を表すものはマイナス評価を受けやすい。例え

ば「見上げる」は単に「上方を見る」だけではなく、「見上げた心がけ」のように「感心する」というプラス評価を持っている。それに対して「見下げる」は「軽んじる、蔑視する」のように、マイナス評価をともなっている。

それでは、「～あげる」がプラス評価を持っていることを、「～あげる」に「きれいに」と「きたなく」という副詞を使ったテストで確認する。

(23) 「～あげる」

きれいに書きあげる	*きたなく書きあげる
きれいに編みあげる	*きたなく編みあげる
きれいに洗いあげる	*きたなく洗いあげる
きれいに歌いあげる	*きたなく歌いあげる

このテストにかけてみると、「きれいに書きあげる」とは言えるが「*きたなく書きあげる」とは言えないことがわかる。このように、「空間」を表すものはプラスやマイナスなどの意味的評価に変化することが多い。このような主観的評価は、複合動詞が単なる動的イベントを表しているのではなく、かなり話者の主観が入った副詞的な表現性を含んでいることを示唆している。2章の1.5節では「そうする」は動詞だけを置き換えられないことを確認したが、三原（2003）ではこれが複合動詞になると「そうする」の座りが良くなることが指摘されている

(24) 太郎が博論を1ヶ月で書いた。

??それもすごいが、次郎は著書を3ヶ月でそうした。

(25) 太郎は博論を1ヶ月で書き上げた。

それもすごいが、次郎は著書を3ヶ月でそうした。

これは複合動詞が単なる「動詞」ではなく、かなり副詞的な表現を含んだ語、つまり、語以上(W+)の表現性を持っていることを示唆している。もちろん、すべての複合動詞が同じレベルで主観的な副詞的表現を持っているわけではない。「レベル1」の複合動詞は文法化の度合いが低いので、「切り倒す」のような語でそのような副詞的な意味を伴う物は少ない。ただ、複合動詞の文法化が進むにつれて主觀性が増

だし、副詞的な効果が強くなる傾向がある。

「～あげる」は影山（1993）では語彙的複合動詞とされたものであるが、影山（1993）で統語的複合動詞とされ、「完了」を表すものとして「～くる」「～ぬく」がある。これらはVPを取れるため、かなり文法化されたものであるが、このようなものでも心理的な評価性を含んでいる。逆に、文法化が進んだために、心理的な表現ができるようになってしまったと言つてもいいだろう。例えば、「～くる」は「完全に、すっかり」という副詞的意味を含んでいることから、「少し」という副詞とは共起することはできない。同じ完了を表すものでも「～おわる」は任意に限界点を設定できるため、「少し読み終わった」「少し使い終わった」とのように「少し」と共起することができる。

(26) 「～くる」

すっかり困り切った	*少し困り切った
すっかり疲れ切った	*少し疲れ切った
厚い本をすっかり読み切った	*厚い本を少し読み切った
有り金をすっかり使い切った	*有り金を少し使い切った

「～くる」は単なるアスペクトではなく「すっかり～になった」という状態を表すこともできるため、「困る」「疲れる」のように非限界動詞にも付くことができる。一方で、「～おわる」は「*困り終わる」「*疲れ終わる」のように非限界動詞には付くことができない。

また、別の完了を表す後項V2である「～ぬく」は「困難を克服して」という大変さや、「十分に」という時間や量や質の深さを意味的に含んでいる。そのため「ちょっと」という副詞とは共起しにくい。

(27) 「～ぬく」

十分に苦しみ抜く	*ちょっと苦しみ抜く
十分に知り抜く	*ちょっと知り抜く
十分に走り抜く	*ちょっと走り抜く
十分に生き抜く	*ちょっと生き抜く

「～きる」「～ぬく」は、「そうする」テストにも合格することから、「～おわる」と同じようにVPを取ることがわかる。

(28)

- ① 太郎が色を全部塗つたので、次郎もそうし終わった。
- ② 太郎が有り金を全部使つたので、次郎もそうし切つた。
- ③ 太郎がフルマラソンを走つたので、次郎もそうし抜いた。

影山(1993:78)ではVPを補文として取る複合動詞は「ちょうど句が自由に作られるように、語彙的制限を受けずに形成される」とされている。そこで、副詞との共起テストであげた前項V1と「～きる」「～ぬく」「～おわる」を結合させてみると次のようになる。「*」は完全に非文になるもので、「?」はコンテクストがないと不安定であるが、コンテクストがあれば可能になる可能性がある例である。

<表1>「～きる」「～ぬく」「～おわる」の前項V1との共起制限

	① ～きる	② ～ぬく	③ ～おわる
困る	困りきる	困りぬく	*困りおわる
疲れる	疲れきる	*疲れぬく	*疲れおわる
読む	読みきる	?読みぬく	読みおわる
使う	使いきる	?使いぬく	使いおわる
苦しむ	*苦しみきる	苦しみぬく	?苦しみおわる
知る	?知りきる	知りぬく	?知りおわる
走る	走りきる	走りぬく	走りおわる
生きる	?生ききる	生きぬく	*生きおわる

これを見ると分かるように、前項V1動詞の限界性、非限界性と対応した振る舞いをみせているのは「～おわる」だけである。「今日の新聞を読む」という限界的な出来事に「～きる」「～ぬく」「～おわる」をつけてみよう。限界動詞と完了というアスペクトは、予測としては最も相性が良い組み合わせであるが、単なる「新聞を読む」についてAの場合、「～おわる」以外はやや不安定な例になる。

- (29) A. ?今日の新聞を読み切った
 B. トルストイの「アンナ・カレーニナ」を読み切った
- (30) A. ?今日の新聞を読み抜いた
 B. トルストイ全集を読んで読んで、読み抜いた
- (31) A. 今日の新聞を読み終わった

Bのようにコンテキストを設定すると、「読み切る」や「読み抜く」でも自然で安定した読みになる。つまり、「～きる」「～ぬく」は単なる完了ではなく、「すっかり」とか「十分に」などの副詞的効果も入った完了なのである。

この「～おわる」より、「～きる」や「～ぬく」に主観性や評価性が高いことは、<図5>の文法化のモデルによって説明ができる。「～きる」や「～ぬく」は元々、「噛み切る（=噛んで切る）」「引き抜く（=引いて抜く）」のように、具体的な動作を表す語である。それらが文法化されるにしたがって、アスペクト表現へと変化した。「～きる」は限界点を設定する性質により、具体的な意味から抽象的の意味へ変化し、結果的に時間的表現へ意味が拡張された。同様に「～ぬく」も対象の位置移動を含意する性質により、時間的表現へと意味が拡張された。つまり、文法化の「B.具体的なものから抽象的なものへの変化」「C.空間的なものから時間的なものへの変化」を表している。このように、文法化を受けたものは、「A.物理的なものから心理的なものへの変化」も伴うことが多いため、副詞的な効果を持つようになる。

一方、「～おわる」は元々抽象的な動きを表すため、「～きる」「～ぬく」のような文法化を受けていない。よって、「A.物理的なものから心理的なものへの変化」を持っていないのである。そのため、主観的表現性が少ない、正味「完了」あるいは「終了」を表すのである。

このように、語用論的推論 (Pragmatic inference) が働く方向として、「A.物理的なものから心理的なものへの変化」「B.具体的なものから抽象的なものへの変化」「C.空間的なものから時間的、質的なものへの変化」という3つの方向性を仮定した。これらはバラバラに働くものではなく、文法化の一つの方向として連動していることが多い。そのため、様々な形式が、色々な表現効果を伴って文法化された結果、色々な意味の「完了」や「始動」が共存することになる。

「始動」の表現として「～はじめる」「～かける」「～だす」の3つがあることが

知られているが、中でも「～かける」は「ふりかける」のような具体的な運動から、「話しかける」のような抽象化された空間的な方向性、そして「死にかける」のような時間的な表現まで幅広く拡張された用法を持っている。つまり、「～かける」は「B.具体的なものから抽象的なものへの変化」と「C.空間的なものから時間的、質的なものへの変化」という2つの文法化を受けている。

また、「～だす」も「C.空間的なものから時間的なものへの変化」という文法化を受けている。このようなものと比べて、「～おわる」と同じように本来抽象的な動きを表す「～はじめる」は、前項V1との結合制限が動詞のアスペクト特性から予測しやすいことが想定される。

このように語用論的推論 (Pragmatic inference) を要因とする文法化にはいくつかの方向性がある。これらは、意味の拡張の途中で多義を生み、新たな表現性を獲得していく。その一方で、これらは単なる抽象化ではなく、同時に主觀性を増大させ、副詞的な表現性を強く持つようになる。そのため、空間的なものが時間的にものに変化した場合も、時間表現を得るという選択制限の拡大と同時に、副詞的な共起制限を持つようになる。

このような文法化の作用は、新しい時間的表現が生まれる可能性を示している。「移動」を表すものは文法化されやすいことから、ここでは「切り倒す」「押し倒す」のような後項V2「～たおす」を例として考えてみよう。これらは「飲む」について「飲み倒す」を大辞林で引くと「酒を飲んで代金を払わないままにする。飲み潰すに同じ」となっている。ところが、実際に「飲み倒す」の用例を集めてみると次のような例が存在する。

(32)

大阪市住之江区の男性（27=会社員）は「投手力も打力もダイエーの方が上だが、それでも勝つのが今年の阪神やろ！ 脇上げなしの星野監督勇退なんて有り得ない」と、納得がいかない様子。京都府亀岡市の男性（22=フリーター）も「優勝したら明日の夜まで飲み倒すつもりだったのに…」と悔しさをにじませていた。

大阪日刊スポーツ

<http://www.nikkansports.com/osaka/otr/p-otr-031028-29.html>

(33)

去る2003年11月23日(土), 郡山市駅前『Bar Aika(アイカ)』にて, 当店恒例行事
『ボージョレ・ヌーヴォの樽を飲み倒す会』を開催致しました。

(<http://www2u.biglobe.ne.jp/~est61/ivent.html>)

(34)

まるでこだわりのないお茶三昧日記。

お抹茶から, 玉露, 煎茶, 缶チャまで
あらゆるお茶を飲み倒す…。

(<http://torimino.cool.ne.jp/shibu.html>)

これらは, かなり口語的・方言的であり, もしかしたら許容しにくい話者もいるかも知れないが, この「飲み倒す」を見て, 意味が全く分からぬという話者は少ないだろう。これらの用法に共通するのは「～たおす」が完了的に使われていることである。しかし, 完了的な「～たおす」の意味は広辞苑にも大辞林にも載っていないことから, また, 正式なものとは認められていない。これらは空間的表現が時間的に表現に拡張されつつある, 文法化の過程を現在進行形で垣間見ることができる面白い例である。

「読み倒す」でも調べてみると次のようないい例が見つかった。「～たおす」が安定した例になるにしたがって, 「やりたおす」などが言えるようになり, スロットを持った文法的な例として安定していく。そして, 「見たおす」「食べたおす」「使いたおす」など, 様々な動詞と結びつくようになると思われる。

(35)

いい本は読んで読んで読み倒す

繰り返し読める本がいい本だ。昔, とある本に書いてあった。

いい本は, 何度も読み返してうちに血となり肉となり, いつのまにか一段高いレベルの知識が身に付いている。

(<http://www.mitsuki.org/cgi-bin/browse.cgi?dir=howto&name=read>)

(36)

オンライン・マガジンを読み倒す

仲俣 晓生 (2002) HONCO 双書 (H004)

(本のタイトル)

辞書に載るかどうかは偶然の産物でもあるので、必ずとはいえないが、いつの日か「～たおす」の完了的用法が辞書に載る日が来てもおかしくない。

このように、同じ文法化をうけて時間表現を獲得しても、それらの表現性は同一ではない。それゆえ、同じ「開始」や「終了」を表す表現にいくつもの形式が共存することが可能なのである。

5.2 漂白化 (Bleaching) ~ 「追いかける」「追っかける」に見られる接辞化の条件~

漂白化 (Bleaching) の定義をもう一度まとめると、次のようになる。語用論的推論 (Pragmatic inference) と漂白化 (Bleaching) はお互いに関係があるので、1つの文法化の現象に語用論的推論 (Pragmatic inference) と漂白化 (Bleaching) の両方が働くこともある。

漂白化 (Bleaching)

意味の弱化または消失を言う。これらは、意味の一般化 (semantic generalization) または、意味の縮小 (semantic reduction) とも言われる。これらの意味は弱化し変化するが、完全に消失してしまうわけではなく、ある程度保持されている。

これまで、文法化の現象として主に後項V2を中心に見てきたが、必ずしも文法化的現象は後項V2だけに起こるものではない。前項V1が漂白化 (Bleaching) によって意味を失い接辞化する過程を、「追いかける」が「追っかける」のように前項V1が促音便化する場合から見てみることにする。

影山 (1993) では、このような語彙的複合動詞の中のあるものは前項V1が音便化したり、本来の動的形態を失い接辞化する傾向があることを指摘している。影山 (1993) の中では、V1が音便化する複合動詞の例として以下のようなものをあげ

ている。

影山 (1993 : 102)

- (52) a. 追いかける→追っかける, 引き担ぐ→引っ担ぐ, 取り組む→取っ組む
 吹き掛ける→吹っ掛ける, ぶち飛ばす→ぶつ飛ばす, 突き放す→突っ放す

また, 前項部分V1が接辞化しているものとして「搔き-」「差し-」「取り-」をあげており, これらの例は強調などの意味合いをV2に添えているとしている。影山(1993)で前項V1が音便化するものとして挙げられている例は、「追っかける(追いかける)」のように音便形と非音便形の両方をもつものであるが, 実際には「ぶつたまげる」「おっぱじめる」「つつ走る」のように非音便形をもたないものも多くある。ここではこのように非音便形を持っておらず, 非音便形に復元できない音便形「おっ」などを一種の接辞と考え, どのような時に音便化するのかという音韻的・形態的条件と, それらがどのような意味を持っているのかを考える。また, これらは漂白化(Bleaching)を受けて意味が消滅していく現象と考え, これらの複合動詞の前項V1がどのような段階を経て, 接辞化していくのかということも併せて考えてみることにする。

前項V1が接辞化する複合動詞については斎藤(1992)が詳細な研究を行っている。斎藤(1992)では前項をA, 後項をBとして従来の一般的な考え方として<モデル1>をあげた。

斎藤 (1992 : 201)

$$\begin{array}{ll}
 <\text{モデル1}> & A + B \rightarrow AB \rightarrow (\text{音便化}) \rightarrow A'B \\
 & A \rightarrow \text{追う} \\
 & B \rightarrow \text{かける} \\
 & AB \rightarrow \text{追いかける} \\
 & A'B \rightarrow \text{追っかける}
 \end{array}$$

斎藤も指摘しているが, 従来のモデルの問題点は以下の2つの点にまとめられる。

1. 非音便形には必ず音便形の存在がなければならないため、次のような例が上手く説明できない。

例・・・突っ走る (*突き走る), 取つかまえる (*取りつかまえる)

2. 元となっている非音便形が音便形と言い換えができないものがいくつかある。

つまり、音便形が非音便形と形態的にも意味的にも対応していないものが存在するのである。これについて斎藤（1992）では次のように述べている。

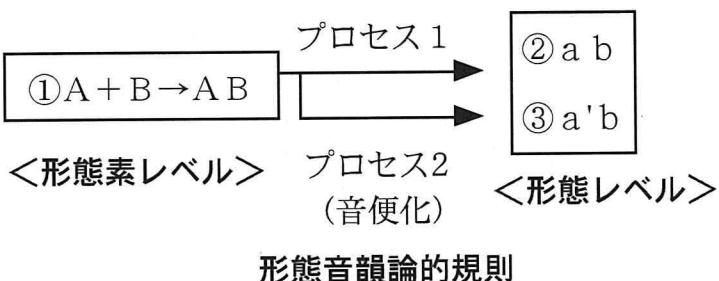
斎藤（1992：202）

ここで、「引っかける」は、それぞれ、「衣服（上着）を無造作にはおる」「相手を上手くだます」といった意味で使われているが、「引っかける」の非音便形「引きかける」にはこういう意味はない。

そして、斎藤（1992）では、先行研究の矛盾を解決するためのモデルとして、<モデル2>を設定した。

斎藤（1992：204）

<モデル2>



このモデルの特徴は、抽象レベルである<形態素レベル>と、実際に形として現れる<形態レベル>という、2つのレベルに分けたことである。そして、音便形しかもたないものは、プロセス1のみ機能しており、非音便形しかもたないものはプロセス2のみ機能しているという2つのプロセスを仮定した。そして、音便形、非音便形の意味はすべて抽象的レベル①A Bに存在しているとした。

このモデルの問題点は以下の2つの点にまとめられる。

1. 音便化と非音便化の両方の形態を持ち、ほとんど意味が変わらない「追いかける（追っかける）」のような複合動詞は、同時にプロセス1とプロセス2の両方を持つことになってしまう。
2. 「ぶったまげる」「おっぱじめる」「つっぱしる」のように形態的にも意味的にも復元できないものにも、「ぶちたまげる」「おしあじめる」「つきはしる」という意味を持った抽象的な①A Bを設定しなければならない。

このように、従来の先行研究では「追いかける→追っかける」のように、非音便形と音便形が、形態的にも意味的にも対応している場合はうまくいくが、「おっぱじめる→*おいはじめる」「おったまげる→*おいたまげる」のように、V1とV2に分析できないものは上手く説明することができない。

そこで、本研究は、「おっ」「つっ」「ぶっ」のような促音便形が、何度も使われているうちに、前項V1に意味の漂白化(bleaching)が起こり、意味の弱化が起こったと考える。漂白化(bleaching)がおこると、動詞「追う」は本来の意味や統語的特徴を失い、「おっ」という促音便形で独立した接辞として働くようになる。

これらは元々「引きつかむ（=引いてつかむ）」「押しつける（=押してつける）」のように、前項V1と後項V2の間には規則性があつて結びついていたものが、音韻的条件により「ひつつかむ」「おっつける」になったと考える。そのうち、漂白化(bleaching)がおこると「ひっ」「おっ」に「引く」「押す」という意味がなくなり、「強調」「勢い」という一般化した意味に変化する。そして、「ひっ」「おっ」の形式で接辞化したものは一種の強調を表す副詞のようになり、新たな生産性を獲得した「ひっ」「おっ」は予測を越えた動詞と結びつくようになる。つまり、これらは元々「レベル1」や「レベル2」であった複合動詞が漂白化(bleaching)により、その意味を失い規則性を失ってしまったため一語化し、「レベル0」になる現象である。これらが一語化しているのは、意味的な部分だけではなく、形態的にも前項V1が促音便化していることがわかる。

前項V1が促音便化するものとしては「ませつかえす」「やりっぱなす」のように、

3モーラ以上のものも存在するが、このような例は「ませつ」「やりつ」で生産性をもつことはあまりなく1回限りの例が多い。よって、今回は特に2モーラの語に絞つて考察する。

まず、前項が音便化する規則を探すために、音便化するものを<リスト1>として網羅的にならべた。音便には促音便形「ぶっとばす」と、撥音便形「ぶんぬぐる」があるが、撥音便は数が少ないので、今回は促音便のみを考察の対象にする。促音便の横に付けた（）内の言い換えは、形態的に非音便形が存在するかどうかの確認で、意味的な差異は問題にしていない。

<リスト1> 促音便になる語彙的複合動詞

① 「突く」

つかえす (つきかえす), つきころばす (つっころばす), つったてる (つきたてる)
 つっぱしる (*つきはしる), つっこむ (*つきこむ), つっくる (*つききる), つ
 っぷす (*つきふす), つかかる (*つきかかる), つぱる (*つきはる), つ
 たつ (*つきたつ), つぱねる (*つきはねる)

② 「引く」

ひっかける (ひきかける), ひっつける (ひきつける), ひったてる (ひきたてる),
 ひつつかむ (ひきつかむ), ひっこむ (ひきこむ), ひつつかまえる (*ひきつかま
 る), ひとつらえる (*ひきとらえる), ひっぱる (*ひきはる), ひっこす (*ひき
 こす), ひっぱたく (*ひきはたく), ひっかつぐ (*ひきかつぐ), ひっこめる (ひ
 きこめる), ひっさげる (ひきさげる)

③ 「吹く」

ふっとぶ (ふきとぶ), ふっとばす (ふきとばす), ふっかける (ふきかける)

④ 「搔く」

かっこむ (かきこむ), かっさばく (*かきさばく), かっとばす (*かきとばす),
 かっさらう (*かきさらう)

⑤ 「ぶつ」

ぶっころす (ぶちころす), ぶっとばす (ぶちとばす), ぶっこむ (ぶちこむ) ぶっぱ
 なす (*ぶちはなす), ぶったまげる (*ぶちたまげる)

⑥ 「取る」

とっぱらう（とりはらう）、とつかえる（とりかえる）、とつかまえる（*とりつかまえる）

⑦「追う・押す」

おっかける（おいかける）、おっぱらう（おいはらう）、おっつける（おしつける）おったまげる（*おいたまげる）、おっぱじめる（*おいはじめる），

V1が促音便化するためには、前項V1の終わりの音と後項V2の頭の音に音韻的な条件が課せられる。促音便化は基本的に無声子音の連續で起こるので、V1の語幹の終わりと、V2の語頭のどちらかに母音があると、促音便化が起こることができない。よって、V1は必然的に五段動詞に限定される。それでは、リスト1からV1が促音便化する条件をまとめてみると以下のようになる。

<V1が促音便化する条件>

- ①V1の語幹がk, t, s, (w) u, rで終わる。
- ②V2の語頭が無声子音 (k, t, s, h) で始まる。

窪園（1998）で促音になる条件として、無声閉鎖音と無声破擦音が重なったとき促音便化が起きやすいとされている。

窪園（1998: 117）……<>は筆者による注

この/Q/<促音>は、無声閉鎖音（voiceless stop）の/p,t,k/と無声破擦音（voiceless fricative）の/s/の前に表れ、例えば、/iQpoN/（ippon（一本）），/kiQsa/（kissa（喫茶））のように重子音（geminate）を生むものである。

これをみると、「k, t, s」は複合動詞の促音便化のルールと重なっているが、複合動詞の促音便化には、一般的な促音便化にはない有声音の「u, r」が加わっている。そこで思い出すのが、動詞がテ形になった時「取る→取って」のように促音便になる現象である。複合動詞もテ形も動詞の連續という点では共通点があり、「引っつかむ（=引いてつかむ）」「押つける（=押してつける）」「取つかまえる（=

取って捕まえる)」テ形で言い換えられるものが存在することからも、テ形のルールが適用されることは不思議なことではない。

<テ形の促音便になるルール>

- ・語幹が [t, u, r] で終わる五段動詞は「取る→取って」のように促音便になる。
- ・[k] で終わるものは「書く→書いて」のようにイ音便になり、促音便にならない。

促音は無声子音の前しか表れないので、V2は無声子音であればよい。そのため、色々な語が表れる可能性がある。それに対してV1は無声子音である [k, t, s] に有声音 [u, r] が加わった [k, t, s, u, r] のいずれかで終わらなくてはならない。この中でも特に語幹が [k] で終わるものが種類も数も多い。無声子音である [k, t, s] が促音を作るのは当然として、これに加えて、テ形で促音便を作る有声音 [u, r] が加わっている。このように、V1が促音便化する複合動詞は、促音を作るルールとテ形が促音便を作るルールを足して二で割ったような性質を持っているのである。

この音韻的条件が本当に正しいか確認するために、V1の語幹が有声音 [u, r] で終わり、V2の語頭が無声子音で始まる例で確認してみる。

<V1が促音便化する条件を満たしているもの>

- (37) 「酔う」 /you/ → 酔っぱらう
 (38) 「蹴る」 /keru/ → 蹊つ飛ばす

ただ、注意しなければならないのは、これらの条件はあくまで「傾向」であって、すべての2モーラで語幹が [k, t, s, u, r] になるものが音便化するわけではない。まず、音韻条件が揃わなくては促音便化が起きないが、どんなものが促音便化するのかということには意味的条件も深く関わってくるからである。

また、もう1つの注意点として、音便化したものがすべて接辞化するわけではないことが挙げられる。「酔う(酔っぱらう)」「蹴る(蹴つ飛ばす)」などは確かに、前項V1が促音便化するが、それはその語における一回限りの音便化であって、これらの前項V1が「よっ」「けっ」という形式で接辞化しているわけではない。よって、

前項V1が音便化しているものでも、「けっとばす」のような一回限りのと、「ぶつころす」「ぶったまげる」のように生産性をもっているものと大きく分けて2つのタイプがあるとする。

- ① 促音便化の条件により音便化しただけのもの
- ② 接辞化して独自の意味をもつようになったもの

ここで複合動詞の前項V1が音便化し、かつ、それが接辞としての独自の意味を持つようになることを「前項V1の接辞化」と呼ぶ。この現象を漂白化(bleaching)により、複合動詞が合成的な意味を失ったために語彙化したものとして次のように定義することにする。すなわち、元々「間接ルート」から出される「レベル1」や「レベル2」だった複合動詞でも、完全に語彙化したものは「直接ルート」から意味のアクセスを行うようになり「レベル0」の意味になる。

<複合動詞前項V1の接辞化>

前項動詞V1の語彙的・統語的内容が消滅し、V2に対する接辞として働くようになる現象。その接辞は新たな生産性を持ち、元の意味からの予測を越えたV2と結合する。

語彙化を、Lipka(1990)は語形成の立場から次のように定義している

Lipka(1990:97)

複合的語彙項目が、頻繁に使われている内に、その統語的性格を失い、特定の内容を持った形式的な単位になる傾向を言う。

それでは、二種類の促音便化した複合動詞の特徴についてみていくことにする。

- ① 音便化の条件により音便化しただけのもの

同じ文法化現象の要因である語用論的推論(Pragmatic inference)にもいくつか

の段階があったように、漂白化（bleaching）にもいくつかの段階がある。

まず、もっとも初期の段階として「追いかける（追っかける）」「突き返す（突っ返す）」のように、音便形と非音便形がほとんど同じ意味をもっているものが挙げられる。これらは単に音便化条件によって音便化しているだけで、音便形と非音便形に違いはない。これらの中には「蹴り飛ばす（蹴つ飛ばす）」のように、促音便化の条件によって音便化した一回限りのものも多く含まれている。

しかし、音便形が何度も使われ、使用頻度が高くなるにしたがって、音便形は積極的に別の意味を持つようになる。「追い払う」と「追っ払う」は「太郎が犬を追い払う（追っ払う）」のように物理的に遠くにやる場合は言い換えが出来るが、「頭の中から悪い考えを追い払う（*追っ払う）」のように「悪い考え」のような抽象的なものに対しては言い換えることができない。こうして、音便形と非音便形が意味の住み分けを行うようになり、音便形が独自の意味を持つことによって、音便化したもののが語として定着していく。このように音便形が語として定着する過程で、「引っ越す」「引っ張る」のように古典語では存在した非音便形「引き越す」「引き張る」が消滅して音便形だけが残ってしまう場合もある。

② 接辞化して独自の意味をもつようになったもの

このように「ひっ」という音便の形式が何回も複合動詞前項V1として現れると、それが意味的・統語的性格を失ってゆき、次第に「引き」という動詞が使われるべき動機が消失していく。そうすると、「引く」は「ひっ」という勢いよく動作が行われたことを現す接辞になり、「引く」とは関係ない「ひっさげる」「ひっぱたく」のようなV2と共に起するようになる。このようにして合成された「ひく+下げる（ひっさげる）」や「ひく+はたく（ひっぱたく）」の意味をV1とV2の意味の合成から予測することは非常に困難である。本研究では前項V1が音便化し、接辞化する過程には次のような3つの段階があると仮定する。

<モデル3>

第一段階 促音便化の条件により前項V1が音便化する

①V1の語幹がk, t, s, u, rで終わる。

②V2の語頭が無声子音で始まる。

第二段階 音便化したものが数多く現れると、音便化したV1に意味の漂白が行われ、語彙的・統語的内容が薄くなっていく。

第三段階 接辞化したものが定着すると新たなV2と結合する

第一段階は「間接ルート」で出される意味として解釈できるが、意味の漂白化(bleaching)が進み第三段階に進むにつれて、語彙化し、元々は「間接ルート」から出されたはずの語が「直接ルート」の語として解釈されるようになる。

先にあげた<リスト1>では、「突きー(つっ)」「引きー(ひっ)」「吹きー(ふっ)」「搔きー(かっ)」「ぶちー(ぶっ)」「取りー(とっ)」「追いー(おっ)」などを平面的に並べていたが、これらは第二段階のものと第三段階のものが混在している。これらを区別するために、語彙的意味の残っている第二段階のものを漢字で書き、語彙的意味の残っていない第三段階のものをひらがなで書くことにする。第二段階と第三段階はクリアに分かれるものではないが、他動性調和の原則を破っていたり、V1とV2の間に「様態」または「原因」などの意味的関係が解釈できないものは第三段階であると考える。

<第二段階のもの>「吹っー」「取っー」

<第三段階のもの>「つっー」「ひっー」「かっー」「ぶっー」「おっー」

<モデル3>で示したように接辞化には3つの段階を仮定しているが、音便化したものがすべて接辞化すると考えているわけではない。先にも述べた「蹴っ飛ばす(蹴り飛ばす)」のような一回性の音便や、「追う」のように接辞化した用法を持っている物であっても「追っかける(追いかける)」のように音便形と非音便形に意味の違ひがないものは第一段階と考え、接辞化の過程にあるものや接辞になっているものは区別することにする。

それでは第二段階までの接辞化をしていると思われる「吹っ」と、段三段階までの接辞化をしている「ひっ」を例にとって、接辞化の過程を見ていくこととする。

<第二段階>

① 音便形と非音便形の意味が一部重なっているもの

「吹き飛ばす」「吹っ飛ばす」

- (39) 台風14号のせいで、屋根の瓦が吹き飛んだ。 (?吹っ飛んだ)
- (40) 次郎に殴られて太郎が吹っ飛んだ。 (?吹き飛んだ)
- (41) この丘に登ると、嫌な気持ちが吹き飛ぶ。 (=吹っ飛ぶ)

同じ「～飛ぶ」でも「吹き飛ぶ」は風のせいで飛ぶことを表し、「吹っ飛ぶ」は風以外の原因で勢いよく飛ぶことを表すところに違いがある。しかし、目に見えない「気持ち」の場合「吹き飛ぶ」も「吹っ飛ぶ」のどちらでも言え、この二つの用法は重なっている。

③ 音便形と非音便形の意味が相補分布

「引き立てる」「引っ立てる」／「吹きかける」「吹っかける」

- (42) 赤いマフラーが彼女の色の白さを引き立てた。 (*引っ立てる)
- (43) 警察はその事件の容疑者を引っ立てた。 (*引き立てる)
- (44) かじかんだ手に息を吹きかけた。 (*吹っかける)
- (45) ヤクザは社長に法外な金額を吹っかけた。 (*吹きかける)

これらの例は音便形と非音便形が完全に住み分けを行っている例である。意味の住み分けを起こしたことから、音便形の語彙化が進み、V1の動詞本来の意味が薄くなっている。②より語彙化が進んだ例と言えるだろう。

<第三段階>

完全に接辞化した第三段階のものは音便形のみが存在し、非音便形が存在しないため、音便形と非音便形の意味を比べることはできない。これらは本来の動詞の意味から離れ、接辞として独自の働きをしているため、思いもよらないV2と結合するようになる。

ひとつらえる、ひっさげる、ひっぱたく、ひつかつぐ

第三段階として「つっ走る (*突き走る)」「ぶったまげる (*ぶちたまげる)」のように意味的にも形式的にも、非音便形に還元することが不可能なものを設定する。これらは、「このままつっ走れ！ (=走れ)」「ミサイルの破壊力にぶったまげた (=たまげた)」のように前項V1を落として言いやすい傾向がある。

これらは完全に接辞化しており、接辞化したものは後項V2に対する副詞として働いている。このように接辞化したものは、統語的にも他動性調和の原則を破るようになる。

- (46) つっかかる→つく（他動詞）+かかる（非対格自動詞）
- (47) ひっかかる→ひき（他動詞）+かかる（非対格自動詞）

接辞化したV1は漂白化 (bleaching) により本来の意味が薄くなるため、副詞的に「強調」や「勢い」があることを表すようになる。そのため、「かっとばす」「つっぷす」のようにどのようなV2と結びつくのか予測がつかなくなる。第三段階の用法まで持っている「おっ」という形式は、第一段階である「追っかける」「押っつける」では、前項V1が「追う」と「押す」のどちらなのかはっきりしているが、完全に接辞化した「おったまげる」「おっぱじめる」「おっ死ぬ」になると、その前項が「追う」か「押す」のどちらであるかはっきりしない。また、そのどちらかであることを問うことは、もはや意味がないことである。

これまで、第三段階の音便形「つっ-」「ひっ-」「かっ-」「ぶっ-」「おっ-」は動詞本来の統語的・意味的特徴を失い、V2の意味を強めたり勢いを表したりすることを見てきた。これらは形式的には動詞を取っているが、意味的には一種の様態副詞のような働きをする。

様態副詞との共通点として、オノマトペの中にも口っという形式で、同じように勢いを表す働きをするものが存在することがあげられる。

- (48) 花子はつと立ち上がった。
- (49) 太陽がかと照りつけた。
- (50) 太郎がぶと吹き出した。

これらの一一致は偶然ではない。促音が持つ意味について田守（2002）では次のように述べられている。

田守（2002：135）

促音は「スピード感」「瞬時性」「急な終わり方」といった象徴的な意味を持っていると言えるだろう。促音がこのような象徴的な意味を持つことは「さっ」「ぱっ」「はっ」「かっ」のような1モーラに促音を伴ったオノマトペが同様の意味をもっていることからもわかる。

促音便化するということは、音韻的な要因で引き起こされるものであるのと同時に、複合動詞前項V1が文法化により、新たな意味を獲得するために引き起こしたものであるといえる。よって、音韻的条件が整わなければ促音便化することはできないが、意味的に「スピード感」や「瞬間性」を必要としないものは促音便化しないことが予測される。

<促音便化するもの>

- (51) (のどを) かききる→かき (kak) +(k)きる→かっきる
- (52) とりつく→とり (tor) +(t)つく→とっつく

<促音便化しないもの>

- (53) (悲しみに) かきくれる→かき(kak)+(k)くれる
- (54) とりつくろう→とり (tor) +(t)つくろう

促音便化するものと促音便化しないものに分かれる要因にスピード感が関わっていることを証明する例として「かきこむ」を考えてみよう。「かきこむ」は「(文字を)書き込む」「(ご飯を)書き込む」という漢字が異なる2つの同音異義語を持っている。これらは、音声的には全く同じものも関わらず「* (文字を) かっこむ」とすることはできず、促音便化を引き起こすのは「勢いよくご飯を口にかきいれる」という意味をもった「(ご飯を) かっこむ」だけである。これらのことから、促音便化の要

因に意味的な要因が深く関わっていることがわかる。

6. 複合動詞のイディオム化（語彙化）

これまで、複合動詞の文法化（Grammaticalization）は、Hopper and Traugott (1993), 秋元 (2002) を初めとしていくつもの先行研究があるが、イディオム化、あるいは語彙化については詳しく述べているものは寡聞にして知らない。「二重アクセスモデル」で見てきたように、複合動詞は「直接ルート」から出される語彙性と、「間接ルート」から出される規則性を持ち、「語彙性」と「規則性」のインタフェースとしての機能を持っている。

また、複合動詞に限らず、複合語にするということは必然的に意味の特殊化を伴うものであり、このことは窪園 (1995) でも指摘されている。窪園は複合名詞を分析する目的で複合語の特徴を述べているが、名詞と動詞の違いはあれ、並行的に議論ができる指摘である。

窪園 (1995 : 53)

複合語は特定のものの属性を述べるというよりも、主要部が指示するものの意味的な下位範疇（サブタイプ）を意味する場合が多く、さらには意味が特殊化する場合も珍しくない。たとえば「青写真」は普段の「写真」の意味範疇に入らず、また「青」という属性を持っているわけでもない。「赤電話」「赤鉛筆」やblack board（黒板）はいずれも電話・鉛筆や板の種類を限定しているものであり、外見が必ずしも赤色や黒色である必要はない。「目薬」の場合もしかりで、「目の薬」とは違い、点眼薬に限定されてしまう。

このように、複合語の大半は構成要素の意味を結合しただけのものではなく、少なからず意味の特殊化を伴っている。

このように、複合語にするということ自体に意味の特殊化、つまり、イディオム化を伴うものなのである。本研究ではイディオム化を語彙化とみなし、以下のように定義する。

<イディオム化の定義>

- ① 意味的不透明性、あるいは非合成性 (non-compositionality) : イディオム化された意味はその成分の総和から出てこない。
- ② 形態的緊密性 : イディオム化された複合動詞は完全に 1 語であるので、統語上は完全な「語」としてふるまう。よって、「そうする」テストや前項V1を受動化することはできない。
- ③ 語彙的完全無欠性 : イディオム化された複合動詞は前項V1と後項V2が特別（ユニーク）な関係で結びついている。よって、類義語であっても別の言葉で置き換えることはできない。

イディオムの意味的不透明性には段階があり、透明度の高いものから低いものまでグラデーションにあるものとして並べることができ、いくつかのレベルに分類される。よって、イディオム化されたものの中でも意味が分かりやすいものから、分析不可能なのまで様々である。

たとえとして「切り出す」という複合動詞を考えてみよう。「切り出す」は、「石を切って運び出す」と解釈すれば、前項V1が手段を、後項V2が移動を表す「レベル1」の複合動詞である。この後項V2「～だす」が、文法化により空間から時間へと変化すると、「石を切り始める」というアスペクトの用法になり「レベル2」の複合動詞になる。この意味のように後項（あるいは前項）が、抽象化することによって、語彙的なものから統語的な機能語に変化することが「文法化」である。

文法化が複合動詞を分解し、それを再利用しようとする生産性を増大させる操作であるのに対して、イディオム化は複合動詞が全体でまとまろうとする操作である。

「切り出す」がイディオム化すると、具体的な物を切るのではなくて、「話や相談事を言い出す」という意味になる。これは「切り出す」という前項V1と後項V2の組み合わせだけが持っている特別な意味で、前項V1「切る」を「ちぎる」にした「ちぎり出す」や、後項V2「だす」を「かける」にした「切りかける」は、イディオムとして成立しない。このようにイディオム化した語は別の語で置き換えることはでき

ない。

このような現象を見ていると生産性を増大させる「文法化」と生産性を減少させる「イディオム化」は相対するような現象に見えるかもしれないが、イディオム化は文法化の一部である。イディオム化が進む要因として「頻度」がある。あるV1とV2の組み合わせが何度も使われているうちにその結びつきが強くなり、そのうちに意味の上でもますます抽象化してイディオム的意味が固定していく。Ramat and Hopper (1998: 121-122) では文法化と語彙化は対立するものではなく、補完的、重複的であると述べ、文法化の最後の段階では語彙化がおこるとしている。

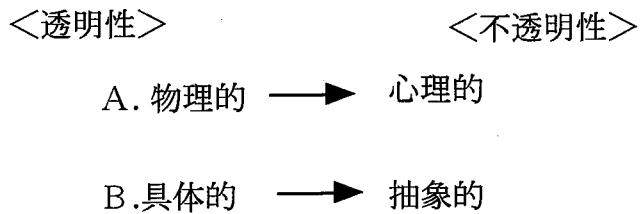
例として、接辞が語彙素になった例として、ラテン語の比較級-ior-について「年長の人」を表す語が、イタリア語 signore やフランス語 seigneur では、「立派な人」という意味変化を起こした例や、複合語が時がたつにつれて不透明になる例をあげている。

日本語の例を考えてみよう。例えば「見上げる」は「上方を見る」という物理的な意味と、「見上げた人物」のような「感心する」という心理的な意味を持つ。「上げる」の反意語を使った「見下げる」は「蔑視する」という心理的意味のみの反意語であり、「下方を見る」といった意味はない。

また、「巻き込む」は、「巻いて中に入れる」という具体的な意味と、「仲間に引き入れる、まきぞえにする」という抽象的な意味を持つ。

イディオム化が進む方向をまとめると、次のようになる。

<図6>



これを見ると、文法化とイディオム化は、統語的なものになるのか、語彙的なものになるのかという違いはあるにもかかわらず、現象自身は非常に近い物であることがわかる。文法化は複合動詞の一部が抽象化されて文法的機能を担い、イディオム化は複合動詞の全体が抽象化されるという違いはあれども、この2つの変化は同じ方向性

をもっている。つまり、言語というものの進む方向性、志向性という点では同じ土俵にあるものなのである。

文法化とイディオム化が補完的、重複的な現象であることは、前節の前項V1が促音便化する複合動詞について述べた時に、高度に漂白化(bleaching)したものが生産性を持ちながらも、複合動詞全体でイディオム化することからも確認できる。

7. 複合動詞の非対称性

複合動詞においてしばしば問題になるのはその用法の非対称性である。例えば「押し開ける」「引き開ける」は的確な例であるが、後項を「開ける」に対する反意語である「閉める」に置き換えた「??押し閉める」「??引き閉める」は不安定な例である。また、「ゴールに走り込む」は的確な例であるが「*ゴールに歩き込む」は不適格な例になってしまう。このようなものをどのように処理するべきか考えてみる。

複合動詞は文法化なりイディオム化なり何らかの意味の変化を伴うものであるが、この変化には偏りがある。この偏りは Sapir (1949) では偏流(Drift)と呼ばれているものである。

Sapir (1949 : 150)

Language moves down time is current of its own making.

It is a drift.

Sapir (1949) を引用した秋元 (2002) では次のように Sapir (1949) の主張をまとめている。

秋元 (2002 : 29)

さらに、偏流は方向性を持っており、話し手の個人個人の変種-これらが蓄積されてある方向に動くのだが-無意識の選択により言語の偏流は構成されている。

そこで、日本語のおける偏流（Drift）を考えてみよう。オノマトペで歩く時の様態を表しているものとして色々考えられる。

「歩く時のオノマトペ」

ぶらぶら、ちよこちよこ、どたどた、のろのろ、のそのそ、すたすた、せかせか、てくてく、とぼとぼ、よちよち、よたよた、よろよろ、とことこ

「走る時のオノマトペ」

ひたひた、ばたばた、どたばた、がんがん、ずんずん、どんどん、すいすい、ぐんぐん

それに対して、止まる時のオノマトペは「ぴたっと止まる」「すっと止まる」「がくんと止まる」のように、探してみたがそんなに多くない。かりに、「歩く/止まる」「上げる/下げる」「開ける/閉める」のようにペアになる反意語を、プラスの動作とマイナスの動作と名付けることにしよう。オノマトペを見ると、日本語はプラスの動作は様態を取りやすく、マイナスの動作は様態を取りにくいと言う偏流（Drift）があるということができるだろう。

これと同じようなことが「～あける」「～しめる」でも見られる。「～あける」は「押し開ける、ねじ開ける、引き開ける、蹴り開ける、回し開ける」のように「クラス1」の用法がいくつも見られたのに対して、「～しめる」では見つけることができなかった。

「～あげる」「～さげる」でも見てみよう。「～あげる」はかなり文法化の進んだ形式で色々なものに着くことができるが、これがすべて「～さげる」と言い換えられるわけではない。

「～あげる」

＜位置移動＞

具体的な移動・・・押しあげる、蹴りあげる、担ぎあげる、取りあげる、持ちあげる
抽象的な移動・・・見あげる、追いあげる、搔きあげる、

＜動作の完了＞

書きあげる, 編みあげる, 塗りあげる, 作りあげる, 洗いあげる, 歌いあげる, 買いあげる, 数え上げる

「～さげる」の例をさがしてみると、「レベル0」の意味として「払い下げる」「繰り下げる」「(訴えを)取り下げる」「見下げる」「願い下げる」などがあったが、「レベル1」の意味のものでも「～あげる」ほど生産性がない。

<位置移動>・・・レベル1

「押しさげる」「引きさげる」「吊りさげる」

このように、複合動詞には偏流 (Drift) が見られ、プラスの動作とマイナスの動作があった場合、プラスの動作の方が複合動詞を多く持ちやすいという傾向が見られる。

「偏流」(Drift) の他にも、複合動詞の非対称性の大きな要因として「頻度」がある。日常生活で使われる頻度が高ければ高いほど、その語は複合動詞として安定する。例えば、「～殺す」「～生かす」で考えてみよう。偏流 (Drift) の傾向で考えれば、「～殺す」はマイナスの動作で「～生かす」はプラスの動作であるが、「～生かす」という複合動詞はないと言っても過言ではないだろう。それに対して「～殺す」は様々な複合動詞を形成する。

「～殺す」

絞め殺す, 戮り殺す, 斬り殺す, 食い殺す, かみ殺す, 撃ち殺す, 刺し殺す, たたき殺す, ひき殺す,

これは、現実世界において「どのように生かしたか」ということよりも、「どのように殺したか」の方が使われる「頻度」が高いせいだろう。この「頻度」は、現実世界における知覚のされやすさや、起こりやすさ、想像のしやすさなどと関連している。つまり、「殺す」ための様態や手段は色々考えられるが、「生かす」ための様態や手段はそれほどバラエティーに富んでいないことと関連している。

最後に「交番に走り込む/駆け込む/飛び込む」は言えても、「歩き込む」が言え

ないことについて考える。1つの可能性としては「～込む」に「勢いよく入る」という副詞的な効果があるため「歩く」という、スピード感がないものとは馴染まないという可能性である。

もう1つの可能性としては、動機付けの問題である。複合動詞にするということは、普通の動詞でいうより、言語計算上のコストをかけることである。よって、複合動詞にするということは、手持ちの語彙では表しきれない特別な状況がなければならないという、それなりの動機付けが必要である。よって、普通に歩いて交番に入るという状況を、わざわざ「歩き込む」と複合動詞にする必要なく、「交番に行った」「交番に入った」で済ませてしまうという可能性がある。

このように、複合動詞の非対称性には、文法以外の色々な要因が関わっていると考えられる。

第5章

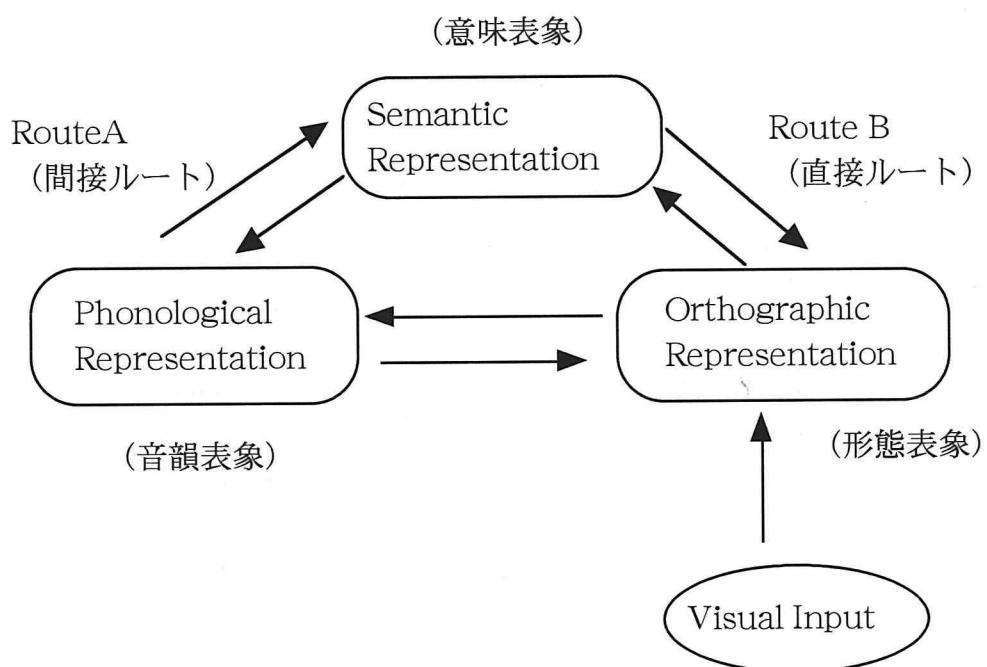
各レベルの複合動詞とそれをめぐる問題

4章では門田（2003）などで提案されている「二重アクセスモデル」によって、メンタルレキシコンにある複合動詞の意味にどのようにアクセスされるかを検証した。

<図1> 二重アクセスモデル

門田編（2003：109）

() は筆者による注



「直接ルート」

文字ユニット全体から、それに相当する語の意味をメンタルレキシコンから検索する

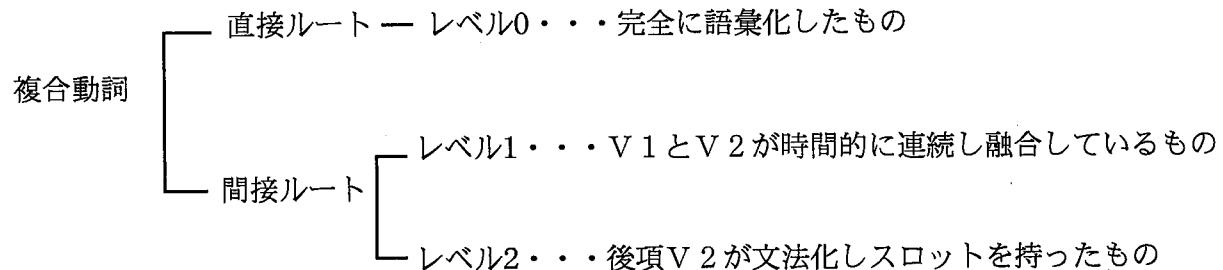
「間接ルート」

文字ユニットを形態的に分解、分析し、その後に意味を検索する

その結果、複合動詞は「レベル0」「レベル1」「レベル2」という3つのレベルに分類されることを確認した。「直接ルート」で出される「レベル0」の意味は完全に語彙化した複合動詞で、文字ユニット全体でメンタルレキシコンに登録されている語である。意味的に

は1語であり、分析不可能な形式である。「間接ルート」で出される意味は、複合動詞を前項V1と後項V2の2つの部分に分析して出される意味である。このような、複合動詞の後項（前項）は文法化され、語から統語的なものへ変化していく可能性を秘めている。そして、文法化の低いものを「レベル1」、文法化の高いものを「レベル2」として、2つのレベルに分類した。「レベル1」はV1とV2が、時間的近接性をもって連続している。よって、テ形での言い換えを確認する「テ形」テストに合格するという特徴がある。また、「レベル2」は後項V2が、完全に複合動詞を形成するためのスロットを持っているために「する／やる」テストに合格するものである。これら「レベル1」と「レベル2」は、明確に分けられるものではなく、文法化の低いものから高いものへという段階的なものである。

<図2>



また、「直接ルート」と「間接ルート」で出される複合動詞も明確に分けられるものではない。「レベル1」や「レベル2」の複合動詞でも、何回も使われているうちにイディオム化して、「レベル0」の意味を持つこともある。

複合動詞は多義になりやすく「見返す」のように「直接ルート」と「間接ルート」の両方から出される意味を持つ語も少なくない。「切り詰める」のように、一つの語が「直接ルート」と「間接ルート」で出される両方の意味を持っている場合、メンタルレキシコンにおける処理コストの点から、一般的に、語彙化している「直接ルート」の意味の方が早く産出される。

留意点としては、この<図2>で示した複合動詞のモデルは、あくまで「意味」のモデルであって、「形態」のモデルではないということである。つまり、このモデルは「～あげる」が常に「レベル2」になるといったような分類ではない。「～あげる」は「書き上げる」と使われた時は「完了」を表す「レベル2」の意味であるが、「巻き上げる」と使われた時は「巻いて上げる」という「レベル1」の意味か、「金品をだまし取る」という「レベル0」

の意味になる。

もちろん、常に「レベル0」にしかならない複合動詞や、常に「レベル2」にしかならない複合動詞もあるが、基本的に複合動詞は多義であり、簡単にレベル移動を起こす。よって、形態だけでその意味を分けることは、不可能なことなのである。しかしながら、どのレベルにどのような性質も持ったものが多いかという傾向はある。また、本研究で述べた複合動詞と影山（1993）で述べられている統語的複合動詞と語彙的複合動詞がどのような位置関係になるのかもはつきりさせる必要がある。

これから、「レベル0」「レベル1」「レベル2」の複合動詞はどのようなタイプのものが多いのかを、影山（1993）の分類と比較対照しながら述べていくことにする。各レベルで例としてあがっている複合動詞は、議論を進める上で便宜上、あげているもので、その他のレベルに絶対ならないというような固定的なものではない。先にも述べたように「巻き上げる」が「ロープを巻いてあげる」の意味として「レベル2」に入れてあったとしても、「～あげる」がいつも「レベル2」の意味になるというわけではないからである。

「直接ルート」で出される「レベル0」の意味は、影山（1993）では、特に触れられていなかつたものである。「間接ルート」で出される「レベル2」は影山（1993）の統語的複合動詞と、「レベル1」は語彙的複合動詞と重なるところが多い。

議論を円滑に進めるため、最も文法化の進んだ「レベル2」を初めに考察し、次に文法化があまり進んでいない「レベル1」、そして、最後にイディオム化している「レベル0」という順で見ていくことにする。

1. 「レベル2」の複合動詞

影山（1993）では、統語的複合動詞は補文を取る物とされていた。つまり、下のような構造を持つ、VPをとるもののみを統語的複合動詞としていたのである。

- ・ 統語的複合動詞の構造・・・[太郎が 自分の経験を 話し] 終える

しかし、2章で影山（1993）の統語的複合動詞と語彙的複合動詞を分ける4つのテストにはそれぞれ問題があることを指摘した。また、同じ統語的複合動詞でもあるテストには合

格するが、あるテストには合格しないものがあった。反対に、語彙的複合動詞であっても、統語的複合動詞を判別するテストに合格するものがあった。すると、何をもって統語的複合動詞とするか、何を持って語彙的複合動詞とするのかというこれらの位置関係が問題になってくる。

影山（1993）では、「そうする」テストは、統語的複合動詞を分類するための代表的なテストとされていたが、それには、次のような問題がある。「～だす」は影山（1993）では「始動」を表す物として、統語的複合動詞に分類されているものである。「～だす」には大きくわけて3つの意味があった。

「～だす」

意味1：物理的移動・・・・押し出す、突き出す

意味2：抽象的移動（出現）・・・・考え出す、作り出す

意味3：始動・・・・走り出す、動き出す、降り出す

「～だす」を「そうする」テストに入れてみると次のようになる。

- (01) 太郎が走り出すのを見て、次郎もそうし出した。
- (02) 太郎が動き出すのを見て、次郎もそうし出した。
- (03) ??太郎がカートを押し出すのを見て、次郎もそうし出した。

例01や例02は、曖昧さがなく意味3「始動」と解釈されるため「そうする」テストに合格するが、あるが、例03は意味1「移動」と意味3「始動」の間で曖昧である。「始動」と解釈するならば「そうする」テストに合格するし、「移動」と解釈するならば合格しない。このように用法で分けられる場合はまだ良いが、同じ「移動」でも、動作主の努力などの文脈的読み込みを表すコンテキストつけると読みが向上する。

- (04) 太郎が100キロのカートを1人で外に押し出すのを見て、
次郎も、悪戦苦闘しながらも、なんとかそうし出した。

このようにどのような前項V1を取り、どのようなコンテキストで使われるかによって、

「そうする」テストはかなり振る舞いが異なる。「そうする」テストはVPを判定するには有効なテストであるが、できることならば、コンテキストがなくても簡単に判別できる、シンプルなテストがあるに越したことはない。

本研究では「レベル2」の複合動詞を、その複合動詞がスロットを持っているかどうかを確認するための「する/やる」テストで分類することにする。このテストは、複合動詞が「スロット」を持っているかを確認するテストである。つまり、複合動詞の前項V1を一般的な動作を表す「する」「やる」を入れて、意味が解釈できるものは、「スロット」という複合動詞を形成する「穴」を持っていると考えるのである。このスロットは動詞の項のようなもので、V1として別の動詞をはめ込むための「穴」である。

注意点としては「する」はV1になった時、「しV2」という形式になり、1モーラになるためやや座りが悪くなる場合があるので、まず「やる」をスロットに入れた形式で確認してみる。ただ、語によっては「する」の方と相性がいいものもある。また、自然発生的な事象をあらわすものは「なる」の方が良いものがあるので、「やる」「する」「なる」のどれかに合格すればいいとしておく。

1.1 影山の統語的複合動詞と重なるもの

複合動詞は「語」なので、スロットは〔 〕V2という構造をもっている。このスロットは文法化の低いものは[V] V2という構造を取り、文法化度合いが高い物は[VP] V2という補文をとると考える。よって、影山(1993)で述べられている、統語的複合動詞はVPを取るため、すべて「する/やる」テストに合格する。

<リスト1>

始動：やりかける、やり出す、やり始める

継続：やりまくる、やり続ける

完了：やり終える、やり終わる、やり尽くす、やりきる、やり通す、やり抜く

未遂：やりそこなう、やり損じる、やりそびれる、やりかねる、やりおくれる、
やり忘れる、やり残す、やり誤る、やりあぐねる

過剰行為：やり過ぎる

再試行：やり直す

習慣：やりつける，やり慣れる，やり飽きる

相互行為：やり合う

可能：やり得る（なり得る）

このことは、典型的な「レベル1」の複合動詞である「押し開ける（=押して開ける）」「もみ消す（=もんで消す）」「踏み荒らす（=踏んで荒らす）」などはスロットを形成しないので、「する/やる」テストに合格しないことからも対照的である。

- (05) 押し開ける（=押して開ける）→*やりあける
- (06) もみ消す（=もんで消す）→*やりけす
- (07) 踏み荒らす（=踏んで荒らす）→*やりあらす

1.2 影山の語彙的複合動詞と重ならないもの

影山（1993）では語彙的複合動詞と統語的複合動詞は、中間的なものない明確に分けられる物とされていたが、本研究では、「レベル1」と「レベル2」は文法化の度合いの差であって、連続的なものと考える。「レベル1」の複合動詞が表すイベントは、具体的で物理的なものが多いが、その中のあるものは文法化の作用を受けて変化すると考える。文法化的傾向として「空間」を表すものはすぐに「時間」を表すものに変化する。これは、複合動詞に限ったことではなく、広く知られていることである。

後項V2が「移動」を表すものは文法化しやすく、2つのレベルにまたがることが多いため、「レベル1」と「レベル2」中間にあると考える。よって、これらの例は「する/やる」テストにも、テ形テストにも合格する。

前項V1が「する」「やる」という一般的な意味をもった動詞を取った場合、前項V1に積極的な意味がないため、もっとも安定した（文法化した）意味で解釈されるようになる。よって、「押し出す」のように「テ形」テストと「する/やる」テストの両方に合格したとしても、テ形テストは「押して出す」という移動を表し、「やり出す」は「アスペクト」を表すというように、同じ「～だす」でも表している意味が異なる。

4章で見た文法化のモデルから「空間的」なものは「時間的」なものへ変化するこので、テ形では「移動」を、「する/やる」形ではアスペクトを表すことが多いが、必ずしもすべ

ての「空間的」なものがアスペクトになるわけではない。「～かえす」が運動のベクトルを表すように、アスペクト以外の抽象的な動きを表すことも可能である。

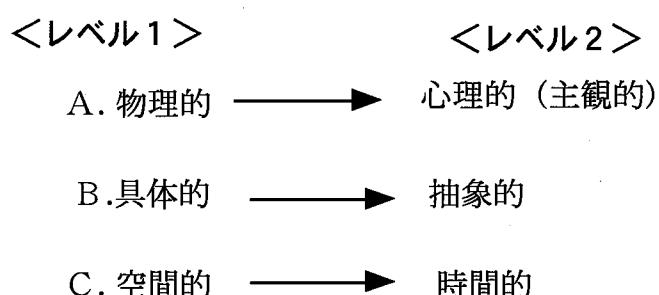
このように、「レベル1」でも文法化が進んでいない、典型的な例は「レベル2」を抽出する「する/やる」テストに合格しないが、文法化しやすい「移動」を表すものは、「する/やる」テストに合格するものも出てくる。このように「レベル1」と「レベル2」は連続したものである。

<表1>

	テ形テスト <レベル1>	する/やるテスト <レベル2>
押し出す	押して出す	やりだす
蹴り上げる	蹴って上げる	やりあげる（しあげる）
ねじり切る	ねじって切る	やりきる
送り返す	送って返す	やりかえす

このように「レベル2」の複合動詞は文法化が進んだ形式が多い。それでは、実際に文法化のモデルが、「レベル2」の意味にどのように反映されているかを見てみることにする。

<図3> 文法化のモデル



「レベル2」には「心理的（主観的）」「抽象的」「時間的」なものが多い。「時間的」なものとは「始動」（～はじめる・～だす・～かける）」「継続（～つづける）」「完了（～おわる・～おえる・～つくす・～きる・～ぬく）などのアスペクト表現のことである。「空間的」なものが「時間的」なものへ変化するのは、文法化の典型例であり、これまでにも何度も議論を重ねてきた。

それでは「抽象的」とはどういうことだろうか。

「具体的」な動作というのは、ある時間上のプロセスのある動作のことを指す。例えば、「昨日、3時間、走った」という文の「走る」は、「走る」という動作が3時間続いたという、時間軸上にある具体的な動作を表している。それに対して、「走るのが好きだ」「ハイヒールで走るといつもころぶ」の「走る」は、「走る」という運動を概念的・抽象的に捉えている。これらは、具体的な時間の上の運動ではなく、時間的なものから解放された抽象的な概念である。これらは、「走る」というイベントを、ひとたまりの「粒」として捉えている。このように、運動を「粒」として捉えると、物事は二元的になる。そのため、運動全体が起こったか起こらなかったか、ということに焦点があたるようになり、「未遂（～そこなう・～そんじる・～そびれる・～わされる）」を表すようになる。また、「粒」として捉えることから運動全体の回数を表す「再試行（～なおす）」や「複数回試行（～まくる）」を表すようになる。このように、具体的な動作を離れれば離れるほど、動詞の「動作性」は薄れ、「状態性」の表現へと傾いていく。「習慣（～なれる）（～あきる）」や「可能（～える）」なども一種の状態性表現である。

最後に「心理的（主観的）」とはどういうことだろうか。4章では「～あげる」には「良い」という心理的な評価が入っているため、「きれいに書き上げる」は的確だが、「*きたなく書き上げる」は不適格になることを確認した。このように、質の善し悪し、量の善し悪しなどのプラス・マイナスの評価、または、意図的か非意図的などの意図性の有無などがこれに入る。よって、「過剰」を表す「～すぎる」は量の多さに対するマイナス評価を含み、「～そこなう」は「非意図的な未遂」を表す。

このように、本研究で「レベル2」としているものは、影山（1993）で統語的複合動詞と言われているものよりもかなり広いものを指している。逆に、影山（1993）で統語的複合動詞と呼ばれているものは、スロットを持つ複合動詞の中でも、VPを取るかなり文法化したものだけを指している。

① 「そうする」テストで判別する構造 [VP] V 2

② 「する/やる」テストで判別する構造 [V] V 2

そのため、影山（1993）で、語彙的複合動詞で補文を取るとされている物の中でも、「する/やる」テストに合格するものが色々ある。

やり漏らす，やり落とす，やり交わす，やり回す，やりこなす，やり逃す，やり果たす

この他にも「書き飛ばす（＝やりとばす）」の「～とばす」や、「付け替える（＝やりかえる）」の「～かえる」などもスロットを形成している。

本研究では、スロットがVをとるかVPを取るのかというのは、V2の意味や文法化の度合いによって決まっていると考える。「～くる」「～ぬぐ」のようなものは、文法化が進んでVPを取るようになったものであるし、「～おわる」は本来、抽象的な動詞であるためVPを取ることができ。また、その一方で「～もらす」「～おとす」「～かわす」などは、Vしかとることができない。このように、VPをとれるかどうかという違いはあるが、本研究ではこれらはすべてスロットを持っていると考え、「レベル2」の複合動詞であると考える。

そして、これら「レベル1」と「レベル2」は、はっきりと線引きされるものではなく、連続的なものであると考える。

2. 「レベル1」の複合動詞

影山（1993）で述べられる統語的複合動詞は「レベル2」と、語彙的複合動詞は「レベル1」と重なるところが大きいが、「レベル2」の複合動詞で見てきたように、分類の基準が異なるため異なる部分も大きい。ただ、複合動詞には語彙的なものと統語的なものがあるというのは本研究と影山（1993）の共通する考え方である。

影山（1993）との各レベルの位置関係をまとめてみると、「レベル2」の複合動詞は後項がスロットを持っていることを基準としているので、VPを取るものを見定している影山（1993）の統語的複合動詞と呼ばれるものよりも広い範囲のものが入っている。

一方、「レベル1」の複合動詞は、テ形で言い換えられるようなV1とV2が時間的近接性によって、結びついているものを想定する。よって、影山が語彙的複合動詞であるが、補文を持っているものとしていたものや、他動性調和の原則を破るとしたものは、これに含まれない。よって、影山（1993）の語彙的複合動詞より狭い範囲のものになる。「狭い」というのは適切ではないかも知れない。逆に、影山（1993）で、「原因」「付帯状況」と

してあげられていた、語彙的複合動詞の典型例だけが「レベル1」になると言った方が適切であろう。

本研究で想定する「レベル1」は他動性調和の原則という項構造上の条件を満たし、かつ、テ形で言い換えられるような時間的近接性を満たすものである。しかし、複合動詞としてまとまるには特別な動機が必要なため、統語的な時間連続であるテ形接続とは異なる強い意味的条件が課せられる。よって、「レベル1」は、V1とV2は分析的にとらえられて合成はされるが、そこには影山（1993）では「語彙的」「慣習的」と言われるような結合制限が見られる。「レベル1」は文法化が進んでいない状態であり、典型的には具体的な運動を表すことが多いが、これらは同時に抽象化された用法を持つことが多い。

<レベル1>

- ① 塀の上に飛び上がる (=飛んで上がる)。 (具体的な用法)
- ② 暗闇から声を掛けられて飛び上がった (=? 飛んで上がる)。 (抽象化された用法)

<レベル2>

- ③ 小説が書き上がった (文法化された用法)

テ形とは時間的に連続した具体的な動作を、統語的に述べる形式のため、抽象化され「文法化」が起こると、すぐにテ形で言いにくく傾向がある。よって、具体的用法で、テ形接続と言い換えが出来たら「レベル1」の複合動詞と認めることにする。

「レベル1」の複合動詞は、単に動詞が時間的に近接して並んでいるだけであるが、「文法化」という観点からまとめると、次の2つに分けられる。

- ① V1 (様態) + V2
- ② V1 + V2 (移動)

「①V1 (様態) + V2」は、「揉み消す」「撃ち殺す」「押し開ける」のようなV1とV2が並んでいることに、「原因」「付帯状況」などのユニークな意味関係が解釈上与えられるタイプである。一方、「②V1 + V2 (移動)」は、「飛び上がる」「蹴り上げる」「聞き返す」「突き出す」「飛び出る」のように、後項V2が「移動」の概念を持つものである。

ここでは、2つに分けているが、「②V1+V2（移動）」は「①V1（様態）+V2」のサブカテゴリーのようなもので、これら2つは明確に分かれるものではない。よって「蹴り倒す」「引き落とす」のようにどちらにも取れるものも多くある。ただ、後項V2が「移動」を表すものは、文法化されやすい傾向があり「レベル1」と「レベル2」の中間的な存在になる。また、「上げる」「出す」のように、よく使われる一般的な動詞の方がより文法化しやすい傾向がある。

影山（1993）で典型的な語彙的複合動詞とされているものと、本研究で「レベル1」としている複合動詞の分布を重ねてみると、次のようになる。下線が重ならない例である。これを見ると多くの例が重なっていることがわかる。

影山（1993：75） 下線と（　）は筆者による

飛び上がる（飛んで上がる）、押し開く（押して開く）、泣き叫ぶ（泣いて叫ぶ）、売り払う（売って払う）、受け継ぐ（受けてつぐ）、解き放つ（解いて放つ）、飛び込む、（隣の人）話しかける、こびり付く、飲み歩く（飲んで歩く）、歩き回る（歩いて回る）、踏み荒らす（踏んで荒らす）、誉め讃える（誉めて讃える）、語り明かす（語って開かす）、聞き返す（聞いて返す）、震え上がる、呆れ返る、持ち去る（持って去る）、沸き立つ

多くの例がテ形と重なることから、影山（1993）で統語的複合動詞とされているものと、本研究における「レベル1」が近いものであることが分かる。そこで、テ形と「レベル1」の複合動詞がどのような位置関係になっているか考察してみることにする。

2.1 動詞のテ形接続と複合動詞の境界線

～どのような時に2つの動作が1つの動作と捉えられるか～

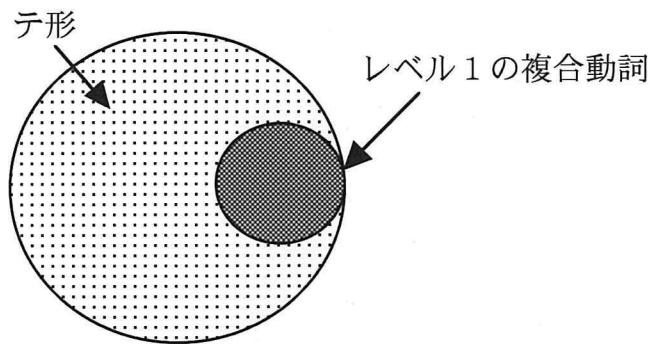
それでは、「レベル1」と「テ形接続」の位置関係を見ていく。「レベル1」の複合動詞は、V1とV2が時間的に近接していることで融合しているため、次のようにテ形で言い換えられるものである。

- (08) 彼女は ドアを押し開けた。（押して、開ける）
- (09) 警官は 犯人を撃ち殺した。（撃って、殺した）

これらは、テ形接続と複合動詞がほぼ完全に言い換えられるものである。しかし、テ形のものがすべて複合動詞になれるわけではない。

テ形と複合動詞の関係を図で表すと次のようになる。

<図4> テ形とレベル1の複合動詞の位置関係



今まで、これらの共通点を述べられることはあっても、相違点を指摘されることはなかった。そこで、本研究はテ形接続で語られる2つの連続したイベントが、どのような時に複合動詞で語られる1つのイベントとして結合できるのかという条件を考えることを通じて、「レベル1」の複合動詞の特徴を考察することにする。

議論の手がかりとして、テ形についてまとめてみる。テ形接続の基本的な性質は、動作として語られる2つのイベントをつなぐことであり、その意味については先行研究においてかなり明らかにされている。テ形は研究者により様々な意味に分類されているが、本研究ではテ形の意味を2つのイベントが並んだ時の人間の解釈のバリエーションとして扱うこととする。

<森田 (1988:750)>

- ① 並立 リンゴがあって、ミカンがあって、バナナがある。
- ② 対比 おじいさんが山に行って、おばあさんが川に行く。
- ③ 同時進行 飛行機が煙を吐いて墜落した。
- ④ 順序 学校へ行って、先生にあった。
- ⑤ 原因・理由 花瓶が棚から落ちて割れた。
- ⑥ 手段・方法 バスに乗って帰ります。

(7) 逆説 歩いて間にあう距離

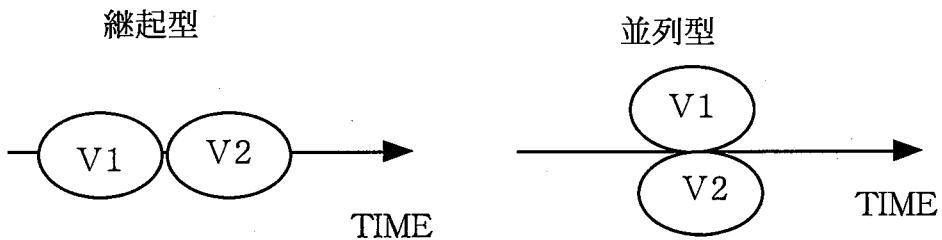
<吉川(1989:89)>

- ⑧ 順次動作 私は6時に起きて、7時に朝ご飯を食べます。
- ⑨ 並立動作 電車に乗って、本を読む。
- ⑩ 手段・方法 コンピューターを使って、複雑な計算をする。
- ⑪ 原因・理由 人命を救って、表彰された。

これらのテ形は時間的関係によりV1とV2が連続（継起型）しているものと、並列（並列型）しているものの2つに分類することができる。このようにテ形接続は、色々な動詞を様々な意味で生産的に結合することができる。

これらの関係を図で表すと以下のようになる。

<図5>テ形接続のV1とV2の関係



テ形接続と複合動詞は言い換えられるものも多いが、それらすべてが言い換え可能なわけではない。ここではテ形接続の中でも、ある条件を満たしたものだけが複合動詞になると考える。それでは、どのような複合動詞とテ形接続が重なっているかを見てみることにする。

本研究で「レベル1」とする動詞の多くは、影山(1993)で語彙的複合動詞とされているものとかなり重なっている。影山(1993)では、語彙的複合動詞のV1とV2の意味関係について以下のようにまとめられている。

<語彙的複合動詞>影山(1993:78)

・動作の様態・手段(押し開ける、転げ落ちる、もみ消す)

- ・付帯状況（飲み歩く、嘆き暮らす、語り明かす）
- ・平行動作（泣き叫ぶ、恋い慕う、忌み嫌う）
- ・アスペクト（泣き止む、降りしきる、聞き漏らす）など

それでは、影山（1993）で語彙的複合動詞とされている例の中で、テ形と言い換えられるものは（　）で言い換えてみた。テ形と複合動詞はもちろん、形態が違うため、意味の差はある。よって、ここで言う「言い換え」は、複合動詞が具体的な状況を述べている時に、テ形で言えるかどうかという大まかな意味での言い換えであって、厳密に同異義語であるという意味ではない。

- (10) 埴の上に飛び上がった。（飛んで上がった）
- (11) ドアを押し開けた。（押して開けた）
- (12) 一晩、語り明かした。（語って明かした）
- (13) 犬を解き放つ（犬を解いて放つた）

影山（1993：75） 下線と（　）は筆者による

飛び上がる（飛んで上がる）、押し開く（押して開く）、泣き叫ぶ（泣いて叫ぶ）、売り払う（売って払う）、受け継ぐ（受けてつぐ）、解き放つ（解いて放つ）、飛び込む、（隣の人に）話しかける、こびり付く、飲み歩く（飲んで歩く）、歩き回る（歩いて回る）、踏み荒らす（踏んで荒らす）、誉め讃える（誉めて讃える）、語り明かす（語って開かす）、聞き返す（聞いて返す）、震え上がる、呆れ返る、持ち去る（持って去る）、沸き立つ

これらは、影山（1993）で語彙的複合動詞の代表的な例としてあげられているものであるが、この中でテ形で言い換えられないものは「飛び込む、話しかける、こびり付く、震え上がる、呆れ返る、沸き立つ」のような例だった。いくつか言い換えられないものがあるが、これをみると、語彙的複合動詞の中には、テ形で言い換えられるものが多く含まれていることがわかる。

テ形で言い換えられないものには2つの理由がある。テ形で言い換えられないということは、V1とV2を独立した別個の動詞として切り離せないということを意味する。そのためテ形ならない理由として、1つは完全に語彙化しているものと、もう1つは文法化を起こし

てV2が独立できなくなっているという2つの理由が考えられる。

完全に語彙化しているものとして、「沸き立つ」と「呆れ返る」がある。「沸き立つ」を考えてみると、「並び立つ（=並んで立つ）」「降り立つ（=降りて立つ）」であったら、テ形で言い換えられることから「レベル1」である。しかし「沸き立つ、奮い立つ、猛り立つ」のように、興奮した激しい状態を表す「～たつ」は、生産性があるようではない。「*怒り立つ、*いかり立つ、*喜び立つ、*どなり立つ」が言えないことからも、これらは「レベル0」の意味であることがわかる。「～かえる」も同様である。「跳ね返る（=はねて返る）」のように方向を表す例は「レベル1」である。この他にも「～かえる」は多義語で色々な意味がある。「呆れ返る、静まり返る、ふんぞり返る」などは人間の状態や態度を表しているが、「*驚き返る、*威張り返る、*騒ぎ返る」が言えないことからも、これらは「レベル0」の意味であることがわかる。

次に、文法化を起こしているものとして、「飛び込む」「こびり付く」「話しかける」「震え上がる」がある。「～こむ」「～つく」は意味の漂白化（Bleaching）を起こして、接辞化しているため「レベル0」の意味になる。一方、同じ文法化でも、「話しかける」「震え上がる」は「やりかける（しかける）」「やりあがる（しあがる）」のようにスロットを形成しているため「レベル2」の意味を持っている。これらは、移動を表す後項V2であり、スロットを形成している「～かける」「～あがる」はアスペクトを表す用法も持っている。

このように、「イディオム化（語彙化）」して、V1とV2を独立させることができないものと、「文法化」して、抽象化したものは「テ形」テストに合格しなくなる。

このように、多少の例外はあるが、多くの語彙的複合動詞は「V1 テ V2」と言い換えることができる。けれども、テ形接続になるものすべてが複合動詞になるわけではない。テ形は単に2つのイベントを並べて述べているだけであるが、複合動詞として語彙化されるためにはそれらが融合して1つの動作として認識されなければならないからである。テ形接続と複合動詞で表されるV1とV2の特徴を以下のようにまとめてみる。

【テ形接続で表されるV1とV2の特徴】

並列的であれ、継起的であれ、2つの独立した別個のイベントであると捉えられている。

【複合動詞で表されるV1とV2の特徴】

2つの時間的に近接しているV1とV2が一つの語を形成している。これらの意味はV1と

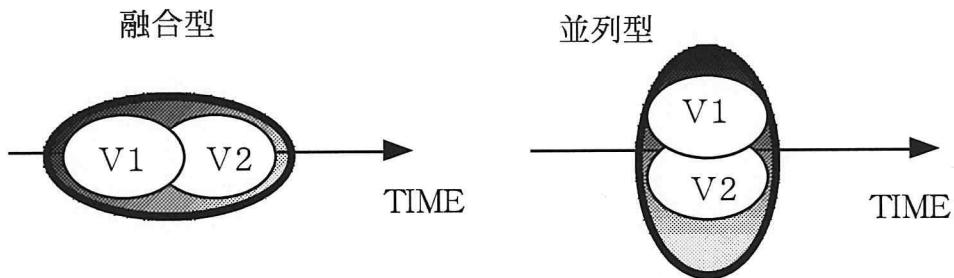
V2の意味を合成して出すが、動詞として「一語」にまとまっている。V1とV2が自由に結合できる形と違って、V1とV2の結合はユニークであり、意味的な制限がある。

形で言い換えることができる複合動詞は、V1とV2の関係から大きく分けて「融合型」と「並立型」の二つに分類することができる。

融合型・・・V1とV2という2つのイベントが融合している

並列型・・・良く似たイベントV1とV2が並列して融合している

<図6>複合動詞のV1とV2の関係



さらに、融合型には「因果関係」と「付帯状況」というサブカテゴリーを設定する。これらは<表1>のようにまとめられる。

<表2> テ形で言い換えられる複合動詞の分類

タイプ		動詞例
① 融合型	因果関係	飛び上がる、押し開ける、解き放つ、踏み荒らす、
	付帯状況	飲み歩く、歩き回る、
② 並列型	並列	泣き叫ぶ、誉め讃える、

形で言い換えられる複合動詞は、意味の点から「融合型」と「並列型」に分けられる。その中でも「融合型」は時間的には継起関係があり、V1がV2の原因として解釈できる「因果関係」と、時間的には同時性があり、広い意味でV1がV2の付帯状況と解釈できる「付帯状況」という2つのタイプに分けることができる。「並列型」のV1とV2は、結合する

V1とV2が語彙的に決まっているため、生産性がない一回的な結びつきである。よって、これらはテ形で言えるが「レベル0」として扱うことにする。「レベル0」と「レベル1」は、「直接ルート」で出されるか、「間接ルート」で出されるかという違いはあるが、「レベル1」でイディオム化したものは、すぐに「レベル0」に変化するため、連続的なものである。

テ形接続が複合動詞になるためには構造的条件と、意味的条件があるが、まず、構造的条件からみていくことにする。

- (14) She shot him dead. (彼女は彼を撃ち殺した)

例14の英語の例は日本語では複合動詞「撃ち殺した」、または、テ形接続「撃って殺した」で言い換えられるものである。英語では「She shot him」「He is dead」という2つのイベントが目的語の一致により合成されている。

これに対して日本語における複合動詞の典型例は、動作主と目的語に一致があるものとする。なぜなら、一致する項の数が多ければ多いほど、イベント同士が緊密に結びつくと考えるからである。それゆえ、複合動詞になれるものは一致要素が2つとれる「①他動詞+他動詞」というのが最も典型的な例として予測され、事実、最も多く観察される。これと同じ理由で一致要素が1つであるが、V1とV2のすべてが一致している「②非能格自動詞+非能格自動詞」「③非対格自動詞+非対格自動詞」例も見られる。

影山（1993：119）

他動詞どうしの結合が豊富であるのに比べると、非能格にせよ非対格にせよ自動詞どうしの複合はさほど多くない。この差は偶然ではなく、むしろ複合動詞の意味機能から必然的に帰結するのではないかと思われる。

このように、最も典型的な「レベル1」は、前項V1と後項V2が一致するものである。「レベル1」の複合動詞は、前項V1と後項V2が連続して並んでいることに、特別な意味がある。連続しているというその2つの動作の間に、「原因・結果」「様態・動作」など、意味を解釈上与えているのである。よって、この2つの関係は文法的に保証されているものではないのである。よって、前項V1と後項V2の項(argument)がすべて一致した形で、

結びつけられるのがもっとも安定した形式なのである。よって、一致のないものは複合動詞を形成することができない。

〈項がすべて一致する場合〉

一致が多ければ多いほどよい。

＜一致がないものは合成できない＞

- #### ④ 非能格自動詞と非対格自動詞

もっとも安定したものは、項 (argument) がすべて一致するものであるが、他動詞と自動詞が結びつく場合もある。V1とV2の一方が他動詞で一方が自動詞の場合、これらのV1とV2は動作主か目的語のどちらかしか一致要素をもつことができない。影山の他動性調和の原則では「⑥他動詞と非対格自動詞」はほとんど存在しないことが指摘されており、これらのことから、日本語では動作主の一致でイベントを合成することができても、対象の一致ではイベントを合成することができないことがわかる。

影山 (1993:117) 「他動性調和の原則」

基本的に非対格自動詞は非対格自動詞としか結合しない

このように影山（1993）で言われている「他動性調和の原則」は、動作主のあるものは動作主の一致を要求するという、項構造上の条件にまとめられる。この「他動性調和の原則」は典型的な「レベル1」の複合動詞では非常に強く働いている。そのことを、他動詞と自動詞が結びつくパターンで確認してみる。

〈項の一部しか一致しない場合〉

- ⑤他動詞と非能格自動詞（動作主が一致）

非能格自動詞+他動詞・・・太郎が部屋を飛び出る

他動詞+非能格自動詞・・・犬が太郎に囁みつく

〈対象の一致では合成できない〉

⑥他動詞と非対格自動詞（対象が一致）・・・存在しない

以上のことから、テ形接続が複合動詞になる構造的条件を次のように考える。

【テ形接続が複合動詞になる構造的条件】

基本的に一致要素が多ければ多いほど良いが、一致要素が1つの場合は、動作主の一致を要求する。対象の一致では複合動詞を形成できない。

構造的条件は「レベル1」の複合動詞を形成するための大きな条件であるが、構造的条件だけではテ形接続が複合動詞になるすべての事実を説明したことにはならない。なぜなら、複合動詞になっているものは構造的条件を満たしているが、構造的条件を満たしたもののがすべて複合動詞になれるわけではないからである。つまり、構造的条件は必要条件であって、必要十分条件ではないのである。構造的条件を満たすことは第一の条件であるが、これに意味的条件が加わり、複合動詞として成立するかどうかが決定される。

それでは次に、意味的条件について見ていくことにする。融合型は「因果関係」と「付帯状況」という大きく分けて2つの関係に分けられる。

融合型：因果関係・・・飛び上がる、押し開ける、解き放つ、踏み荒らす

テ形は時間軸上における継起的な動作を述べる形式のため、動作主が異なっていても連續動作として述べることができる。一方、複合動詞は、構造的条件で述べたように他動詞と他動詞が結びつく場合、動作主や目的語が一致していないものは複合動詞になることができない。しかし、動作主や目的語が一致していても複合動詞になれない例は多く存在する。

(15) *太郎がドアを触り開けた。

(16) *太郎がドアを探し開けた。

そのため構造的条件の上に、意味的条件として「時間的近接性」「因果関係」という二つ

の条件が関係していると考える。

(17) 太郎がチェーンを外して、ドアを開けた

- ・動作主さえ一致されていれば、目的語が違っていてもよい

(18) 太郎がドアを押し開けた

- ・動作主と目的語の両方が一致
- ・時間的に近接性を持っている
- ・V1がV2の様態として解釈できるような因果関係を持っている

ここでいう時間的近接性というのは、単なる時間的連続ではなく、V1の動詞が進展するのに伴って、V2の動作が引き起こされるような連鎖反応的継起関係を指す。つまり、「押し開けた」はV1「押す」ことをするのと同時にV2「開く」ということも起ったことを表しているのである。この点で「朝起きて、顔を洗って、ご飯を食べて、学校へ行った」のように独立したイベントを連続して述べるテ形接続とは異なっている。

また、因果関係というのは、V1をすれば当然V2がおこるだろうという含意を表す。「蹴る」「触る」は一般的には同じ接触動詞に属すると考えられているにも関わらず、「蹴り開ける」は適格な例になるが「*触り開ける」は不適格な例になってしまふ。この差違は複合動詞の選択が、抽象的な動詞分類だけで決まるのではなく、「蹴る/開ける」「触る/開ける」という2つのイベントの間にどのくらい因果関係が読み込めるかという現実世界における事態の把握に関わっていることを暗示している。

結合の自由度が高いテ形接続でも、コンテクストのない状況では「触って開けた」は状況がすぐに想定しにくいため、座りの悪い文に感じられる。けれども、もしそれがタッチセンサーの付いたドアというコンテストがあるならば「(センサーを)触って開けた」は適格になる。しかし、このような限られた1回的な因果関係は複合動詞として成立しにくく、「*触り開けた」は適格な例としては認識されないのである。

(19) 太郎はそのドアを触って開けた。

(20) *太郎はそのドアを触り開けた。

複合動詞になるための時間的近接性と因果関係について、もう一度まとめ直してみる。動作主と目的語が同定されていて、時間的にも連続している「ドアを探して開ける」は一見、複合動詞になれるように思われるが、「太郎がドアを探す」と同時に「太郎がドアを開ける」ことが起きないため、時間的近接性がないと考える。また、「太郎がドアを探した」ために「太郎がドアを開けた」ことが起こったという因果関係を読み込むこともできないため、不適格になることが予測される。この予測は「*探し開ける」が複合動詞にはなれないことから、正しく裏付けられる。このように、複合動詞になるためには構造的条件だけではなく、意味的条件も働いているのである。

- (21) 太郎がドアを探して開けた
- (22) *太郎がドアを探し開けた (-近接性, -因果関係)

次に、融合型の「付帯状況」を表すものについて見てみる。

融合型：付帯状況・・・嘆き暮らす、遊び暮らす、忍び泣く、語り明かす、踊り狂う

付帯状況のV1はV2と同時的、付隨的に生じるものであり、時間的に同時である。また、V1はV2の様態(MANNER)と解釈されるようなものであり、V1の独立性は非常に低い。この点でV1がV2の原因となるような「因果関係」とは大きく異なっている。そのため、これらは、語によっては、時間的に独立した形よりも、同時進行的付帯状況を表す「ナガラ形」で言い換えた方が自然になるものもある。

- (23)
 - ① 嘆き暮らす (嘆いて暮らす) (嘆きながら暮らす)
 - ② 遊び暮らす (遊んで暮らす) (遊びながら暮らす)
 - ③ 忍び泣く (忍んで泣く) (忍びながら泣く)
 - ④ すすり泣く (?すすって泣く) (すすりながら泣く)
 - ⑤ 語り明かす (語って明かす) (語りながら明かす)
 - ⑥ 聞き回る (聞いて回る) (聞きながら回る)
 - ⑦ 持ち運ぶ (持つて運ぶ) (持ちながら運ぶ)

このように「レベル1」の複合動詞は、基本的にはテ形と言い換えられるものとする。ただし、統語的に動詞連続を述べられるテ形と比べて、複合動詞になるためには動作主の一致という項構造上の条件に加えて、意味的な条件が掛かってくる。このように、テ形接続と異なり「語」を作る操作である複合動詞は、複合動詞になるための特別な動機が必要なのである。

また、「レベル1」の複合動詞は、「レベル2」の複合動詞のように、複合動詞を作るためのスロットを形成しているわけではないため、V1とV2の意味関係は文法化された関係ではない。

ここで見られる「因果関係」「手段」「付帯状況」という意味は、V1とV2が並んでいるということに付与される、解釈上の意味である。これらはV1がV2の様態になっており、V2の動作のサブカテゴリーをしている。つまり、「切り倒す」は、「倒す」のサブカテゴリーを形成するのである。「倒す」のサブカテゴリーとして、どんな風に「倒す」のかという様態のバリエーションを展開する。よって、これらは「切り倒す・押し倒す・打ち倒す、蹴り倒す、投げ倒す、突き倒す、引き倒す。はり倒す、ねじ倒す、なぎ倒す」などのグループを形成し、頻度が高いものや、固定化したV1とV2は、広辞苑や大辞林などの辞書に載るものもある。ただ、辞書に載っていることだけが絶対条件でない。これらV1は「倒す」ための因果関係を伴う様態と解釈されれば良いので、辞書に載っていないものもたくさんある。広辞苑・大辞林に載っていない「～たおす」の例を考えてみると、「殴り倒す」「はたき倒す」「つかみ倒す」「引きずり倒す」など、色々あり、生産性がある。また、単独で聞くと不安定であるが、コンテクストがあれば良くなる例もある。たとえば、コンテクストがない状態で「揺さぶり倒す」を聞くと不安定であるが、コンテクストがあれば「揺さぶり倒す」は適格になる。

(24)

秋名には、新節の日の早朝、「ショチョガマ」と呼ばれる、ワラぶきの小屋を揺さぶり倒す儀式がある。人と自然が激しく解け合う、暴力的な至福のひとときが訪れる。

(<http://www.web-fs.ne.jp/pictures/amami7.html>)

コンテクストがない状態では「揺さぶり倒す」が不安定になるのは、何かを「揺さぶって倒す」という状況をなかなか想定しにくいことも関係しているだろう。また、現実世界でよ

く見るかという「頻度」や、言語の「志向性」も関係している。

このように、あるV2がどのようなものをV1として取り得るかということには、現実世界の認識と深く関わっているため、動詞だけでは判断しにくいことも事実である。しかし、その一方で、これらは生産的に新しい語を作り出すことも可能である。

「レベル1」は具体的動作を表すV1とV2の意味をそれぞれ出し、その意味を合成して出すという最もシンプルな複合動詞と言えるだろう。

2.2 「レベル1」のレベル移動

「レベル1」は、具体的な動作を表す複合動詞であるが故に、それが抽象化された時に、レベル移動を起こしやすいものである。つまり、これらは「文法化」を起こすと「レベル2」になり、「イディオム化」を起こすと「レベル0」に変化する。

「文法化」しやすいものとして、「空間的」なものが「時間的」なものへ変化するものをみたが、具体的な意味を持ったものが、抽象的な意味に変化するのも「文法化」の流れである。

「飲み歩く」は影山（1993）では、酒以外のものを「飲み歩く」と言えないため、典型的な語彙的複合動詞とされているものである。これは具体的な意味を持った「歩く」から、「移動」という抽象的な意味へ文法化を起こしている。また、主に酒類を取るという点では「イディオム化」している。

「～歩く」自身の生産性は高いものではないが、「食べ歩く」「探し歩く」「聞き歩く」「訪ね歩く」のように、あちこち歩き回るという意味をもったV2の様態として解釈できるものならば、V1として取ることができる。よって、「（写真を）撮り歩く」「（仏像を）見歩く」「（家々を）まわり歩く」「（品物を）売り歩く」などの例も可能になる。

また、「レベル1」の複合動詞は、V1に様態を表すため副詞的なものが入ることができ。よって、V1に様態を表すオノマトペ的なものを取ることが多い。「～あるく」も「のしのしと歩く」から形成されたと思われる「のし歩く」や、古典語の「ほつく」促音便化した「ほつき歩く」のような例が見られる。これらは、様態を表すオノマトペ的なものであるが、「ぶらぶらと歩く」が「*ぶら歩く」、「とことこと歩く」が「*とこ歩く」にならないように、どのようなV1を取るかはイディオマティックに決まっている。よって、これらオノマトペ的なものは「レベル0」であると考える。

今まで、「～あるく」は「食べ歩く」が「食べて歩く」とテ形で言えることから、「レベル1」として解釈してきたが、後項V2「～あるく」が抽象的な動きしか表さないように、「～あるく」は文法化している例である。話者によって、多少判断が異なるかも知れないが、「しあるく」「やりあるく」と言える話者がいれば、その人にとって「～あるく」はスロットを形成していると言える。「やりあるく」の例を探してみると次のような例が見つかった。

(25)

郵便局の面々は昔から特別ひどいのだが、現在、東京三菱銀行の東大阪や新大阪辺りでファシスト系統のばか女が発生しており、客からすれば憤慨するような事を平気でやり歩く。

(www.lares.dti.ne.jp/~ks-fahfa/bbsf/bbsf.html)

影山（1993）で「～あるく」は、語彙的複合動詞なのに、「借金し歩く」「調査し歩く」のようにサ変動詞を取れる例外的な例として取り上げられている。

影山（1993：94）

語彙的・統語的の区別で筆者自身が気付いた例外は「～あるく」である。これは、尊敬語「*お飲みになり歩く」、受け身「*なぐられ歩く」、代用形「*そうし歩く」が不可能なことから語彙的と判断されるが、「する」との結合は許すようだ。（借金し歩く、調査し歩く）

このような、振る舞いは「～あるく」が文法化の途中にあり、徐々にスロットを形成しつつあると考えれば納得できる振る舞いである。スロットは一気に形成されるものではなく、徐々に表現性を拡張しながら形成されていく。実際、数は少ないながらも、V1が受身形になる例を見ることができることからも、それが分かる。

(26)

江戸時代、「仲仙寺」は「馬の観音様」として信仰を集め、とりわけ、六月の田植えが終わる頃になると、市内坂下区常圓（じょうえん）寺下の辻から仲仙寺まで続く「羽広道」（はびろどう）には、華やかに飾り立てられた農耕馬が飼主に連れられ歩く姿が見られたという。

(http://www.asahinet.or.jp/~mi5hskri/nagano/date/s_nagano/ina/town/010114)

habiro.html)

(27)

先週8月10日～11日にかけて岐阜県恵那にて外乗（馬の背にゆられ歩く）を楽しんできた。[\(www3.nsknet.or.jp/~shigeko/kaze.h14.htm\)](http://www3.nsknet.or.jp/~shigeko/kaze.h14.htm)

「～たおす」が、「切り倒す」という「レベル1」の意味だけでなく、「使い倒す」「飲み倒す」のように、アスペクトを表す「レベル2」の用法を獲得しつつあることは4章で確認した。「やりたおす」といえる話者はこれがスロットを形成していると認識し、アスペクトの用法が許容できるが、スロットを形成していない話者は、「使い倒す」などが許容するのが難しいと予測される。

このように複合動詞というのは、言語の変化のダイナミズムの中にあるもので、固定化されたものではない。そのため、現在進行形で文法化が進みつつある複合動詞は、話者によってスロットを形成しているかどうかの判断が異なる可能性があるのである。

3. 「レベル0」の複合動詞

最後に「レベル0」の複合動詞を見てみることにする。「レベル0」の複合動詞は「直接ルート」から出される、複合動詞全体で一語になっているものである。これらは、イディオム化した意味を持っており、V1とV2の意味の合成からはその意味を解釈することはできない。

もちろん、「見舞う」のように「レベル0」の意味しかないものは、いわゆる「語」である複合動詞である。これらは単独で完全に「語」になっているため、逆に複合動詞という意識が薄い語である。「レベル0」だけの意味をもっている複合動詞としては「落ち着く」「書き留める」「煮詰まる」「聞き分ける」「突き止める」「繰り返す」「開き直る」「出払う」「入れあげる」「食い詰める」「張り切る」「思い切る」「書き下ろす」「見立てる」「似合う」「見抜く」「見舞う」「見張る」「見失う」「見つける」「見限る」「見送る」「見下げる」「見据える」「成り下がる」「（実施に）踏み切る」など、色々あり、そのすべてをリストアップすることはできない。

「レベル0」の用法しかもたない複合動詞もあるが、すべてのレベルの複合動詞は潜在的にイディオム化する可能性がある。そのため、これまで見てきた「見返す」「切り詰める」「見上げる」「落ち込む」のように「レベル0」の意味と他のレベルの意味を同時にもつている語も珍しくない。このように、「直接ルート」で産出される「レベル0」の意味と、「間接ルート」で出される意味が並立する場合、「直接ルート」で出される意味の方が早く確定する。

そのことをもう一度、確認してみよう。「巻き上げる」「押しかける」は「レベル0」の意味と他のレベルの意味の両方が並立的に存在する。

合成的な「レベル1」や「レベル2」の意味よりも、イディオム化している「レベル0」の意味の方が早く産出される。

(28) 「巻き上げる」

「レベル0」の意味・・・金品をだまし取る

「レベル1」の意味・・・巻いて上げる

(29) 「押しかける」

「レベル0」の意味・・・招かれていないので、勝手にそこへ出向く。

「レベル2」の意味・・・もうちょっとで押しそうになる

その理由として、「間接ルート」で出される「レベル1」や「レベル2」の語は、複合動詞をV1とV2という形態に分解して、V1とV2のそれぞれの意味を別々に出し、その和を再合成する。そのため、「直接ルート」のように、メンタルレキシコンにあればすぐに意味が確定ものよりも処理コストがかかるのである。

もし、「レベル0」の意味がメンタルレキシコンに登録されていない場合は、「間接ルート」を使って分析的に解釈するようになる。「直接ルート」と「間接ルート」の時間の差は、脳内の抽象的な処理なので認識できないほどの一瞬の差である。ただ、コンテクストがないデフォルトの状態で「巻き上げる」を聞いたとき、「直接ルート」の方が早く意味が産出できることから、脳内の処理に差があることがわかる。

このように、「直接ルート」と「間接ルート」の意味が共存する時、基本的に「直接ルート」の意味の方が早く出るが、これらの優先順位は使われる「頻度」も深く関係する。その

まめ、「直接ルート」で出される「レベル0」の意味が滅多に使われない特殊な意味で、「間接ルート」で出される意味の頻度が高い場合、逆転する場合も考えられる。

また、「直接ルート」と「間接ルート」は並行処理されるものであるが、コンテキストや、その主語や目的語から、どちらか一方だけが使われる場合もある。

それを「舞い上がる」で確認してみよう。

(30) 太郎は花子とデートできると聞いて、すっかり舞い上がった。

(31) 木の葉が風で舞い上がった。

「舞い上がる」の意味は「舞い上がる」だけで確定するわけではない。「太郎」「木の葉」などの主語や目的語などの情報や、コンテキストなども含めて決まってくる。「舞い上がる」は「太郎」「木の葉」という主語を聞いた時点で、意味をどんどん絞り込んでいっている。よって、「木の葉」が主語の時、「舞い上がる」は「間接ルート」を優先的に使用して意味を検索する。このように、複合動詞単独の意味だけではなく、コンテキストから得られる文の意味と絶えず照合しながら、複合動詞の意味は決まっていく。よって、同時に3つも4つもの意味で曖昧になることは滅多に起こらない。

「直接ルート」で出される「レベル0」の意味は、「語」としても意味があるので、分析不可能なものであるが、その性質からいくつかのグループにわけることができる。

- ① 語彙的な複合動詞 落ち着く、聞き分ける、見返す、見上げる、切り詰める
- ② 前項が接辞化しているもの 取り繕う、打ち切る、差し引く、引き扱う
- ③ 前項が音便化しているもの 追っかける、引っ張る、突っ走る、ぶっ殺す
- ④ 並立関係 泣き叫ぶ、恋い慕う、忌み嫌う、かきむしる、切り刻む
- ⑤ 前項がオノマトペ的なもの 茅立つ、ぶうたれる、ばたつかせる、ひた走る
- ⑥ 後項が接辞化しているもの 落ち込む、ひっつく、ぱくつく、葬り去る

「①語彙的な複合動詞」については、これまでにも何度も触れているのでとくに詳しく述べないことにする。これらは、「イディオム化」した意味をもっており、意味としても一語になっている。

「②前項が接辞化しているもの」「③前項が促音便化しているもの」は4章の「5.2 漂白

化 (Bleaching)」のところで詳しく分析した。これらは、前項V1が漂白化 (Bleaching) を受け、意味がなくなり接辞化する。さらにそれが進むと、「おっ」「ひっ」「つっ」「ぶっ」「かっ」という促音化した形式で「強調」を表すようになる。これらは、促音便化することで、前項V1はますます意味を失い、「語」としての結束性を強める。

ここで新しく述べる物として、「④並立関係」を見ていくことにする。「並列関係」はテ形で言い換えられるものでテ形接続の「並列型」としたものである。しかし、これらは「融合型」よりさらに厳しい、結合制限があり、V1とV2が一回的な特別な結び付きのため「レベル0」に分類する。

並列型・・・泣き叫ぶ、恋い慕う、忌み嫌う、かきむしる、切り刻む

テ形の並列動作は同一動作主のものも動作主が異なるものも自由に取ることができる。また、動作主が異なる場合、対比的に解釈される場合が多い。それに対して、複合動詞の並列動作は構造的条件から動作主と目的語の一致を要求するので、次のような対比的な例は存在しない。

- (32) 田中さんはノーベル化学賞をもらって、小柴さんはノーベル物理学賞を
もらった。

さらに複合動詞の並列型は単なる同時進行的な動作ではなく、V1がV2と似たような意味や状況を表すという制約がついており、同じような動詞を二回使うという一種のリダンダントな強調表現となっている。よって、「見ながら描いた」という同時進行的並列動作を表すものは「*見描いた」になることはできないが、類似動詞を重ねた「眺め見た」や「書き描いた」は複合動詞になることができる。

- (33) 花子は猫を見て描いた。 (猫を見ながら、描いた)
(34) *花子は猫を見描いた。
(35) 花子は猫を眺め見た。

また、テ形接続の場合、反対の意味を持つ物もつなげて言うことができるが、複合動詞の

場合、反対の意味を持つ物を1つの複合動詞として表すことはできないことが、影山（1993）で指摘されている。

影山（1993：101）

一方、複合動詞の場合は、複合語といえども1つの主語、1つの目的語で構成される单一の事象を表すから、複数の異なる事象を盛り込むことは困難になる。とりわけ、「行き来、貸し借り」のような対立概念を1つの複合動詞に取り込むことはできないようと思える。（*行き来る、*貸し借りる）

統語的な動詞連続はこのような制約を受けずに、自由に動詞をつなぐことが出来るが、複合動詞は、対立する概念を1つの複合動詞として、取り込むことはできない。

(36) 買い物に行って帰った。

(37) *買い物に行き帰った。

次に「⑤前項がオノマトペ的なもの」について述べる。「③前項が促音便化しているもの」のところで、「かっとばす」の「かっ」は、「かっとなる」というオノマトペと共に持っていることを指摘した。このように、複合動詞のあるものはV1にオノマトペ的に様態を表すものがくることができる

前項がオノマトペ的なもの 苛立つ、ぶうたれる、ぐらつく、ばたつかせる、ぶらさがる
しょぼたれる、ひた走る、こびりつく、

これらは、前項が反復形のオノマトペの一部を使って作られるものが多い。たとえば「イライラ」から「苛立つ」、「バタバタ」から「ばたつかせる」などである。ただ、「しょぼたれる」の「しょぼ」は「しょぼしょぼ」なのか「しょんぼり」なのかよく分からないし、「ひた走る」の「ひた」が「ひたひた」なのか「ひたすら」なのかよく分からない。はつきりしないながらも、これらが副詞的にV2の様態を表しているという点では共通している。

最後に「⑥後項が接辞化しているもの」について述べる。一般的に、イディオム化した「レベル0」は生産性が低いと言われている。ただ、これが漂白化（Bleaching）を起こして、

接辞化すると、「接辞」としての生産性を持つようになる。前項V1が漂白化(Bleaching)を起こしたものは、「レベル1」であったものが接辞化して、本来の予測を越えた新たな動詞と結びつくことを述べたが、これと同じようなことが、後項V2でも起こる。

本研究では、文法化を促進する要因として語用論的推論(Pragmatic inferencing)と漂白(Bleaching)の2つが関わっているとした。

「～だす」「～あげる」に見られるように、「空間的」なものが「時間的」なものに変化するのは、語用論的推論(Pragmatic inferencing)による文法化の典型例であった。これらは「レベル1」から「レベル2」への文法化を促進する要因となっていた。

もう1つの文法化として漂白(Bleaching)がある。漂白(Bleaching)というのは、意味が弱化、消失することである。4章ではその例として、音声変化を伴う「追いかける」が「追っかける」のように前項V1が漂白(Bleaching)される例を見た。これらは、漂白(Bleaching)されるに従って、「追う」という意味が薄れ、「おっ」という形態で「強調」を表すようになった。よって、漂白(Bleaching)を受け、接辞化した「おっ」は「おったまげる」「おっぱじめる」のように、本来の予測を越えた動詞を結合するようになる。しかし、これらは動詞としての意味を失うので、複合動詞としては語彙化して、一語となる。つまり、生産性を増すにも関わらず、意味的には「レベル1」のものが「レベル0」になってしまふのである。これと同じようなことが、後項V2でも起こると考える。

影山(1993)で、語彙的複合動詞の中で「他動性調和の原則」を破る例外的な例と言われているものに「～こむ」「～さる」「～つく」がある。これらは、補文も取らないのにも関わらず、他動性調和の原則を破り多くのV1と結合する例である。影山(1993)ではこれらの例を、LCSで合成されている語彙的複合動詞としたが、本研究ではこれらを「レベル0」の複合動詞で、後項V2が漂白(Bleaching)を受けたものと考える。漂白(Bleaching)を受けたものは、意味的特徴とともに、統語的特徴も弱化するために結合制限が緩くなる。これらは、次のような構造になる。

① affix [V]

② [V] affix

これらは、接辞化されているため、他の動詞とくっついて初めて意味を成す。よって、V1とV2の独立性を確認する「テ形」テストや、意味のない一般的な概念を表す動詞「する」

「やる」につける「する/やる」テストと本質的にあわない。また、これらは様々な動詞と結合し、基本的には方向性を表すが、漠然とした抽象的な意味を表すものが多い。

姫野（1999）では「～こむ」について次のように述べられている。

姫野（1999：59）

(1) 名詞+こむ (例) 勢いこむ 意気ごむ

(2) 動詞+こむ 乗りこむ 取りこむ

(1) は極めて数が少ないが、(2) は、方向性を表す後項動詞類の中ではねけて数が多い。既に見たように国立国語研究所の調査（1987）によれば、結合する前項動詞の数が234語（筆者の調査では約285語）で、語彙的複合動詞の中では第1位である。

まず、テ形テスト「～こむ」は動詞で使われるときは「込んでいる」「込んだ」という形式になり、「込む」だけでは独立して使うことはめったにない。よって、「流れ込む（=* 流れて込む）」「飛んで込む（=*飛んで込む）」「持ち込む（=*持つて込む）」のように、V1とV2を独立させるテ形テストには合格しない。また、「～さる」「～つく」は本動詞としての用法がはっきりしているので、不安定ながらもテ形でいうことができるが、あまり良くない。

(38) 「～こむ」

非対格自動詞：流れ込む（=*流れ込む）

非能格自動詞：逃げ込む（=*逃げて込む）

他動詞：持ち込む（=*持つて込む）

(39) 「～さる」

非対格自動詞：過ぎ去る（=?過ぎて去る）

非能格自動詞：逃げ去る（=?逃げて去る）

他動詞：持ち去る（=持つて去る）

(40) 「～つく」

非対格自動詞：焦げ付く (= ?焦げて付く)

非能格自動詞：飛び付く (= ?飛んで付く)

他動詞：噛み付く (= ?噛んで付く)

次に、これらを「する/やる」テストに入れてみよう。「～やりこむ」は良いとしても、「*やりさる」「*やりつく」は言うことができない。このように「～こむ」「～さる」「～つく」は接辞化しているため、「テ形」テストや「する/やる」テストのどちらにも適合しにくい。

「おったまげる」「おっぱらう」でもみたが、あまりにも漂白 (Bleaching) が進み、語彙的意味が弱まると、単なる「強調」を表すようになる。「～こむ」も「じっと黙り込んだ」「急に老け込んだ」「毎日、20キロ走り込んだ」のようなものは、量の多さや、程度を表す一種の強調表現と考える。「～さる」も「時が過ぎ去る」「あとかたもなく崩れ去った」のようなものがそれにあたる。これらの例は、強調表現なので「～こむ」や「～さる」がなくても、言い換えることができる。もちろん、複合動詞を使った方が、程度が甚だしいことを表す意味が加わるので表現上のニュアンスは異なる。

(39) じっと黙り込んだ (黙った)

(40) 急に老け込んだ (老けた)

(41) 毎日、20キロ走り込んだ (走った)

また、「～つく」は田守 (1999) でははっきりと「接尾辞」として述べられているものである。また、「～つく」はその前項にオノマトペ的なものを生産的に取ることができる。

田守 (1999 : 56)

次によく見られる動詞化は、接尾辞「～つく」により派生である。

(37) ばさつく いらつく べつつく もたつく ぐらつく
むかつく がさつく がたつく ばたつく ねばつく

これらの動詞は対応する2モーラの反復形のオノマトペと意味的に関係していて、このような対応形の2モーラの語気を「つく」に組み入れることによって派生したと考えられる。

もともとが「レベル1」あるいは「レベル2」であっても、漂白 (Bleaching) が進むと、V1とV2が分析的な形態であるという意識が薄れてくるため、「レベル0」にレベル移動する。よって、「～さる」をつかった「持ち去る」は「持って去る」と言えるので、「レベル1」の意味を持っているが、「葬り去る」は「社会的に失墜させる」というイディオム化した意味だけ持っているが、完全に「レベル0」になっている。また、「汚れをぬぐい去る」も、「ぬぐう」+「さる」という意味の合成からは「きれいにふき取る」という意味は出てきにくい。これらは「汚れをぬぐう」と言い換えることができるために、「さる」は「すっかり～した」という程度を強調している接辞と考え、「レベル0」であるとする。

先に「～だす」「～あげる」のように、空間的な移動が時間的移動になったものは「レベル1」と「レベル2」の間にあるものとしたが、それと同じように「～こむ」「～さる」「～つく」のようなものは、「レベル0」と「レベル1」との中間的な例であるとする。これらの特徴として「移動」を表す概念であるということができるだろう。

4章でも述べたが「移動」を表す概念は文法化しやすく、多くの場合意味の変化を引き起こす。それが、スロットを取る方向に拡張されれば「レベル2」になり、動詞としての特徴や意味を失い接辞化すれば「レベル0」へと変化する。ただ、接辞化したものが、生産性が拡大するにつれて、明確に文法的な意味をもつようになると、スロットを取るようになりと「レベル2」に拡張される可能性もある。

「～こむ」が「やりこむ」と言えのは、「～こむ」がスロットを形成しつつあるためだと考える。しかし、「～こむ」は独立した動詞の形態でとは言い難いので、ここでは取りあえず「レベル0」に入れておくことにする。

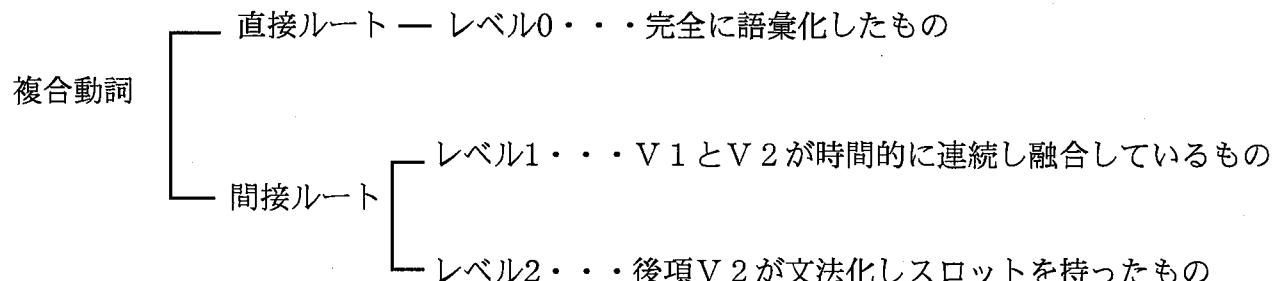
このように、複合動詞は「語彙性」と「規則性」の両方を持ち合わせ、その間で変化するダイナミズムを持っていることがわかる。

4. まとめ

本研究では「直接ルート」で出される「レベル0」、「間接ルート」で出される「レベル1」「レベル2」の意味を持つどのようなものがあるかを詳しく分析した。

これらは、次のような特徴にまとめられる。

<図7>



これらの分析は「～だす」「～かえす」が、必ず1つのレベルに固定されという形態の分析ではなく、あくまで意味のレベルによる分類である。よって、「見返す」という語が「直接ルート」で出される「あなどられた相手に立派になって見せつける」という意味と、「間接ルート」で出される「もう一度見る」「自分を見た相手を見る」という複数の意味を同時も持つこともある。

ある形態が「直接ルート」と「間接ルート」で出される意味を両方もっている時、デフォルトの状態では「直接ルート」の意味の方が先に出される。その理由として、「間接ルート」は複合動詞をV1とV2という分析的な形態として解釈し、それぞれの意味を出した後、再び意味を合成するため、メンタルレキシコンの中にあればすぐに意味が確定する「直接ルート」より処理コストがかかることがあげられる。

影山（1993）の語彙的複合動詞と統語的複合動詞という2分類と、本研究の3分類をまとめると次のようになる。結果としては影山（1993）で語彙的という名の下にまとめられているものの中に、「直接ルート」で作られる完全に語彙化したものと、「間接ルート」で作られる分析的なものがあることを示した。また、影山（1993）は統語的なものとしてVPをとるもの想定したが、本研究では複合動詞は「語」であるので、Vを取るスロットを持っているかどうかを1つの基準にした。そして、その中で、特に文法化が進んだものはVPを取れると考える。

<図8>

直接ルート	レベル0	単語	
語彙的 間接ルート 統語的	レベル1	テ形テスト V2が移動	一語的
	レベル2	する/やるテスト	←影山 (1993) 合成的
		そうするテスト	

影山の語彙的複合動詞と統語的複合動詞の分類の基準は、語彙的複合動詞は統語構造においてひとまとまりであり、統語的複合動詞は2つの動詞の合成としてとらえるということである。しかし、統語的複合動詞であっても、それらは「語」を認定するテストに高いの確率で合格し、完全に統語的な振る舞いをするテ形接続とはかなり性格が異なっている。

本研究では複合動詞は「語」であると考える。それが、拡張されVPをとるものは確かに統語的と言うことができるだろう。しかし、影山(1993)自身が「完了」の意味をもつものに「～おわる」「～おえる」「～つくす」「～きる」「～とおす」「～ぬく」の6つの形式を上げていたように、統語的なものであっても、複合動詞は副詞的な効果を持っているため、意味的な結合制限を持っている。逆に、真に統語的・機能的なものであるのなら、「完了」を表すのに6つの異形態を持つ必要はないのである。

影山(1993)で、語彙的複合動詞とされているものについて、影山・由本(1997)では次のように述べられている。少し長くなるが、影山(1993)自身の語彙的複合動詞に対する考えが良く表れているので、引用することにする。

影山・由本(1997:76)

同じ語彙部門で起こることと言っても、日本語の複合動詞形成は英語の接辞付加とかなり異なっていることがわかる。最も顕著な差違は、日本語では2つの動詞

がいすれも独立に動詞概念として認められる概念構造を携えて結合しているのに対して、英語の接頭辞のほとんどは、基体動詞が提供する概念構造に何らかの意味要素を付加するに過ぎないという点である。従って、英語の場合には、原因や付帯状況にあたる事象を新たに付加することはできず、様態を表す副詞的要素を付加するのがせいぜいである。その代わり、レキシコンの中で各接頭辞の意味機能が明確に表示されているから、たとえ基体の品詞が異なっても一貫した意味解釈が可能になる。その結果、語彙的派生にもかかわらず、意味の透明度は非常に高いと言える。一方、日本語の複合動詞は形態的には2つの動詞を結合するだけであり、全体の意味解釈はいくつかの語彙概念構造のパターンに基づいて読みとらなければならない。

このように、影山（1993）では、語彙的複合動詞であっても、2つの動詞の合成としてとらえており、そこには「見舞う」「落ち着く」「付き合う」などのものは考察に入っていない。複合動詞を2つの動詞の合成と考えると、どうしても項の継承や格関係を気にせざるを得ないが、複合動詞の項の継承はすべて予測できるものではないことが知られている。複合動詞を完全な2つの動詞であるという、分析的な観点から複合動詞を見ると、複合動詞の合成は非常に規則性が高いように思われる。このように合成的に作られた複合動詞は高い規則性を持ち、V1とV2の結合を予測することも可能だからである。

しかし、その一方で、複合動詞は新しい語を創造する操作であり、「見舞う」「落ち着く」「付き合う」「ひた走る」「パクつく」「ぶったまげる」など、分析不可能な様々なものがある。これらを複合動詞ではないとして、切り捨ててしまうことは簡単であるが、これらは複合動詞の中で非常に大きな比重を占めており、複合動詞の重要な側面の一部である。

複合動詞は「語彙性」と「規則性」という相反する2つの側面を持っており、語彙と統語の間インターフェイスとなっている。複合動詞はこの「語彙性」と「規則性」の中で変化するダイナミズムを持っていて、現在も変化し続けているものである。複合動詞の「語彙性」は決して分析不可能なものではなくそこには、他の複合語や副詞、あるいはオノマトペなどとの共通する、日本語という言語の体系を垣間見ることができるのである。

本研究では脳科学における「二重アクセスモデル」を使用し、複合動詞を分析した。現段階では仮説にすぎないが、将来、本研究の提案した分析の妥当性が検証されることを期待している。

参考文献

<日本語参考文献>

- 秋本実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- 新川忠 (1990) 「なかどめ-動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のはあい-」
『ことばの科学』 第4集 むぎ書房
- アンドリュー・ラドフォード (2000) 外池滋生・泉谷双藏・森川正博訳『入門ミニマリスト統語論』 研究社
- 池谷知子 (2001) 「「かけ」構文の意味計算機構」 『KLS』 21. 関西言語学会
- 池谷知子 (2002) 「複合動詞「～だす」と限界性」 『KLS』 22. 関西言語学会
- 池谷知子 (2003) 「動詞のテ形接続と複合動詞の境界線」 『KLS』 23. 関西言語学会
- 上野善道 (編) (2003) 『音声・音韻』 朝倉日本語講座3 朝倉書店
- 石井正彦 (1983) 「現代複合動詞の語構造分析における一観点」 『日本語学』 2-8.
- 石井正彦 (1985) 「複合動詞の成立-V+Vタイプの複合名詞との比較-」 『日本語学』 3-11
- 石井正彦 (1987) 「漢語サ変動詞と複合動詞」 『日本語学』 6-2.
- 石井正彦 (1988a) 「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」 『日本語学』 7-5.
- 石井正彦 (1988b) 「接辞化の一類型-複合動詞後項の補助動詞化-」 『方言研究年報』 30. 和泉書院
- 石井正彦 (1989) 「語構成」 『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』 明治書院
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 英語学モノグラフシリーズ16 研究社
- 伊藤たかね (2002) 「二重メカニズムモデルと語彙情報の『継承』」 伊藤たかね (編)
『文法理論: レキシコンと統語』 シリーズ言語学-1 東京大学出版会
- 今井忍 (1993) 「複合動詞の多義性に対する認知意味論によるアプローチ-『出す』の起動の意味を中心にして-」 『言語学研究』 2 京都大学
- 今泉志奈子・郡司隆男 (2002) 「語彙的複合における複合事象-「出す」「出る」に見られる使役と受動の役割」 伊藤たかね (編) 『文法理論: レキシコンと統語』 シリーズ言語学-1 東京大学出版会

参考文献

- 岩田誠 (1996) 『脳と言葉：言語の神経機構』共立出版
- 大石 強 (1988) 『形態論』安井稔監修 現代の英語学シリーズ4 開拓社
- 岡崎正男・小野塚裕視 (2001) 『文法におけるインターフェイス』英語学モノグラフ
シリーズ18 研究社
- 荻原裕子 (1998) 『脳にいどむ言語学』岩波科学ライブラリー59 岩波書店
- 荻原裕子 (2002) 「脳におけるレキシコンとの統語の接点」伊藤たかね (編) 『文法
理論：レキシコンと統語』 シリーズ言語学-1 東京大学出版会
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論-言語と認知の接点』くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』中右実(編) 日英比較選書 8 研究
社
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』日英対照による英語学演習シリーズ2 くろしお出
版
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎 (2002) 「非対格構造の他動詞-意味と統語のインターフェイス-」伊藤たか
ね (編) 『文法理論：レキシコンと統語』 シリーズ言語学-1 東京大学出
版会
- 門田修平 (1988) 「視覚提示された英単語ペアの関係判断：正答率・反応時間による
検討」『外国語外国文化研究』11. 関西学院大学
- 門田修平・野呂忠司 (2001) 『英語のリーディングの認知メカニズム』くろしお出版
- 門田修平 (2002) 『英語の書き言葉と話し言葉はいかに関係しているのか-第二言語
理解の認知メカニズム』くろしお出版
- 門田修平編著 (2003) 『英語のメンタルレキシコン』松柏社
- 金水敏・今仁生美 (2000) 『意味と文脈』現代言語学入門4 岩波書店
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15. (金田一晴彦 (編) 『日
本語動詞のアスペクト』 (むぎ書房,1976) に再録)
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト-現代日本語の時間の表現-』
ひつじ書房
- 窪園晴夫 (1995) 『語形成と音韻規則』くろしお出版
- 窪園晴夫・太田聰 (1998) 『音韻構造とアクセント』研究社

- 桑原文代 (1998) 「変化の開始を表す『～はじめる』」『日本語教育』99
- 窪園晴夫 (1999) 『日本語の音声』現代言語学入門2 岩波書店
- 郡司隆男 (2002) 『単語と文の構造』現代言語学入門3 岩波書店
- 言語研究会・構文論グループ (1989) 「なかどめ-動詞の第一なかどめの場合-」『ことばの科学』第2集 むぎ書房
- 国立国語研究所 (1985) 日本語教育指導参考書 12『語彙の研究と教育（上）（下）』
大蔵省印刷局
- 斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究-語における意味と形』ひつじ書房
- 斎藤倫明編 (2002) 『語彙・意味』朝倉日本語講座4 朝倉書店
- 阪倉篤義 (1986) 「接辞とは」『日本語学』6-3.
- 佐治圭三 (1992) 『外国人が間違いやすい 日本語表現の研究』ひつじ書房
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』大修館書店
- 澤田治美 (1993) 『視点と主観性-日英語助動詞の分析-』ひつじ書房
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 城田俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房
- ジョージ・レイコフ&M・ジョンソン (1986) 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）
『レトリックと人生』大修館書店
- ジョン・R・サール (1997) 坂本百大（監訳）『志向性 心の哲学』誠信書房
- 杉本孝司 (1998) 『意味論1-形式意味論-』日英対照による英語学演習シリーズ5 くろしお出版
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』教育文庫3 むぎ書房
- スティーブン・ピンカー (1995) 棚田直子（訳）『言語を生み出す本能（上）（下）』
NHK BOOKS
- 高見健一 (1997) 『機能的統語論』日英対照による英語学演習シリーズ4 くろしお
出版
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店
- 新美和照・山浦洋一・宇津野登久子 (1987) 名柄迪（監修）『外国人のための日本語 例
文・問題シリーズ4複合動詞』荒竹出版
- 寺村 秀夫 (1969) 「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト-その一-」『日本語・
日本文化』1 大阪外国語大学研究留学生別科

- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 中村捷・金子義明・菊池朗 (2001) 『生成文法の新展開 ミニマリスト・プログラム』 研究社
- 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」 『日本語講座第4巻 日本語の語彙と表現』 大修館書店
- 仁田義雄 (2002a) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 仁田義雄 (2002b) 『辞書には書かれていないことばの話』 岩波書店
- 野村雅昭・石井正彦 (1987) 『複合動詞資料集』 国立国語研究所報告
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』 大修館書店
- 日野資成 (2001) 『形式語の研究』 九州大学出版会
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』 くろしお出版
- 水本光美・池田隆介・服田あゆみ (2002) 佐々木瑞恵 (監修) 『例文で学ぶ 助動詞アカデミック・ジャパニーズ 日本語表現ハンドブックシリーズ9』 アルク
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とは何か エスキモー語から日本語を見る』 三省堂
- 松本裕治・影山太郎・長田昌明・斎藤洋典・徳永健伸 (1997) 『単語と辞書』 岩波講座言語の科学3 岩波書店
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』 日英語対照シリーズ1 くろしお出版
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』 松柏社
- 三原健一 (1998) 『生成文法と比較統語論』 日英対照による英語学演習シリーズ3 くろしお出版
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」 『日本語科学』 第8号
- 三原健一 (2003) 『限界的動詞句と「そうする」構文』 大阪外国語大学 授業資料
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
- 森岡健二 (1986) 「接辞と助辞」 『日本語学』 6-3.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- 森山卓郎 (1986) 「接辞と構文」 『日本語学』 6-3.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 山本清隆 (1983-84, 1992) 「複合動詞の核支配」 『都大論究』
- 由本陽子 (2002) 「語彙概念構造の組み替えを行う統語的複合動詞」 伊藤たかね (編)

『文法理論：レキシコンと統語』 シリーズ言語学-1 東京大学出版会
吉川武時 (1989) 『NAFL 選書6 日本語文法入門』アルク
米山三明・加賀信広 (2001) 『語の意味と意味役割』英語学モノグラフシリーズ17 研究社

<英文参考文献>

- Aichison,J. (1994) : *An Introduction to The Mental Lexicon.* (2nd ed.) London. Blackwell.
- Aichison,J. (2003) : *An Introduction to The Mental Lexicon.* (3rd ed.) London. Blackwell.
- Allen, M. (1978) : *Morphological Investigations.* Ph.D. Dissertation University of Connecticut.
- Chomsky , N. (1970) : Remarks on Nominalization. In Jacobs, R. & P. Rosenbaum. (eds.):*Reading in English Transformational Grammar,* Ginn.
- Di Sciullo, A-M & E Williams (1987) : *On the Definition of Word.* MIT Press.
- Goldberg, A. E. (1995) : *Constructions.* University of Chicago Press.
- Grimshaw,J.(1990) : *Argument Structure.* MIT Press.
- Hopper,P. J.and E. C. Trarugott.(1993):*Grammaticalization.* Cambridge University Press.
- Jensen, J. & M. Stong –Jensen . (1984) : Morphology Is in the Lexicon!. *Linguistic Inquiry* 15:3
- Kahayia, E.C.D. & G.L .Piggot(1984):On the Repetition of Affix by A Grammatic Aphasic. *McGill Working Papers in Linguistics* 2:1.
- Kiparsky, P. (1983) :Word-Formation and Lexicon. F.In Ingemann. (ed.).1982 *Mid-American Linguistics Conference Papers*, University of Kansas.
- Lakoff,G and M. Johnson (1980) : *Metaphors We Live by.* University of Chicago Press.
- Lieber, R. (1992) : *Deconstructing Morphology : Word Formation in Syntactic Theory,* University of Chicago
- Lipka, L. 1990. *An Outline of English Lexicology.* Niemeyer
- Nakau, Minoru . (1973) : *Sentential Complementation in Japanese.* 開拓社
- Polleard,C.J & Sag. I.A(1994): *Head-Driven Phrase Structure Grammar.* University of Chicago Press.

参考文献

- Ramat,A.G and P.J.Hopper.(1998):*The Limits of Grammaticalization.* Jhon Benjamins.
- Sapir,E.(1949) :*Language.* Harcourt Brace.
- Selkirk,E. (1982) :*The Syntax of Words.* MIT Press.
- Tagashira, Yoshiko (1978) :*Characterization of Japanese Compound Verbs.* Ph.Ddissertation, University of Chicago.
- Tenny,C.L.(1994) *Aspectual Roles and The Syntax-Semantics Interface.* Kluwer Academic Publishers.
- Trought,E.C.(1988):Pragmatic Strengthening and Grammaticalization. *BLS14.*

<辞書>

- 新村出 (編) (1999) 『広辞苑』第5版 岩波書店
- 松村明・三省堂編修所 (編) (1999) 『大辞林』第2版 三省堂

謝 辞

本論文を執筆するにあたって、まず、何よりも主指導教官の三原先生に深い感謝の意を表したい。考えていることを上手く人に伝える技術がなかった私に、三原先生はひとつひとつ学問の基礎を教えてくださった。お世辞にも、決して出来の良い学生ではなかった私に、三原先生は時には厳しく、時にはやさしく、議論するということはどういうことかということを、自らの姿勢をもって示してくださいました。相手の意見を理解し、自らの意見をわかつてもらうという楽しさに目覚めたのは、三原先生の下についてからである。それまで、考えていることが上手く伝わらずにもどかしい思いをしていましたが、徐々に自分の考えを語る「ことば」が増えるにつれ、学問をするのが飛躍的に楽しくなっていった。このように、学問的に三原先生から得たものは計り知れないが、それ以上に、深い影響を受けたのは先生の学問に対する真摯な姿勢である。先生の授業に対する情熱は、学者としての自分自身の理想となるであろう。

私は大学と大学院を通じて、三原先生を含めて3人の先生に指導していただいた。

最初の指導教官は松蔭女子学院大学でお世話になった下田美津子先生である。下田先生は、私に日本語教育と言語学という大きな2つの世界を与えてくださいました。また、卒業した後も、陰になり日向になり、常に励まし続けてくださいました。下田先生がいなかつたら、今の自分はどうていここにはいなかつたであろう。

二人目の指導教官は大阪外国語大学の堀川智也先生である。海のものとも山のものともわからない私を拾ってくださいり、言語学は楽しいということを教えてくださいました。私の言葉足らずな思考や論文に根気強く付き合ってくださいり、深い洞察力で救ってくださいました。研究が行き詰った時、堀川先生の話を聞くと、目から鱗が落ちることが多々あった。

振り返ってみれば、この大阪外国語大学で過ごした時間は今までの人生で一番充実した時であった。この時間を与えてくださいました日本語講座の先生方には、心からの感謝をさげたい。副指導教官の杉本孝司先生と、田野村忠温先生には、博士論文がぎりぎりまで仕上がりなかつたことで、結果として多大なご迷惑をおかけすることになってしまった。この場を借りてお詫び申し上げたい。

博士論文を書くにあたって、大阪外国語大学の友人にも本当に助けられた。三原ゼミの

友人である堤良一氏、睦宗均氏、石橋玲央氏、博士課程の友人である、森篤嗣氏、中崎嵩氏、川嶌信恵氏には、様々な機会に話を聞いてもらい、アドバイスをいただいた。そして、DRAGANA SPICA 氏には議論だけでなく、英語に関して大変お世話になった。

お世話になった人、一人一人のお名前をすべてあげることはできないが、ここに感謝の意を表したい。

この論文が書き上がったのには家族の励ましも大きかった。大学院に行かせてくれた両親はもちろんのことであるが、妹、野村京子は彼女の専門の脳科学についてのアドバイスをしてくれただけでなく、論文作成のために大きな助力をしてくれた。

そして、最後に最大の感謝を夫に捧げたいと思う。人より1年長い4年間の博士課程の間、好きなことをやる自由をくれたばかりではなく、常に暖かく見守り、勇気づけてくれた。彼の協力無しではこの論文はとうてい出来上がらなかつたであろう。

心からの感謝とともに、この論文を夫に捧げたいと思う。